
かみ・つき

B-POP

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かみ・つき

【Nコード】

N7035X

【作者名】

B・POP

【あらすじ】

「青春、したくはないかね？」
意味不明の勧誘文句で千古修太郎せんこしゅうたろうは、同じクラスの天王寺美緒てんのうしみおが部長を務める「超科学部」なる謎の部に入部させられた。科学を超え、魔法を実践する部活ということだが、もちろん魔法なんて信じていない修太郎。しかし、それを嘲笑うように召喚魔法の実験は成功。『自称神様』のカナメを召喚してしまう。

青春？ 開始

忍者のように足音を忍ばせ、暗殺者のように存在を消して廊下を歩く。

「ねえ？　なんでこそこそするのよう？」

「うつせ、黙ってる。カーちゃんにばれたらぶっ殺される」

リビングからテレビの音が聞こえているが、これが消えるとゲームオーバーだ。

「なんでえ？」

「何でじゃねえ。あの女は鬼だ」

決して大げさなんかじゃない。あの女のパンチをまともに食らう勇氣なんか、十六になった今でもこれっぽっちも湧いては来ない。こんな時間に外をほっつき歩いてしたことなんかは、日には、死刑確定だ。

部屋までの残り数歩を風のように駆け抜け、廊下のきしむ音に心臓まできまして、ノブに手をかける。最後の最後まで気を緩めるな、そう言い聞かせながら扉を開ける。

ぎりぎりセーフ。

部屋に戻ってきたところで緊張の糸が切れた。後ろ手に閉めた扉の音が、今だけはゴールのファンファールのように聞こえる、というのも決して大げさじゃない。

ため息を吐き出すと、一緒に体を支える力まで垂れ流しているように、その場にべったりと尻もちをついてしまった。梅雨も近づくと五月の末ともなれば、フロアリングの冷たさが尻に心地よい。

そこで初めて電気をつけていないことに思い至って、俺は手を伸ばして電気のスイッチを探る。が、どうにも高さが足りないらしく、指先はむなしく壁をなでるだけだ。

「これえ？」

不意に頭上から降ってきた声とともに、六畳の部屋に蛍光灯の安

つばい光が充満する。

目を瞑ってもベッドに倒れこめるほどに見知った部屋なのに、吸い込む空気は他人行儀だ。微かに混入した甘い香りは、思春期男子からしてはならない。したら気持ち悪い。

「ああ、ありがと……って、はあ？」

声よりも匂いに反応したのは別に匂いフェチだからでもなんでもない。間違っても、ああいい匂いだできれば鼻を近づけて全力でかぎ続けたい、なんて思ってない。断じて。

「はい？」

目の前にはきよとんと見開かれた大きな瞳が二つ、こちらを見下ろしている。いや、それはいい。目を見て話すのはコミュニケーションの基本だ。ただ問題なのは、ここが俺の部屋で時刻はすでに十一時少し前で、俺が思春期男子だということだ。

つまりどうということかというと、

「何で、ついてきてんだよ！」

目の前にいるのが美少女だということだ。

「ん。だってえ、あなたはもう、あたしの下僕なんだよう」

そう言やそんなやり取りをした気もするが、混乱しすぎて記憶を呼び出せない。

距離が近すぎて全体像は見えないが、真ん丸い目や人懐っこそうに垂れた眉毛は美少女の要素としては十分だ。しかも、瞳は見たこともないほどに透き通った、きれいなガラス細工がそこにはめ込まれているようで、見れば見るほどに吸い込まれそうになる。

自信なさそうに垂れた目じりと尖らせた唇に、何をしたわけでもないのにこちらが悪いことをした気になってしまう。それでも顔立ちは思わず見とれてしまうほどだ。わずかにピンク色を帯びた肌は、つつかなくてもぷにぷになのが想像できる。

そういえば廊下を歩いているときにもずっと声がしていたな、気配を殺すのに夢中だったからすっかり気がつかなかったけど。

「なあ、聞いていいか？」

「ん？」

「廊下でもずっと、こうやってお話してたよな」

「うん」

「声も殺さずに」

「話してたよう。普通に」

「つてことは、リビングまで聞こえてもおつかしくねえよな、たぶん、おそらく、想像もしたくはないが」

「たぶん、じゃないかなあ？」

脂汗が音を立ててうなじを流れている。やけに部屋が暑く感じるのは、自分の体温が下がっているからだ。雪山で凍死する理屈ってこれだよな。

「いい度胸だな」

「は、はひい！」

考えるよりも早く体が動いた。直立不動、絶対服従。これが生き残るための最善の術であることを、本能が知っている。いや、実際何をやっても死ぬんだけど、せめて死ぬなら最低限の苦痛がいいだろ？ 無駄な抵抗は苦痛を増やすだけだ。

「夜遊びの上女連れ込むって、どういう了見だ？ しかもお前、とつとつロリコンに」

「こ、これには、事情ございまして」

ゆっくり、上半身を動かさずに振り返ると、何よりもまず怒りのオーラが見えた。そんなものが見えるはずがないと思っっているのなと思えばいい、俺には見えたのだ。真紅に燃え盛る怒りの炎が。

「子の不始末は親の不始末。きつちりケジメつけさせてやんよ」

「い、いえ、これ、これこれ、こ」

掌が振り上げられ、顔面に炸裂するまでの一瞬の映像が、やけにスローモーションに見えたのだが、だからといってアイアンクロウの威力までスローになるはずもない。

こめかみにめり込む圧力を感じながら、俺は少しだけ記憶のねじを巻き戻してみる。今見ているものが走馬灯ではないと信じながら、

少しだけ過去に思いをはせる

どうしてこうなった？

神がこの世にいるのなら、なぜ俺にだけこんな仕打ちを……いや、違うな。

神がいるせいでこうなったんだ。畜生。

「シュータロー、今日暇だろう？ 放課後付き合いたまえ」

六時間目の終了のチャイムも鳴らないうちからワイシャツの襟首をひっ捕まえてこんなことを言うのは、クラスに一人しかない。

いや、クラスどころか学校中でも一人だけだ。全国でも片手の指で足りると思いたい。

振り返っても共犯にされるだけなので、あえて無視。後ろの席だからというよしみでお話してやるのは休み時間だけだ。

「シュータロー、聞こえているのだろう？ やばいだよ。近日中にどうにかしなければならん問題があるのだ」

大仰な物言いに惑わされてはいけない。無視。

「シュータロー、先週の木曜にコンビニでこっそり買っていたあの本、なんと言ったかな？ たしか『ガチベツピン』とか」

「何だー天王寺、水臭いぞ！ 用があるならあるとそういつてくれれば！」

なぜ知っている、完璧な隠密行動だったはずだ。何のためにチャリで片道一時間もの道のりを走破したと思っている。

「だから用があると言っている。そんなやましい本なら買わなければよいものを」

言いながら、天王寺美緒は自慢の胸を両腕で挟み込むようにして机の上で悩ましげなポーズを取っている。どうしてブラウスの襟がこいつだけタータンチェックで、スカートにスリットが入っていて安全ピンで留められているのか。すべては天王寺美緒だからだ。こんな改造制服、ほかの人間なら絶対に許されない。いや、こいつとて許されているわけではないはずなのに、何故か生活指導につかま

っているのを見たことがない。

本については、買わずに済むものものではないから。否、買わねばならぬ本だからこそだ。と思いつながら、おくびにも出さずに冷静に対処する。必要なのは冷静さだ。

「で、何のようだよ」

「青春、したくはないかね？」

「何言つてんだ、いきなり？ そりゃ、したいかしたくないかって言われると」

ちらりと、俺の視線が無意識にそちらを向いてしまう。

二つ前三つ左の席。シートカットにセルフレームの眼鏡がトレードマークの、クラス委員。真剣に授業を聞く横顔は、こちらに気づく様子など微塵もない。

「君は想像以上に素直だね」

「うっせえな。そもそも何だよ、その「青春する」って。そんな動詞ねえよ」

ねえが、心惹かれるかと言われると……じゃない！ 何をばかなことを。

ほんのわずかでも美緒の言葉に耳を貸してしまった自分が、猛烈に恨めしい。そこまで自分が思い詰めていたのだとすると、末期症状だ。何の末期かは知らないが。

「青春、してみないかね？」

「意味わかんねー」

どうやら俺の後ろの席は、日本語の通じない異次元に通じているらしい。何だよ、いきなり声かけて「青春」って。宗教かつーの。「とろけるほどに甘くって、ちょっぴりほろ苦い。プリンのような青春だよ」

「とろけるほどに……ほろ苦い……」

そんな青春が俺にも訪れる。そう思うと、ごくりと一回では飲み干しきれない生唾が湧きまくる。興味は、ないわけじゃないけど。

「いやいやいや、ないないない。ましてや美緒の誘いで」

「今日の放課後、科学部の部室に来たまえ。そこで話す」

人の話は最後まで聞けよ。そういえばこいつ科学部だったか。あまりに傍若無人に好き放題するものだから、先輩部員がもてあましているのをこの一学期前半だけでも何度となく見たのを思い出す。

可愛そうに、晴れて新入部員（しかも女子）が入ったと思ったら歩く爆弾だもんな。同情を禁じえないが助け舟は決して出さない。二次被害をこうむるのは目に見えている。

「なんか嫌な予感しかしないんだが」

「ノープロブレムだ。私が君に迷惑をかけたことがかつてあったかね？」

「この二カ月弱の思い出アルバムはそれ一色だ」

授業中に話しかけてはへんてこな会話に巻き込み、休み時間にはよくわからん独自理論を語られ、何だかわからん活動を手伝わされたこともあった。迷惑百%だ。

「というわけだ」

「どーいうわけだよ！」

「ん、うん！」

ひととき大きな咳払いが会話を断ち切る。六時間目の地理担当、海老沢が気の毒な生き物を見る目でこちらを睨み付けていた。

「あのな、そういうのは普通チャイムが鳴ってから」

別名へび沢。絡みつくようなねちっこい説教が得意技という、敵にも味方にもしたくない男だ。だから三十五歳独身なのだと言うと説教が倍になるといふ噂は本当だろうか。

と、そこにタイミングを計ったようにスピーカーがノイズをこぼし、本日の授業終了のチャイムを盛大に吐き出す。このチャイムが一番心地よく聞こえるのは俺だけじゃないはずだが、今日だけはわけが違う。

「すまん、俺には一秒たりとも無駄にできる時間はない。話なら後日」

「ああ！ シュータロー、どこへ！」「こら、話はまだ」

へび沢の粘着質な声と、美緒のあまり焦りを感じない声が背中を引つ張るが、そんなもの振り切るようにダッシュする。帰宅準備は六時間目が始まった時には完了していた。

「悪いな天王寺、俺は今日も帰って店の手伝いさせられるんだ。サボったら殺される」

母親の営む小さな喫茶店を手伝う。響きだけは穏やかで良好な親子関係を想像させるが、その実そうではない。主人と奴隷の契約をそう呼ぶ人間がいれば話は別だが。

「驚きだよ」

背後からの声に「何が？」と半笑いで聞き返したところで、手首に激痛が走った。

そして、

「私から逃げられると本気で思っているのが、だよ」

天地がひっくり返った。床がとんでもない速度で頭上を通過し、蛍光灯がつま先を掠めるように高速で流れる。脳みそが偏って、血液が体の末端に音を立てて集まった。

そして次の瞬間には、スリッパの底が廊下を捉えて元いた位置に立っているが、三半規管はすっかりバカになっている。まっすぐ歩けずによれよれと壁側に曲がってゆく。

手首だけが、しっかりと美緒にホルドされたまま。

うかつだった。完璧な脱出計画だったというのに、美緒の身体能力を計算に入れ忘れていた。人間離れした体力と、常識と理性の欠落した知力、これを兼ね備えた危険人物。それが天王寺美緒だ。普通に走って敵うはずがない。

「失敗だ。殺される」

「どの道逃げ切っていれば私が呪い殺していたよ」

こいつの場合は本当にやりそうだから笑えない。

「ささ、遠慮はいらない。我が城にご招待だよ、期待のホープ君」
「ずるずると引き摺られる姿に視線が大集合だが、そのどれもが哀れみと好奇心を緋い交ぜにして、好奇心だけ特盛にしたような目で

俺を見てやがる。そりゃそうだろう、美緒の奇人変人っぷりを知らない人間は、この満貫寺高校はおろか、一色市を隈なく探してもいいはずだ。いたらもぐりかスパイだ。

「いや、スパイなら真っ先に知ってるか」

「何を言ってるんだい？ さあ、ここが今日からの君と私の愛の巣だ」

「おい、お前の辞書に愛なんて言葉あんのか？」

あつたとしたら間違いなく誤植だ、とはあえて言わなかったが、美緒は満面の笑みで自慢のブロンドをばさりと揺らす。もちろん純粹な日本人である美緒のそれは染めているものだが、艶やかさは地毛だといわれても信じられるレベルだ。ストレスがない人間というのは、髪まで健康だとはなんとも皮肉だ。禿でお悩みの全国のお父さんに謝れ、といいたくなる。

「きちんと存在しているよ、失敬な。愛ほど有効な駆け引きの材料はないよ」

予想通り『愛』の文字が欠落した辞書を持っているようで、安心した。

「で、この……何だこの部屋！ カオスみたいになってるぞ。これ、本当に科学準備室か？ かき混ぜたら日本列島ができるぞ、これ」

「君はしょーもないところで博学だな。まあ、だから面白いんだが」

到着した科学部部室は、日中は科学準備室として使われているはずの部屋だったのだが、どう見てもその機能は失われているとしか思えない。少なくとも、科学準備室に曼荼羅や謎の巻物や何やら怪しげな像があつてはいけないと思う。

「帰る」

直感でいろいろと感じ取った上で、見なかったことにするのが最も懸命だと即決する。今帰ったところすでに母親の愛のお仕置き（人間サンドバックの刑）は決定しているのだが、これはさらにやばいにおいがする。何というか、神ならぬ人の身で踏み込んではいけない領域というやつだ。

はつきり言うと、俺の健全で安全な高校生活を著しく害する何かだ。まあ、最初っからそんなもんはないけどな。喫茶店で奴隷のように働く人生なんだ。

「何を言う」

「どうやら手遅れだったらしい。」

両肩に万力のような締め付けを感じたが、体は全力で逃走を推奨する。心はすでに逃げ出していて、この場所にはない。

「ようこそ、科学部へ。部活に青春してみようじゃないか、シュータロー」

目の前に一枚の紙を取り出されたので、うかつにもその内容を読み取ってしまい、がつくりと全身から力が抜けた。部活で青春なんて意外と普通だとかそういうことではない。そんな程度で脱力するような鍛えられ方はしていない。悲しいかな。

その紙は公式な書類で、タイトルは『入部届』といった。記入日は本日、記入者は俺。ご丁寧に拇印まで押してあるが、アレは間違はなく本物だ。見なくてもそう思えるのは、紙を持っていたのが天王寺美緒だからだ。

「というわけだ。ようこそ、科学部へ」

偽造の匂いがぶんぶんする入部届けに判子を押した顧問には、未だまで子孫が禿げる呪いをかけることを決意した。今の顧問は禿げているので、効果はなさそうだが。

「何で俺が入部すんだよ？　ってか、急ぎの問題があるとか何とか言っただけか？」

「ああ、そんなことも言っていたな」

ぶっ飛ばすぞ、と思いながら眉間に皺を寄せて目を閉じる。ゆっくり深呼吸をして、冷静になれと心の中で三回唱えてから口を開く。そうしないと罵詈雑言しか出てこない。

「そのために呼ばれたのに、なんで入部なんだよ？」

「突然二年生が退部届けを出してしまっただけ。部員不足で科学部がなくなりかけているのだよ。緊急事態だ」

「そうか」

朗報だ。このままなくなってしまうえば先ほどの失態も帳消しになるどころか俺の高校生活は安泰だ。できれば俺はこの『緊急事態』とやらをバックアップしたくなる。

「ん？ 今何か、『朗報だ。このままなくなってしまうえば先ほどの失態も帳消しになるどころか俺の高校生活は安泰だ。できれば俺はこの『緊急事態』とやらをバックアップしたくなる』みたいな顔をしなかつたか？」

「わあい、ここまで心が読まれると自分がサトラレになった気分だぜ」

目の前にいる悪魔が、人の心を読む妖怪『サトリ』であるぐらいなら、俺が妖怪『サトラレ』であることを認めるほうが百倍世界のためだ。

「何を言ってるのかわからないが、あと一人必要なだよ。部を存続させるには最低三人の部員が必要になる」

「で、俺が入部させられたってわけか。迷惑な話だが良かったな、俺みたいな鴨がいて。これで廃部を免れたじゃないか。クソ、これじゃ俺は青春ポツシュートじゃねえか」

まあでも、これで不足分を補ったということだし、幽霊部員でもかまわないというのなら名前を貸して恩を売っておくのも悪くない。「何を言ってるんだシュータロー？ だから緊急事態だといっているだろっ？」

「わかつてるよ。だから名前ぐらい貸してやるって言ってるんだろ。つてか、もう入部したことになってんだし、かんけいな」

「だから言ってるだろう、あと一人必要なのだと」
脳みそが軋む音を初めて聞いた。

確かに頭がいいほうではないが、それなりに十六年生きてきた自負はある。なのに、目の前の展開が全くわからない。目隠しで歩く迷路のようだ。

「ん？ だって、二年がやめたんだろ？」

「そつだよ」

「で、部員が足りなくて廃部の危機なんだから？ 少なくとも、三人必要で」

「そう言ったつもりだが？」

「で、俺が入っただろ？」

「だから言ったじゃないか、あと一人、と」

空恐ろしい想像が頭の中を駆け巡り、それを否定するための要素を必死になってかき集めてみるがどうにもうまくいかない。妙に鼓動が早くなっているのと、足元がおぼつかないのとでふわふわと浮いているようだ。

「さあ、一緒に新入部員を確保する方法を考えようじゃないか、我が科学部、いや」

あえてそこで一拍おいた美緒は、にやりとほくそ笑んだ。吊り上げられた唇と、細められた切れ長な目が妙に妖艶で、科学者というよりは魔女といった風体だ。部屋の力オスツプリと合わせて雰囲気は完璧だ。何も知らない思春期男子なら、その美貌と驚くべきプロポーションに、一秒で恋に落ちるだろう。

「超科学部に」

そして、瞬き一回の間にその恋は冷めるだろう。

「つまり、科学部でめえ一人になったってことじゃねえか！」

「超科学部だ」

「どつちでもいいわ！ んなことより、それだったら先にもう一人探してきて、それから俺を誘えよな。そしたら名前ぐらいは貸してやったぞ」

「何を言ってるんだ？ 君はもう科学部、おっと、超科学部員なのだ。ともに人類の最先端である科学を超越し、魔術の域にまで高めるために人生をささげるのだよ」

信じられないが、これを言っている美緒の顔は百パーセントの本気だ。どこか途中に笑いどころが挟まっているのだろうと愛想笑いを作りかけたが、思いのほか厳しい視線で心を貫かれた。

本気だからこそそのやばさに、今更ながら一度でも首を縦に振ったことを激しく後悔する。もし人生で一度だけタイムマシンが使えるなら、あの瞬間に戻って、ハリウッドアクションばりに窓を突き破って逃げ出すようにアドバイスをする事請け合いだ。

「それに、部員確保は多少なりとも手伝えるとしても、本格的な部活となると難しいぞ」

全力で後悔してしぼんだ気持ちの向こうで、冷静に事態を考える自分がそう言った。

「と、言うこと？」

「俺んちが喫茶店やってんのは前に言ったと思うけど、放課後はそっちの手伝いしなきゃだから、本格的な部活となるとちよっと時間か」

この時ばかりは、帰宅と同時に始まる奴隷のような労働タイムがあったかった。これを口実に、超科学部なるよくわからん活動に巻き込まれずに済む、という寸法だ。

「そうか。では、君の母親に許可を取らねばならないということだね」

「そういつこつた」

まあ、百歩譲って部への所属を許しても、あの女がみすみす奴隷を手放すはずがない。というわけで、この駆け引きはおれの勝ちだ。悪いな、天王寺。

「すまん、俺も部活動そのものはやぶさかでは」

ポケットから出てきた二枚目の紙切れは書類でも何でもなく、ただのA4コピー用紙だったが、破壊力は先ほどの比ではない。そこにはただ一言、こう書かれていた。

『 やっていい』

「あんのばばあ！」

筆跡はまぎれもなく、毎日店のお品書きで見る字だ。紙の右下には、大好きなうさぎの絵が本人の鬼具合とは不釣り合いな、凄まじいかわいらしさで描かれている。ちなみに、『 やっていい』の上に

失敗したのをごまかすように塗りつぶしている個所があるが、『殺』と書きかけて誤魔化した跡が透けて見えている。

「そんなもん、しかし俺にだって部活選ぶ権利が」

『くちごたえすんな』

二枚目の紙を突き付け、勝ち誇ったように天王寺が口元と胸もとを釣り上げる。第二ボタンのあいたブラウスから飛び出す、グラウンドキャニオンの様な谷間に目を奪われる。

「というわけだ。ともに頑張ろうではないか、シュータロー」

差し出した手が、しばらくは握手を求めているものだとはいえずに呆けていたが、心の整理がついたところでようやくその手を握り返すことができた。

簡単な話だ。新しい奴隷契約で、主人が変わっただけだ。

鬼から、魔女に。

こうやって、甘ったるいほどに甘くちよっぴりほろ苦い、その上ちよっと黄ばんだ大事件の幕が上がったわけだ。上げるんじゃないかな、とタイムマシンがあればそんな感想も伝えに行けるけど、ないのでどうしようもない

こうして俺は、青春から最もかけ離れた場所に引きずり込まれたわけだ。ちくしょう。

ようこそ？ 超科学部

「というわけだ」

「お前の「というわけ」は前後の文章が全くつながらん」

青春没収残酷ショーの翌日。俺はまた脱出に失敗して何らかの攻撃を食らって意識を失い、気がつけば教室の床の上に転がされていた。記憶に連続性がないことがこんなに恐ろしいとは思わなかった。純粹に、生きていることに感動したのは貴重な経験だ。

「俺に何をした？ どんな攻撃を食らった？ 記憶では下駄箱にいたはずだぞ」

思いついたのは、時間が何度もループする世界でどうやっても教室に引き戻されるというシニールな設定。決して学校から脱出できない主人公。イヤすぎる。

「さておき、新入部員確保作戦を考えなければならぬ。何かいい案はないかね？」

大仰なもの言いだ、演技っぽさが無いのがすごい。外見はもつと高飛車というか高慢ちきというか、そんな喋り方をしそうなのに、口を開けばどこかの研究者か博士の様な口調。しかも、それで違和感がないのだから変な奴だ

「いい案もへつたくれも、そもそも俺は部に入るなんて一言も」

『くちごたえすんな』

「くっ」

目の前に突き出されたコピー用紙の破壊力に本能が屈する。

「っても、マジでなんも思いつかんぞ。そもそも俺、この部が何やってるかもわからんのに、こんな五月も終わるうかって時期に新入部員確保なんて、難易度高すぎだ」

実際問題、この部が何をやっているにしても、ほとんどの一年生が部活をするのか帰宅部として日陰に生きるのかの選択を終えてい

るはずだ。となれば、今更帰宅部の覚悟を決めたものを部活に誘う難易度はかなりのものだし、ほかの部からのヘッドハンティングなどもつてのほかだ。好んで天王寺に関わるうなんていう奇特な奴はこの満貫寺にはいない。これは自信を持って言える。

「あの」

「言ったではないか、科学の域を超え、魔術にまで至ることが目標……と、誰だね？」

床に芋虫のように転がる俺と、机に腰掛けて女王様のように足を組む美緒が、同時に声のした方を振り向く。と言っても、俺の場合はほぼ体の自由がないので、かろうじて視界の隅にスカートが見えた程度だけど。美緒とは対照的な、無改造な膝下のスカート。

「鍵、閉めたいから、そろそろいい、かな？」

「うっかりすると外の喧騒にも負けてしまいそうなささやかな声。」

「何だ、委員長君じゃないか」

クラス委員の吹水杏子。眼鏡をかけたおとなしそうな外見に、ついたあだ名が委員長。ベタな命名だが、似合っているとも思う。

「話してるとこ、ごめん。鍵、閉めたいから」

教室の施錠のためにわざわざ待っていてくれたのだろうか。だとしたら、たとえ主犯は美緒だとしても悪いことをした。

(この時間にここにいて、部活とかしてないのか?)

「ああ、すまないことをしたね。では行こうか、シュータロー。続きは部室でだ」

「おい、痛い痛い！ 紐付けて引っ張んな。行く、行くからほどけ歩かせろ！」

「ごめんね、大事な、話なのに。部活？」

「かまわないよ。どのみち部室には行くつもりだったからね。それより君は部活動に興味はないかね？ たとえば魔法とか。何なら魔王でも魔人でも呪術でも」

「え？」

この魔女は、目につくものすべてを巻き込んで災厄を振りまくつ

もりか。さすがにそれは防がなければならぬ。ましてや相手は、あの気の弱い吹水だ。

「おい美緒！ 委員長巻き込むなよ。気にすんな、この部は早々に廃部になった方が人類のためだったたた、痛い！」

縄の締め付けが引つ張るほどに強くなり、問答無用で食い込む。むちゃくちゃ痛い。

「部員、募集してるの？」

「ああ。よんどころない事情により人材不足でね。廃部回避のために東奔西走中だよ。あと一人、有用な人材がいれば紹介してくれないかい？」

「何がよんどころない、だ。ほとんど自爆みたいなもんがあれただだっただ」

くそう、絶妙な力で食い込む縄が、的確に痛覚を刺激しやがる。

「委員長も、今の話なんて真に受けなくていいからな。世迷言だよ、世迷言。春だから」

「言ってくれるね、シュータロー。ならば君の委員長君を見つめるその瞳も年中春真っ盛りということだ」

「やあつかましい！ ほら、部室行くんだろ部室！」

このボケ、どこでそんな下らん情報を。そりゃ、かわいいと思うし、何つつか、おとなしそうな感じとかもなんかほっとけないっていうか。でも、それだけだ、断じてそれだけだ。それだけなんだよ！
「美緒、すごいね。いつも。たのしそうで……いいな」

どこをどう見てるんだ？ こいつはこいつで独特の感性してるのかもかもしれないな。

にしても、美緒のモデルばりの笑顔つてのもすごいと思うが、吹水のは何とも柔らかいというか、見ていてこちらも自然と笑顔になるような、

「それは君の主観が多分に含まれているよ、シュータロー」

「何故心が読める。読むな」

これが、あながち冗談として笑って切り捨てられないのが、こい

つの恐いところだ。

「では、我々はこれにて失礼するよ。もしも部活動に興味があったら、いつでも来てくれたまえ。科学準備室はいつでも有力な人材ならウエルカムだ」

まあ、来るんなら、ウエルカムだけだな。嬉しくないこともない。「素直ではないことはなはだしいね、君も」

「声に出していないことに返事をするなっつってんだろ、だから」
なんとも奇妙な表情で見送られながら、俺たちは教室を後にした。できればこのまま学校もあとにしたかったが、どうせそれは叶わないだろうな。縛られて両腕の自由を奪われたまま歩くさまは、囚人が犯罪者逮捕の瞬間かという感じた。市中引廻しですら馬に乗せてもらえるというのに。

なんてわが身の不遇を呪っていると、これまたデジャヴのように俺の前に現れた科学準備室。残念ながら到着してしまったようだ。

扉の上につけられた札は、既に『超科学部』だ。にしても、きつたねえ字だな。

「君の趣味がああいうタイプの、おとなしい女性だとはね」

「意外だったかよ。いいだろ、俺がどんな青春を所望しようが」

天王寺美緒に関わる限り、いくら望んでも手に入らないけどな。

「意外ではないが、君が女性をリードするタイプには見えなかったのね。くつついた時にどうなるのか、興味は尽きない。それに言っただけだが、君の青春はここにある」

あるわけねえ。

それと、さらっとドキドキするようなことを言うな。話題転換話題転換、と。

「んで、具体性ゼロでわからんのだが、なんだよその『魔術に至る』って。科学部のくせに魔法使いにでもなる気かよ？」

ようやくロープから解放された俺は、手首についた縄の跡をさりながら美緒に問いかける。縄の跡って、こんなもんに見られたら変態認定されかねない。それだけは絶対に避けるべきだ。

「君はなかなか物事の本質をつかむのが得意とみた。期待していた以上の逸材かもな」

どんな期待をされていたのなんて聞きたくもないが、ポイントを上げずに、役立たずの烙印とともに放流される日を夢見る俺としては大失態だ。株が上がってしまった。

「わけわからんわ。それ、科学じゃねえだろ」

「かのシェークスピアは言った、よく発達した科学は魔法と変わらない、とね。つまり科学は魔法への入り口足りうるというわけだ。科学部が魔法を目指すのはものの道理ということだよ」

驚きだ。しかももう一度言うが、美緒はあくまでも真面目なことから始末に負えない。

謎の攻撃と縄によるダメージのせいでまだふらふらする頭を抱えて起き上がり、俺はできるだけ情けない顔を作って口を開いた。

「あのな、魔法なんぞこの世にあるわきゃねえだろ。あるんだつたら、それこそこの世の科学者全員、明日から箒持って黒猫抱えて月に向かって吠え始めるわ」

さらに言う。

「ってかよ、魔法があるんだつたらその魔法で新人部員を創り出すなり呼び出すなりすりゃいいだろう。RPGの召喚魔法みたいに、

『いでよ新人部い〜ん』ってよ」

言いきって、ドヤ顔で美緒を見て、はっとなる。

先ほどまで意気揚々と超科学部について語っていた美緒の肩がフルフルと震え、俯いて唇を噛みしめている。前髪のせいで目元はわからない。

言いすぎた。

先ほどの表情や何かで美緒が真剣なのはわかっていたはずなのに、さすがにこれはまずかったようだ。まじめに努力する奴に向かって言う言葉じゃない。

「あ、あの、悪い。言いすぎたっていうかあわあ！」

「君は天才だな！」

いきなり弾けるように顔を上げると、華が咲いたような満面の笑みでがくがくと肩を揺さぶってくる。どういうことだ？ 意味がわからんぞ？

「さすがはシュータローだ。いや、さすがの私もそのことには気がつかなかつたよ。はは、素晴らしい、これでわが超科学部の基盤は盤石だ！」

手近にあった謎の像（どう見ても呪いの像とか邪神像といった感じだ）を振り回して、カオスの様な有様の部室を駆け回っているんだから、よっぽど嬉しいんだろうが、はっきり言ってマジでわからない。

「シュータロー！」

「お、おう！」

邪神像を放り投げた勢いで跳躍した美緒が、両手を広げて抱きついてくる。

同じぐらいの身長的美緒に抱きつかれると、ちょうど肩口に当たる柔らかいくせに張りのある幸せな二つの物体に、意識の九割が持つていかれる。このまま死ぬのも男子の本懐かと本気で考えてしまった。

「やはり私の目に狂いはなかつたよ。さあ、忙しくなるぞ！」

そう言つと、子供のようにとび跳ねながら部室の中を駆け回つては、何やら様々な書籍をかき集め、いくつかの汚い巻物やら落書きのような紙切れを一か所にまとめた。おかげで、その他諸々のカオスを構成していた物体は準備室を追い出されて、科学実験室に飛び出して行ってしまったのだが、駄目だろとは言えない。そのぐらい嬉しそうだ。

かくして始まつた天王寺の謎の行動はその後一時間以上ノンストップで続き、下校を促す校内放送が流れるころには、科学準備室に書籍の皆の様なものが出来上がった。

時計を見ると既に六時を回っており、いつの間にかグラウンドからの喧騒もぶつつりと途絶えていた。窓からこぼれるオレンジ色の

夕日に、夏がそう遠くないことを感じる。

「君は意外とロマンチストなんだな」

「何だよいきなり」

本の壁の向こうから聞こえる声は少々ぐもっているが、決して勢いを損なってははいない。むしろ今日一番のはつらつとした声音に、驚きを通り越して感心してしまう。

「夕焼けを見て季節を感じる、これをロマンチストと言わずしてどうするね？」

「じゃあ、本気で魔法なんかを追っかけてるお前のほうがはるかにロマンチストだろ。つつか今何してんだよ？ 俺、帰ってもいいか？」

さすがにこんなところで二時間近くもボケっと座っていると退屈極まりない。だから、窓の外の景色なんかに見とれるような心の余裕ができたと言えなくもないが。

「そのあたりの本でも読んでいてくれたまえ。もう少しだ」

「残念ながら何が書いてあるのかさっぱりだ」

手近な本を手にとって開いてみたのだが、専門用語の様な言葉や見たこともない記号の様な文字が羅列してある書籍は、俺にとって絵を見ているのと同じだ。

「そうか。しかし、もう少しなので待つていてくれないか？ できれば今日中にこの実験は終わらせてしまいたいのだよ。明日が部員募集の締め切りだからな」

「なんでそんなギリギリで行動してんだよ」

「お願いだ」

「わーっつたよ。つつか、お願いすんならその紙出すな」

『くちごたえするな』が終始俺の目の前をちらちらと横移動している。どうにも、あの母親に刷り込まれた本能的な恐怖にあらがうことはできない。鉄は熱いうちに打てというが、まさにこのことだ。幼少期に刻まれた恐怖は今でもしっかりと俺を縛っている。

「ありがたい。持つべきものは部員だな」

「部員じゃねえって、だから」

「と、くつちゃべってる間に完成だ。うむ、我ながらなかなかの出来だな」

本の要塞の向こうに立ちあがった美緒は、何やら一枚の紙切れを取り出す。思わず母親の書いた二枚のうちどちらかではないかと警戒して、体がこわばってしまう。

しかし、どうやらそうではなかったらしく、天王寺が差し出してきたのはアレよりも規格の大きいA2サイズのコピー用紙で、びっしりと文字や数字が書き込まれていた。

「部屋の前の札もそうだけどよ、字いへったくそだな」

「それだけは言わないでくれたまえ。唯一の欠点なのだよ」

唯一であるはずがないが、無駄な議論ほど無駄なものはないと熟知している俺は、美緒の差し出した謎のコピー用紙を一通り矯めつ眇めつしてから一言、こう言った。

「何これ？」

ひねりのない一言だが仕方がない。どれだけ見ても、何なのか全くわからなかった。

ある場所には化学式のようなものが書かれているかと思えば、その隣にはどこの国のものかすらわからない文字が書かれ、その頭の上ではとんでもなく長い数式が円を描いている。さらに反対側を見ているとヒエログリフとナスカの地上絵を足して二で割ったような図柄が記されていて、一見すると抽象画か何かの様だ。

「魔法陣だよ。これはその計算式というか、設計図だ」

これが？　と思わず首をかしげて見るが、横にしても抽象画は抽象画のままだった。むしろ、横にしたせいで謎の度合いを深め、この角度からではこれを描いた画家は発狂していたのではないかという推測まで出来てしまうほどだ。

「魔法というのはファンタジックで直観的なものと思われがちだが、その実、緻密な計算と繊細な力の制御を必要とする、一種のアートの様なものなのだよ」

「一種のアートの様なもの」の部分にだけ同意したのだが、美緒はそれを理解と受け取ったらしく、説明を続けられた。

「その計算に時間がかかったが、もう大丈夫だ。この魔法陣があれば」

くるりと紙裏返すと、なるほど納得だ。そこには「魔法陣」の言葉にふさわしい図柄が記されていた。

A2用紙を最大限に使った真円を最外郭として、その内側にはいくつもの幾何学模様が一定の秩序をもって並べられ、その周囲を謎の文字らしき記号らしきものがぐるりと取り囲んでいる。アニメなんかで見る、魔法が使われるときに空中に描かれる光の文様に近いものだ。これなら魔法陣と認定してやってもいい。

「新入部員は確保したも同然だ。名付けて、『新入部員カモン魔法』だ」

「うわ、ネーミングセンスが神懸かってんな」

もちろん皮肉意外の何でもない発言だったのに、美緒は得意そうに目を細め、唇の端を片方だけ釣り上げる。そして一言、

「だろっ?」

とだけ言っつて、両腕で胸の谷間を強調する。

やっぱりこの女はわからん。

魔法？ 実験

微調整を加えることさらに数時間。美緒の言う「魔法陣」とやらが完成したのはよかったのだが、問題はそれをどうやって発動させるか、にあるらしい。

もちろん俺はそんなもの真に受けてはいない。じゃあなぜこんな実験に付き合うのかというと決まっている。魔法とやらが発動しないことを見届けるためだ。

「うーん、部員一人を召喚するとなるとそれなりの広さが必要だから、科学実験室では無理だ。机が動かせない。となると」

既に日も落ちた廊下は、怪談やら七不思議やらを信じていない俺でも不気味だというのに、美緒は何の気後れもない足取りでずんずん進んでいく。消火栓の赤と非常口の緑ぐらいいしか明かりのない校舎を傲然と歩くマッドサイエンティスト。そんな光景は、B級ホラー映画のように見えなくもない。あ、サイエンティストじゃなくて魔女か。

『マッド・ウィッチ』なんて言葉あるのか？

「いま私の悪口を言わなかったかい？」

「言つてねえよ。それよかどうすんだよ。もう八時前だし、先生とかに見つかると厄介だろ。とくにお前の場合」

別に俺は大丈夫というわけではないが、こういう場合は有名人であればある程旗色が悪くなるのが定番だ。そういう意味で、美緒はこの学校で最も有名といえる。悪名だが。

「うーん、条件を満たす場所が限られるだけに惜しい。できれば魔法行使の際に魔力の補助となる力、たとえば電力や気の力が確保できるに越したことはないのだが、それを考えるとかなり限られてしまつてね。設備も超科学部のものだけでは心もとない。全く、科学部だというのに以前の部員は一体何をしていたというのだ」

むしろちゃんと科学部してたからこそ、お前が困るんだろう。

「じゃあ、技術室なんかどうだよ？ あそこならなんなりと機材あるだろうし、確か教室の後ろにスペースあっただろ」

助け船を出してみる。どうせ途中で抜けて帰れないのなら、さっさと終わらせてとっとと帰るほうがましというものだ。

「名案だな。うん、あそこなら大丈夫だろう。さすがはシュータロ―だ」

人差し指をぴんと立て、窓から差し込む月明かりに頬を照らされた美緒の姿を、迂闊にもきれいだと思ってしまったが、そんな思いも長続きはしない。

相変わらず暗い廊下をしばらく歩くと、廊下の突き当たりに目的の技術室が現れる。

木工や機械工作を目的としている特殊教室で、その性質から防音や遮光性にも優れているうえに工作機械には事欠かない。悪ガキじやなくても子供心をくすぐられる場所だ。

その扉の前に、俺と美緒は立ち尽くす。

「ま、普通はそうだよな」

扉に手をかけて引つ張ると、がこんつ、という重い音がしてそれつきり扉は動かなくなる。当然だが、鍵がかかっているのだ。

「ちゆうこつて、本日の部活はここまで。惜しかったな、せっかくここまで来たのに」

まあ、魔法陣の実験というのにも興味がなかったと言えばうそになる。魔法なんてものが実在すると考えるほど夢見がちではないにせよ、あの美緒ならもしかしたら、なんていう妄想に近い期待も全くなかったわけでは

ばきんっ

踵を返して帰りかけた俺の耳に飛び込んできたのは、鈍い金属音。まあ、この時点で何パターン化の想像はついていたのだが、その中に一つもハッピーエンドにつながるものはなかった、とだけ言っておこう。というか、すべてバッドエンドルートだ。

そしてもちろん、俺の隣にいる最狂にして最凶にして最強最悪の

魔女は、何の躊躇もなくその中で最悪のチョイスをしてくれた。

「さ、中に入るうか」

「さて！ お前、何持ってたよ。ってか、何した？」

何した、って聞くのもおかしいが、それでも聞いてしまうのが人のサガ、情ってもんだらう。いくら目の前で扉のノブが無残にもぶつ壊され、いくら魔女の手にバールが握られていても、聞くのが人の道だと信じたい。

「扉を開けたただけだが、何をそんなに」

「驚くわ！ ってか、何やってんだ、これじゃ俺たち完璧に犯罪者だぞ。なんでバールなんか持ってた！」

「ちがうよ、バールノヨウナモノだ。そう報道しないと、バール業界からマスコミに対するクレームが」

「そんな業界はいい！ バールでもようなものでもどっちでもいいわ！ とにかく」

「大きな声を出すと、警備員が来る」

あわてて口をふさいで背後を振り返る。幸い誰かが来ている気配もなかったが、あらためて自分のコソ泥行為が後ろめたい。

「じゃなくて、んあゝ畜生。俺は無関係だからな」

「あはは、君はジョークのセンスもあるのだな」

バールを肩にかかけ、悠々と技術室に踏み込んだ美緒の背中はずか誇らしげで、こちらが間違っているのではないかという錯覚を引き起こされそうになる。

そこからの三十分は、とにかく速かった。

いつ見回りの教師（そんなものがこの学校にいるのかどうかは知らないが）が来るかもしれないという思いと、さっさと終わらせないと次はどんな事件に巻き込まれるかも知れんという焦りが、俺の身体能力を何割増しにしたのだらう。

気づけば、床には美緒が設計した通りの魔法陣が直径三メートルほどのサイズで描かれ、電源につながれたバッテリーとそこにつながる一対の電極が用意されていた。

時計を見ると午後八時を少し回ったところ。三十分ちょっとでこれだけの作業を終わらせたのには、さすがに驚いた。

「うん、上出来だ。これなら絶対に成功する」

「成功したらどうなるのかはあんまり想像したくないが、まあちゃっちゃとやってくれ」

実に軽くそう言ったのは魔法なんてこれっぽっちも信じていなかったからなのだ。当然、結果なんて見なくても分かっているつもりだった。

「そうだな、もたもたしていて邪魔が入るなどもってのほかだ。始めるとしようか」

言いながら、美緒は電極の片方を俺に押し付け、自分はもう片方を手に魔法陣を挟んでちょうど反対側に移動する。

「私の合図とともに電極を指定した場所に押し当ててくれたまえ。」

成功すれば陣に通電し、その電力を触媒として魔法が発動、新入部員が召喚されるというわけだ」

「わかったから、合図しろよ」

見回りの目を警戒して蛍光灯も付けられていない室内には、窓から差し込む月明かりと、電極につながるコンデンサの動作を知らせるLEDランプのわずかな明かりだけ。あとは夜を切り取ってきてそのまま詰め込んだような闇が、静かに沈殿している。

そのせいで、対面にいる美緒の表情はわからない。うつすら輪郭がわかる程度だ。

ある種の静謐さを感じさせる空気に、まさかとは思いながら息をのみ、はつとなる。

何か期待してたっていうのか、俺。あほらしい。こんな実験ごっこはとつとと終わらせて家に帰る、それだけだ。魔法も発動しなければ新入部員も来ない。俺も晴れて自由の身、万事解決だ。それが俺の予想であり、望みだ。

「では、召・喚！」

「へいへい」

勢いよく宣言した美緒に対して、俺は投げやり気味に電極の先つちよを、床に描かれた魔法陣に接触させる。本来は対極の端子を接触させて放電、通電する持ち運び用のコンデンサなのだが、それはもちろん間に電気を通す物体ないし電力を消費する抵抗あってのとだ。電気を通さないものにくつつけても何も起るはずが、

パシッ！

端子の先に、火花が上がる。

弾けるような音とともに、端子の先端が光に包まれたかと思うと、その光はあっという間に床一面に広がって教室全体を光で包みこむ。「違う、光ってるのは、魔法陣？」

「おお！ 成功だよシューター！。はは、超科学の、魔法の夜明けだよ」

美緒の声も耳に届かない俺は、茫然と目の前の事態を眺めるだけだ。

もう電極を触れさせていないのに光を放つ描線は、魔法陣そのものを宙に浮かびあがらせているように見えた。それだけではなく、魔法陣の裏側からも光が放たれているようで、その光が雲間に差した陽光のようにこちら側を照らしている。

光の帯が、教室に滞留した闇を切り取ってゆく。

その様はまるで、この魔法陣を境にして別のどこかにつながっているようで、

「マジで、召喚、するのか」

その声が聞こえたのか否かは定かではないが、美緒が高々とバールを掲げて宣言した。

「いでよ、新入ぶい〜ん！」

神様？ 召喚

「いでよ」の部分の子供向け魔法少女の様で縁起つぽいアクセントなのに、抑揚がいつもの美緒なのは違和感を禁じえない。が、そんなものは一瞬で吹き飛んだ。

目の前の魔法陣がひときわまばゆく光を放ち、一本一本の線を識別できないほどの光の塊になったところで、一気に教室中にはじけ飛んだ。

「うわっ、まつぶっし！」

とつさに目を覆ったがタッチの差で間に合わず、目を閉じた瞼の裏には、フラッシュの焼き付けのような赤い染みがじわじわと動き回っている。

「やった、成功だよ。見たまえシュータロー、新入部員だ」

喜んでいるのはよくわかるのだが、それでもなお声の抑揚に乏しいというので、声しか聞こえない俺には一瞬どっちなのか判断がつかない。めんどくさいやつだ。

「成功？ なんも見えねえんだが、マジで魔法なんてあんのかよ。そっちのが驚きだわ」

瞼を開いてもまだぼやけて自分の掌も見えない有様だが、とりあえずあの一瞬に教室を満たした強烈な光はなくなったようだ。明暗のギャップで、今は先ほどよりもずっと教室内部が深い闇に閉ざされている。真つ暗闇だ。

「んあゝ、なんも見えねえ！ おい美緒、ほんとに成功したのかよ？」

確かに魔法とやらは発動したようだが、はたしてそれが召喚魔法だったのかどうか、そして成功したのかどうかとなると、どうしても半信半疑になってしまう。確かめようにもこの視界では何を見ることもできない。仕方なしに、先ほどまで美緒の立っていた方を声だけを頼りに特定して、足を進める。

両手を前に突き出して探り探りのゆっくりな足取りの中、徐々に光が戻り始めると、数歩向こうで仁王立ちをする美緒らしき人物のシルエツトが薄らと浮かび上がる。

「おい、成功したって」

見えたことが油断につながった、とは何ともお粗末な話だ。

うっかりそれまでよりも雑に一步を踏み出し、そのつま先が見事に何かに引っかかる。「うおわっ！」

慌てて体制を立て直そうとするが、完全に次の一步を踏み出すつもりだった体はいとも簡単に重力に惹かれて崩れ落ち、

「わきやあ」

床との激突を覚悟していた俺の顔面を襲ったのは、何やらぽによつとした感触だった。

「ぽによつ？ なんだこれ、何も見えん」

倒れたのは間違いなく倒れているのだが、床ではなくどうやら何かを下敷きにしているらしい。柔らかくてふかふかしていて、クッションや布団のような気もしたが、それにしても程よい暖かさや質感もある。

布というよりは生き物の上にいるような感じだ。そう思っている。

「ううう、お、おもいよ〜う」

呻き声は何やらもごもごと訴えかけてくる。

「ん、喋った？」

頭上からの声に目を向けると、うつすらとした輪郭とその中に納まる二つの光が見えた。それが顔の輪郭と瞳だと気づくには、さほどの時間はかからなかった。

俺の下に、人間がいた。さっきまではいなかった、よな？

「だれ？」

「ううう、いいから退いてよあ。お、重い。つぶれちゃうよう」

蚊の鳴くような声に、あらためて自分が誰かを下敷きに行っていることを実感して、慌てて飛びのいた。このころになるとようやく元

通りの視界が戻ってきて、正面で誇らしげに仁王立ちしている美緒の表情ぐらいなら読み取れた。

が、今問題なのはそちらではない。

「なんでいきなり下敷きなのよう。うっ、腰打ったよう」

もそもそと足元で動いているのは、小さな女の子だった。

つややかな黒髪は夜の闇よりも深い黒なのに、月明かりを受けてきらきらと輝いている。顔立ちこそしかめっ面なのでわからないが、小さな口やほっそりとしたあごのラインは人形のようなうだ。

素直に、かわいらしいと思った。

「ひどい目にあったよう、もう。いたたたた……ん？」

目があった。

透き通った水晶のような目は、じっと見ていると吸い込まれそう。本当にお人形さんのガラスの目玉のように艶やかだが、妙に愛嬌があるくりつとした瞳が特徴的だ。

「えーっと、これは、えっと、えっと……」

こちらの存在を認めると、それまでぐずぐずとへたり込んでいたのから一変してキリッと立ち上がり、たすき掛けにしてぶら下げられたポシェットから取り出したメモ帳を読みふけている。

まったく意味不明な行動にこちらがきよんとしているとお目当てのページを見つけたらしい女の子はふんふんと頷き、釣り上げられた口角をそのままに大きく口を開け、

「はぶっ」

「うっおー！」

噛むな！ 首筋をかむな。痛い、むちゃくちゃ痛い、かなり全力で噛まれている。

「いだだだだだ！ 痛い、いたい、何すんだ、この、いでえええええ！」

力づくで引っぺがそうとするが、相当な力で噛みついていて、引っ張ってもむしる歯が体に食い込むだけだ。痛い、とにかく痛い。

このまま首の肉を持っていかれて俺の命は終わるんだ。やっぱりこんなロクでもない部活のロクでもない実験につきあったのが運のつきだったのだ。美緒が召喚したのは新入部員なんかではなく、吸血鬼や悪魔の類で、俺はその生贄としてまんまと連れてこられただけだったのだ。悔しいが、そう考えるとすべてのつじつまが合う。くそう、自分の軽率さが今になって悔やまれる。遅いけど。

軽率さの代償が命という、何とも割の悪い取引を半ば強引に自分に認めさせ、最後にせめて美緒に呪いでもかけてやるうとありったけの怨念をかき集めたところで、

「ぶはあ」

首筋から少女の口が離れる。うああ、なんか鎖骨のあたりがジンジン熱い。

「うん。で、この次は、えと……」

再びノートに視線を落として読みふける。何だこれ？ っていうか、首痛い。

「あ……ああ！ しまった、間違えちゃったよう。うわあどうしよう、どうしよう」

一人で大慌てして、キョロキョロしたりメモのページをめくってみたりと忙しそうだった少女は、俺と目が合うとやたらとおびえたように体を縮こまらせた。そう言えば、なんか間違えたとか言ってたけど、それと関係あるのか？ まあ、間違いじゃなくても首筋を噛むのは解せんが。

「どうしよう、願い事なんて聞いたことなかったから、やばい」
全体的に幼い顔立ちも手伝っているのだろうが、慌てる様子が何やらコミカルだ。ただし、顔のつくりは驚くほど端正で、何度もうかがよくできた人形のようなだ。

「さつきから何言ってたんだ？ てか、こんなとこで何やってんだ？
ほんの少しの沈黙だったが、慌てる姿もどこかほほえましい。

そんな混乱を見かねたのか、それとも単にグダグダ感に耐えかねたのか（おそらく後者だろうけど）美緒が少女に近づいて名乗りを

上げる。

「ここは満貫寺高校。我々は超科学部の部員だ。ちなみに私が部長の天王寺美緒だ」

お前、部長だったのか、ってそりゃ一人しか部員がいなきゃ必然的に部長だわな。

「そっちが我が部のホープにして奴隷、千古修太郎だ」

おい。

「あ、あ、うん。よろしく」

あれ？ 意外にもあっさりとお話してるぞ？ ってか、これは召喚魔法成功ってこと？ 頭の中で一人会議を開催していると、美緒が何やら少女をたぶらかし始めた。

「ようこそ超科学部へ。君が何者かはさっぱり分からないが、君はもう立派な部員だ。我々とともにめくるめく青春の日々を謳歌しようではないか」

高らかに、自信満々に宣言しているが言わんこつちやない。いきなりのテンションについてこれない少女はきょとんとしてしまっているぞ。そもそも、呼び出していきなりお前は部員だなんて、百人中百人がそんな説明わかるはず

「わかったあ」

「わかんのかよ！」

しかもなぜか、意を決したように小さく拳を握って、頷いたりしている。

「君はいちいち突っ込みの細かい男だな」

「そりゃ突っ込むわ。ってか、まずその子誰だ？ なんで俺いきなり噛まれてんだ？」

回答を求める視線を少女に投げかけると、視線を避けるように見事なスウエー動作を見せる。いや、避けられても困るんだが。

「ふむ、確かに何者かぐらいは聞いておいても不便はないか」

「ってか、名前ぐらい聞けよ。なあカナメ」

ん？ 俺、今なんつった？

「えと、その、もう知ってるんだから……いいじゃん」

自信なさそうに俯いて唇を尖がらせている。何かに似ていると思っただら、うちの店に来る親子連れの、子供がすねている姿にそっくりだ。

「いや、いくら神様だからっていきなりそんな不条理が通るわけがなん？ なん？ なに？ 神様？ なんだそりゃ。」

「シュータロー、いきなり何を？ というか、彼女はカナメ君というのか？」

待て待て待て、俺に聞くな。俺だって初対面だって言うのにカナメが神様だなんてこと知ってるわけが、って何だ、なんでこんなことが俺の頭の中にわいてくるんだ。

「ちよ、え？ 何？ 何だこれ、なんで俺がお前のこと知ってたんだ？」

言うまでもないが、目の前でしょぼくれている少女とは初対面だ。それは間違いない。なのに、考えるまでもなく名前や、この子が神様であることがすらすらと出てくる。デジャヴとも違う、奇妙な感覚に錯乱状態に陥りながらも、何とか冷静に、冷静にと自分に言い聞かせる。もちろん、冷静になんてなれるわけがない。

「わ、わたしは、神様だよ。呼び出しておいてひどいよう……いきなり踏んづけられるし。おかげで、間違えてこいつを下僕にしちやっただよ」

自信なさげに右に左に泳ぐ視線に、こちらまで不安になってしまふ。それでも、カナメと名乗った自称神様はおもむろに上目づかいに俺を見つめ、勿体ぶって呟いた。

「へえ……それで、間違えて、なんておっしゃったわけだ。で、俺、下僕？」

「そうだよ。願い事を、叶えてあげようとしたのにい」

「へえ、願い事を……かなえようとしてくれた、んだ」

「惜しいことをしたね、シュータロー」

召喚魔法に、神様に、下僕？ もう、何が何やら勝手にしてくれ

って感じた。俺の理解の許容量は大幅にオーバー。器は爆散してして跡形もない始末だ。願い事って、んなこと今更言われても、って感じた。でもこいつが嘘を言っていないことは、頭の中でしつかりと裏付けられている。裏付けのないものに、だけどな。

とりあえず俺は、がくりと肩を落としてうなだれておいた。いや、そうしないと体と心のバランスを保つことができなさそうだったから。やるかたない。

「というわけにございます」

必殺のアイアンクローにひとしきり悶絶して床を転がったのち、与えられた弁明の時間をフルに活用して事の顛末を説明し終えた俺は、目の前の悪鬼、もとい、おかんの反応をうかがう。コーヒーカープを傾ける無表情に、一秒毎に命を削られる思いだ。

「ですので、その、俗に言う不純異性交遊や、ましてやいかがわしい幼児性愛趣味などを持ち合わせているわけでは」

「カナメちゃん、つつたっけ？」

「は、はい？」

おい、もつと平身低頭、相手の出方を伺え。ワンミスで俺の命がなくなる局面だぞ。

「あんた、神様なんだって？」

「うん。そういうことに、なってるよう。でもお、何ていうかそんな感じい」

どこまでも自信のなさそうな口ぶりは本当に神様なのかどうか疑わしいが、俺の頭の中ではそれが事実として定着している。リンゴがリンゴであるように、カナメは神様なのだ、俺の中ではな。

「ふうん……神様、ねえ。そっか、神様なんだ」

「な、なによう？」

「そのへんの真偽はさておいて、こいつが魔法陣から出てきたのは間違いないわけで」

「あんたにや聞いてないよ」

「御意」

視線の圧力だけで心をへし折ると、再びおかんの鋭い視線が力ナメを捉える。

「なんだかよくわかんないけど、魔法で呼び出されて、手違いでこんな役にも立たないのを下僕に従えちゃって、家までついてきちゃったわけだ」

「うん。そういうことに、なるかな。本当は、呼び出されたら願い事をかなえてあげなきゃいけなかったんだけど、その……間違えて、違うページを見ちゃって」

そういえば出てきて早々にメモ帳見たり、間違えたとか何だとか言ってたな。本当に大丈夫か、この神様？

「で、あんた行くあてとかあるの？」

「ううん、これから探さなきゃ。ここは多分人の世界、人界なんだろうなっていうのはわかるんだけど、こっちに来るのは初めてだから、焦って様式も間違えちゃってえ……」

困ったように俺を見る。タヌキのポシエットをいじる姿は、小学生程度にしか見えない。お、おい！俺を見ながら目をうるうるさせるな泣くな！

「シユウのお願い事をかなえないと、帰れないし……」

そんなルールなんだ。あ、いや、そういわれればその情報も頭の中にあるな。どうなってんだ俺の頭？

「おい、シユウ」

「はいっ！」

全ての思考をサスペンド。軍隊顔負けの素早さで返事をする。もちろん背筋はピンと伸ばし、体の真ん中を貫く鉄の芯を想像する。直立不動の基本姿勢だ。家の中なのに。

「この子呼び出したの、お前なんだろ？」

「まあ、正確には美緒……天王寺のやつだけど」

「おいてやる」

は？

「だから、この家においてやるって言うてんの。文句あるの？」

「滅相もございません！」

あつたところで自動的に却下された上に二度と逆らう気が起きない体にされるだけだ。

もうそんな体に仕上がってるけどな。

「ま、実際あたしも話を全部鵜呑みにして信じたわけじゃないけどさ。かといって嘘だからって追い出すわけにもいかんだろう、こんな時間に。女の子一人」

時計を見ると、日付変更まであといくらもない。たしかに、神様であるのに関わらず、女の子が一人でうるつく時間ではない。

「ってわけだから、泊ってきな。え〜っと、あんた名前は？」

「カナメ」

「カナメちゃん。あたしはこのバカの母親で、華美。よろしくね」

差し出されたおかんの手を、おぼつかない手つきで握り返したカナメだが、それでもその瞬間ちよつとだけほつとしたように見えた。

誘拐？ 事件

「なんでお前がここにいる？」

「それはこちらのセリフだと思うのだが。授業はどうしたね？」

まったくもってお互いさまなので、あえて突っ込まずに手近な椅子に腰かける。

科学準備室。

相変わらずのカオス空間を見渡すと、何やら魔法陣の試し書きのような紙がそこらじゅうに散乱していて、新人画家のアトリエの様相も加味されている。まさか、昨日あれから帰ってないのかこいつ？

「美緒、お前授業ちよくちよく学校休むと思ったら、こんなことしてたのかよ」

「そのことに関しては訂正しておこう。授業など私にとっては余興でしかない。ちなみに、学校に来ているかどうか、という意味では私は皆勤賞だよ。土日も」

しかもこの女、出席しても教室ではいつも授業に関係のない本を読んだり寝ていたりするくせに、この間の中間テストの成績は学年上位という、教師からすれば何とも鼻つまみな存在だ。まじめに出席してノートを取っている俺が真ん中あたりをうろろろして、うっかりすると下位グループというのは解せない。世の中間違っている。

「まあそれはさておき、連れてきたのかね？」

美緒が指差したのはおれの隣、所在なさげにおどおどと立っているカナメだ。

俺はカナメを学校に連れてきた。いや、正確には、連れてこざるを得なかったため、教室に直行できなかったのだ。

「仕方ねえだろ、離れられねえんだからよ」

「ほう、これはまた朝からお熱いことだね。たったの一晩でそこまでの関係になるとは、愛の力というのは偉大なものと」

「違う。そういう甘ったるい意味じゃない。本当に離れることができない、距離をとることができないんだ。物理的に、空間的に」

変な誤解が生まれる前にその芽を摘んでおく。とくにこういった問題は早期発見早期対処が基本だ。が、さすがの天王寺美緒をして俺の言っていることは俄かには信じられないらしい。そりゃそうだろう。俺だったら間違いないくそいつの脳を疑って憐れむ。

「ま、口で言ってもわかんねえと思うから、見てろ」

「ん？ うん、見るといふのなら見るが？」

美緒の返事を待たずに俺は回れ右をすると、全力で床を蹴って廊下に飛び出した。準備室を飛び出してすぐに『廊下を走るな』の張り紙があつたが当然無視。朝日の差し込む授業中の廊下は、現実から切り離されたように静まり返っている。

その中を俺は走りぬけた。そこそこに本気の疾走で。

生物実験室を通り過ぎた所でちよつと減速、角を曲がって隣の特殊教室棟への渡り廊下に差し掛かった。窓から差し込む光を目指して再び加速し……と、そこで視界がぐにやりと歪み、

「というわけだ」

「ほう……これはすごい。確かに、離れられない関係、だな」

俺は再び科学準備室にいた。

もちろん、走って戻ってきた過程を省略しているわけではない。

ちゃんと角は曲がったし、渡り廊下に向けて走った。なのに、次の瞬間の俺の視界には、科学準備室としての機能をほぼ失いかけている力オスな空間が広がっている、というわけだ。

駒落としての映像で次の絵を間違えたような、とでも言えば分かりやすいかもしれない。

「いきなり現れたように見えたが」

「多分それでいいと思うぞ。俺はついさっきまで渡り廊下んここにいたからな」

「ワープだな、まるで」

そう、これが俺がカナメから離れられないといった理由。

「どうやら、一定距離以上カナメから離れられないらしい。今朝もそれで大慌てだった」

今朝は本当にびっくりした。なにせ、学校に行こうと家を出て、しばらく歩いているときなり家の中に戻っていたのだから。しかも土足で。オカンに意識が飛ぶほどブーツ飛ばされたの言うまでもない。が、さらに問題だったのは、カナメの説明だ。

「わ、私はシユウを下僕にしたからあ、そのう、勝手に離れたりできないようになっていて、だから、逃げ出そうとしても戻ってくるようになってるんだよう」

「ってことらしい。しかも、カナメは自分ではこの状態を解除できんらしい」

「メモ、し忘れてたみたいなんだよう」

「何ともお熱い関係だね、君たちは」

「お前、今の話聞いてたか？」

ほくそ笑みながらマジマジと俺とカナメの二人を見つめ、美緒は何やら考えているようだが、どうせロクでもないことだろうから、俺は話を進める。

「で、ここに来たわけだ。学校サボったらかーちゃんにぶつ殺されるし、でも教室にメイド服着た女の子なんか連れてけねえだろ」

カナメはなぜかメイド服を着ていた。というのも、我が家には女の子用の服というのが皆無で、唯一タンスの奥に眠っていた、店の開店イベントで使ったメイド服が唯一カナメの着られる服だった、というわけだ。ちなみにカナメが最初に着ていた着物のような不思議な服は、今朝がたおかんが思いっきり洗濯機にぶち込んでたが、大丈夫なのか？

もちろん正門を通過して堂々と登校もできないので、校舎裏にあるフェンスの裂け目を潜り抜けるといふ裏ワザで学校に侵入している。「説明としてはわかったのだが、それでなぜここに？」

「いやいや、どう考えてもこうなったのは昨日の魔法実験が原因なんだから、解決しようと思ってここに来るのは普通の考え方だろ」

「解決？ 何か問題があるのかな？ 特にそういったものは認められないと思うが」

「さざりと言つてのける表情は、本気でそう思っているようだ。それどころか、なぜおれがそんなことを考えているのが疑問だと言わんばかりの疑いに目を向けてくる。頼むから、首をかしげてアホな子供を見るような表情をするのはやめてくれ。」

「大ありだろ！ お前、どんな思考回路してんだよ。どう考えても不便だろ！」

「そうかい？ 美少女メイドが四六時中べったりと付き添ってくれる生活など、思春期真っ盛りリビドーいっぱい夢いっぱい男子にとっては、むしろ願ったりかなったりの環境ではないのかな？ そもそも、デメリットは何だね？」

「たしかにその物言いだけを聞いていれば、これほどハーレムで男心をくすぐる設定もない。が、それはあくまでも言葉のマジックでしかないことも、実体験済みだ。」

「あんな、どこに行くのも絶対一緒って、既にデメリットだろ」

「この呪いの場合、中心はあくまでもカナメであり、俺はその付随物、おまけなのだ。先ほどのように俺が遠ざかれば強制的にカナメのところに戻されるが、カナメのほうから離れて行った場合でも、俺はそこに強制的に呼び寄せられてしまうのだ。」

「しかし、その瞬間移動はどちらなんだろうな」

「どっちって、何がだよ？」

「大別して、瞬間移動というのは二種類あるといわれている。空間移動方式と、空間置換方式だ。私人としては後者のほうが現実的だと思ってるのだが、カナメ君は神だから何があってもおかしくないだろう。というわけで、実験を」

「やらねえよ！ どっちでもいいわ。それよか美緒、さつさとこの呪いをといてくれ」

「呪いだなんて、ひどいよう」

「ギョツと両手を握ったカナメが、半泣きの目で訴えかけている。」

なんでお前がここで必死になつてんだ？ 多少の驚きとともに見つけていると、カナメは急激に顔を真っ赤にしてしまった。項や耳まで真っ赤にしてしよぼくれる神様つてのも滑稽だ。

「お前の魔法なら何とかできるだろう？」

「無理だね」

即答かよ。

「そもそも、魔法というのも万能ではない上に、私に使えるのは召喚魔法のみだ。今はまだ。まあ、因果律から神の力から何でもかんでも断ち斬るインチキのような剣でも呼び出してくれというのならやってみないでも」

「やめておこう。世界の終末が目に見えるようだ。にしても、なんだこの不便さは」

「あ、あああ、怒らないでよう。私だつていきなり呼び出されちゃつて、びっくりしたんだもん。願い事のために呼び出されたのなんて初めてで、だから、その……」

唇を尖らせて、こちらの様子をうかがっている。くそう、無駄に仕草が可愛いぞ。

「まあ大丈夫だ。実害はないのだろうか？ のんびり構えてキャツキヤうふふしていれば」

「見つけましたよ、誘拐犯」

勢いよく扉が引き開けられる音とともに放たれた一言は、見事にその場のグダグダな空気に張りを与える。ツヤは与えてくれないが、そして、そんな空気が一瞬にして凍りつく。そりゃそうだ。扉を開けたのが鳩時計だったら、誰だつてそうなる。

「時計から、足がはえとるな」

時計といつても多種多様だが、目の前にあるのは人間一人がすっぽり入るサイズの巨大な鳩時計だ。そこから生えている手足がすらりとして細い。その部分「だけ」を見ればモデルも真っ青だが、ほかの部分を見れば違う理由でモデル以外も真っ青だ。

ぱっぽー、ぱっぽー

「もう九時か。今日は一時間目は諦めたほうがいいようだね、シュータロー」

「だな」

「見つけましたよ、誘拐犯」

鳩時計のてっぺん、ハトが飛び出す扉が開くたびに、そこから顔が見える。どうやらそこがのぞき穴になっているようだ、それだと一時間に一回しか外が見えなくて不便だろう、と突っ込んだりはしない。こんなことを突っ込んだら、鳩時計コスプレそのものを認めてしまうことになる。許されざる非常事態だ。というか、非常識事態だ。

「でだな、俺としてはさすがに教室にまでカナメを連れていくわけにもいかんだろ」

「無視をなさらないください。意外と傷ついてしまいます」

「自分で鳩の扉開けにやまともに顔も出せないようなやつ、相手にするわきゃねえだろ」

しまった、相手をしてしまった。もろに鳩時計の中のやつと目があってしまったが、それもすぐに扉が閉まって見えなくなる。

「ごそごそと手が動いて、何とももどかしく宙をつかんで同じところを行ったり来たりしている。何がしたいのかわからん。」

「もしかして扉を開けたいのではないか？ 手伝ってやりたまえ」

「まじかよ？ 相手したくねー」

と言いつつも、さすがに一回突っ込んでしまっているので無視するのも忍びない。俺は親切にも鳩時計に近寄り、ハトが出てくるころの扉を開けてやる。あ、ちゃんと木製だ。凝ってるな。

「見つけましたよ、誘拐犯は」
「パタン。」

「何をなさいます？ 開けておいていただかないと会話が成り立ちません」

「やかましい。いきなり現れて何が誘拐犯だ。ってか、鳩時計に誘拐犯呼ばわりされる覚えはない。通報されなくなかったらとつと去

れ」

「盗人猛々しいとはまさにあなた様のことでございますね。私とい
たしましては一刻も早く貴方様に制裁を加えたのちに。と、それよ
りもカナメ様、カナメ様はいずこに？」

いきなり何かに気づいたようにきよるきよるとし始める鳩時計だ
が、そのでかい図体で動き回るな。ただでさえサイズがでかいのに、
動くときと装飾やらなんやらが引つ掛かりそうになって危ない。

「目の前にいる！ 動くときカナメを轢いちまうぞ。って、あんたカ
ナメの関係者か？」

今更ながら、俺の知り合いに鳩時計を着るような女はいない。美
緒ならこういう知り合いの一人や二人いてもおかしくはなさそうだ
が、先ほどの反応は他人のそれだ。となると、必然的にこの気ぐる
み女はカナメの知り合いということになる。

「ナイアガラはカナメ様の付き人であり保護者であり身元引受人も
買って出ております。わかりやすく申しますなら、恋人でございま
す」

「ち、違うもん！ こ、こい、びとなんかじゃ。ね、違うんだから
ね！」

「いや、俺に向かって力説せんでも。そもそもどつちでもいい」

「ふええ〜。ひどいよう」

「で、その辺はいいとして、あんたが」

「ナイアガラ、でございます。人界の方が軽々しく声をかけてよい
ナイアガラではございませんが、それだと会話が進みませんので親
切にも返事をして差し上げます。ああ懐の深いナイアガラ。それで、
なんでもございましょう？」

めんどくさいやつだが、とりあえず今は我慢だ。冷静になれ、必
要なのは冷静さだ。

「ナイアガラさんは、カナメを連れ戻しに来た、ってことでいいの
か？」

「ふええ？」

カナメが素つ頓狂な声を上げる。いや、そこはお前が疑問に思っ
なよ。

「左様にございます。本来ならば、人界のものが軽々しく声をかけ
てよいナイアガラで」

「そのくだりはわかつたから」

「情緒を解さないのでございますね、人界の方は。と珍しく非難が
ましいことを考えたことは内に秘めたままお答えいたします。半分
正解といったところでございましょうか」

「半分？」

澄まし顔でナイアガラはすつと目を閉じるが、いかんせん鳩時計
を着ていてはどんな演出も効果を發揮しない。というか、ずつと扉
を開けているのはそろそろめんどくさい。

「ええ。残り半分はあなたでございますよ、誘拐犯」

びしっ、と指つされたので、思わず扉から手を離してしまう。パ
タン。

「ちよつと、何をなさいます。卑怯でございますよ」

落ち着いた声音とは裏腹に、慌てて扉を開けようとしているよう
だが、先ほど同様にうまく開けられずに手がおろおると宙を泳いで
いる。

もちろん、そんな光景を見た俺が導き出す答えは一つだ。

「さーって、二時間目までたっぷりあるし、食堂にジュース買いに
行くかな」

「私はカルピスだ」

「似合わねーもん飲んでんじゃねえよ。つつか、さらつとパシらせ
んな」

「あ、あたしは、おしるこがいいんだよ」

控えめに手を挙げて、人差し指をくわえたカナメが申し訳なさそ
うに要求する。だから俺は優しい笑顔を作って頭をなでてやる。

「おめーは来るんだよ。さもないと俺は食堂にたどりつけん」

「あっ」という顔をした直後に、失敗に顔を真っ赤にして俯いて

しまつ。どうやら本当に気づいていなかったようだ。

「やれやれだぜ」

ため息がこぼれたが、とりあえず今だけは逃避しておく。

背後で何やら文句を言いながらドタバタと動き回る鳩時計という、非常識に彩られた非現実から。こんなもん、誰が現実だつて認めてやるか。

食堂の自販機で俺はカルピスとおしるこ、そして自分の缶コーヒーを購入し、その場でコーヒーの缶を開ける。おしるこはカナメに渡してやったが、熱々の缶を両手で持てあましているようで、落とすしてしまわないか心配だ。

ただ、そつちに気をまわしてやれないのつぴきならない事情もある。

「つつか、付いてくんよな」

「どこまでも付いてまいります。私には大事な使命がございますゆえ」

食堂のテーブルに腰を下ろした俺の向かいには、鳩時計を着たまのナイアガラが堂々と仁王立ちしている。サイズがでかすぎて食堂用の丸椅子には座れないらしい。

「俺が誘拐犯つてどういうことだよ？」

缶コーヒー独特の、ちよつと酸味の強い味が口いっぱいに広がる。

「どうもこうもございません。あなたには、カナメ様の、つまり神様誘拐の容疑がかかってございます。というわけで、私はあなた様を確保せねばなりません。おわかりいただけますか？」

「いただけねえな」

「では、おとなしく私とともにおいください。貴方様には黙秘権も弁護士を依頼する権利もございませんのであしから」

「さてさて、いただけねえつつつてんだろ。人の話聞けよ」

まったく、どうして俺の周りには人の話を聞かない奴しか寄つてこないのかね？

「何がご理解いただけませんでした？ 黙秘権についてでございますか？」

「違う。その前、俺が誘拐犯だつてところがそもそもただけねえの」「これはまた異なることをおっしゃいますね。カナメ様の姿が突然掻き消え、人界に強制的に呼び出されたかと思うと一向にお戻りになられません。これを誘拐と申さずして、なんと申しましょう？」

たしかに、そのくだりだけを聞けば文句の一つも言えない気がする。だがそれでも、

「俺は誘拐なんかしてねえし、下僕だかしもべだかにされたのも勝手にやったことだ。俺はむしろ被害者だ」

「なんと……いや、騙されません。そのような戯言で私を謀ろうとするなど、言語道断でございます。願い事を叶え終わったらすぐに神界に戻るはでございます」

「しんかい？ ああ、神界ね。はいはい」

神界。俺たちの住む人間界とは別に存在する神様の世界ってことらしいけど、知らない間にかこういう知識が刷り込まれているのは、なんだかむずがゆい。

「嘘じゃねえし。なあ、カナメからもなんか言っちゃってくれよ、このままじゃ俺、誘拐犯扱いだ」

ようやくプルタブを開けることができたカナメは、ホクホク顔で中身をすすっている。あんまりにもうれしそうだったので、「ちゃんと缶振ったのか？」とは聞けなくなる。

「修太郎は、誘拐なんかしてないよう。あたしが手違いで下僕にしちゃった、から」

「マジでございますか？」

「マジ、なの……突然のことではびっくりして、その、手順間違えちゃってえ……」

もじもじと申し訳なさそうにうつむきながらも、おしるこを啜るのはやめない。よっぱど甘いものが好きなんだろう。ただし、空いた方の手で、ポシエットから取り出した例のメモ帳を差し出してい

る。開かれたページに視線を落としたナイアガラのこめかみが、びつくりするほど痙攣している。血管はじけ飛びそうだぞ。

「なんという軽率なことをなさったのですか。カナメ様は神様でいらっしゃるのですから、もっとご自身の御役目というものに責任をお持ちになってくださいませ。たったの一晩でもあなた様がいらっしやらなかったおかげで神界はそりゃあもう芋の子を洗うような大騒ぎでございましたのに」

「たぶん日本語間違つとるぞ」

「それは、わかってるよう。でもでも、あ、あたしだって予想外つて言うか」

神様の世界でも大騒ぎになるのか。俺には全く想像もつかない話なので、とりあえずは傍観を決め込む。おかげで缶コーヒーはあっという間に空っぽになってしまふ。こんなことならサイズのでかいお茶やコーラにでもすればよかった。

「そのようなご無体を……しかし、問題なのは何よりもかような下賤のものが、カナメ様から離れなくなってしまったという由々しき事態の方でございますね。むしろ私とそういう関係に……」
「ごによ
ごによ」

「んなこと言われたつて、俺だつて離れられんなら今すぐ離れるつ
つーの」

「ええー、シユウウひどいよう」

「やかましい。誰が好き好んで」

「でもでも、だつて、あたしだつて、その……」

「と、お話はここまででございます」

鳩時計がクルリと回れ右をし、カナメを背中にかくまうように両手を広げる。

何やらただならぬ気配を感じた俺は、息を殺してじつとナイアガラの視線を追う。鳩時計のせいで顔は全く見えないが、多分この変だろつとあたりをつけて睨む。

そのとき、一時間目の終了を告げるチャイムが鳴り響いた。

と同時に、ボタンという音がして再び扉が勢いよく開き。

ぱっぽー、ぱっぽー

鳩が飛び出す。

「九時半、でございますね」

「俺の緊張感、返せ」

また？ 召喚

そして再び部室。

二時間目の授業にはさすがに出ておきたいという俺の要望は、鳩時計の問答無用の一言で却下された。何が「世界の危機と授業、どちらが大事ですか？」だ。俺にとっては授業に出ない〃おかんにブツ飛ばされるほうがよっぽど危機だ。俺という一つの宇宙の。

「では、整理をしまいましょう」

「その前に、その鳩時計をどっかに片付ける。邪魔でせまっくるしい」

「むう……ぎゆうぎゆうだよ」

ただでさえ狭い科学準備室は、美緒による占拠以来、超科学部の備品と称するがらくたによってさらにその空間を圧迫されている。

そこへ来て、超巨大な鳩時計の着ぐるみなんかを置いた日には、満員電車並みの人口密度になってしまう。いまも、すぐ隣のカナメの腕が俺の太ももに押し付けられている。しかも反対側には、

「ん、確かにこれは狭いな。というわけでシュータロー、この着ぐるみを実験室のほうに動かしてはくれまいか？ そうしてくれれば、肘で胸の谷間を堪能していることについては不問に」

「んなこたしてねえ！」

とは必ずしも言えないまでも、そこには決して劣情やら破廉恥やら青春の熱き血潮などは介在しない。仕方がないのだ。この狭苦しい空間で、他者と触れ合わないなどというほうが無理なのだ。不可能なのだ。だから、この程よい弾力と柔らかさに包まれた右腕の感触を一秒でも長く、なんてことは微塵も思っていない。断じて。

それを証明するように、俺は鳩時計の着ぐるみを抱えて、泣く泣く準備室から実験室に移動させる。にしてもこれ、むちゃくちゃ重いぞ。本当に木で作るなよな。

「変態でございますね」

「ちっげえ！」

準備室に戻った俺に浴びせられた第一声は、ナイアガラによるその一言だ。しかも、道端のごみを見るような、蔑みの視線というオプシヨン付き。

「ぴと」

「ん？」

心をえぐる精神攻撃に深い傷を負っていると、カナメがすぐ隣に寄ってきて、何やら俺の腕に抱きついていてる。

「何をやっとするんだ？」

「だからその……み、美緒が終わったから、つ、次はああああたしの番、かな、って」

「すまん、よくわからぶえ！」

後頭部に凄まじい衝撃を感じ、とっさに床に手をつけて体を支える。あまりに強すぎる衝撃のせいで思考はぐらぐらと揺れたまま、世界は震度二か三といった感じた。

「ってえな！ 蹴ることねえだろ。つつか何で蹴るんだよ！」

振り向くと、案の定ナイアガラがこちらに靴の裏を差し出して、先ほどのごみを見るような視線に殺意と呪いをプラスしたような、とんでもない視線をぶつけてきていた。

「ふん、でございます。この蹴りの意味がおわかりにならないようでしたら、わかるまで蹴り続けて差し上げますよ」

さすがにそれは勘弁だ。こんな重い蹴り、おかんでも滅多に打つてこない。この時点で、ナイアガラは超一級の危険物として認定しておく。同列の危険物（人物、ではない）としては、おかんと美緒のほか、ICBMやゴルゴサートイーンが名を連ねている。

なぜかしょんぼりと俯いているカナメを横目に、俺は美緒を促した。こういう場合、俺よりもこいつの方が的確に事態の核心を捕まえるだろうから。にしても、カナメのこの姿はたった一晚とちよつとの間なのに、もう定番のようになってしまっている。よっぼど引っ込み思案なのだろう。神様のくせに。

「どうやらカナメ君が神様だというのは本当らしいね。しかも人の願いをかなえに来たとは、何とも奇特な」

「だからそれ、何度も言ってるのにい」

その自信なさげな態度が、信憑性をレベルダウンさせる一因なのだが。

あらためて考えてみると、普通の人間の場合、疑問はそこから始まるものだということをすっかり忘れていた。カナメが言うには、下僕化に伴って、神の下僕としての最低限の知識は注入される仕組みらしい。噛みついたのはそういうことか？ どういう仕組みかさっぱりだが、便利を通り越してご都合主義すぎだろ、神様。

「しかし、なぜ神などというものが現れたのだろうね？」

「そりゃお前が呼び出したからだろ。召喚した人間の言うこっちゃねえぞ」

その無責任さにほとほと呆れさせられるが、片や美緒は真剣に悩んでいる。まさかこの期に及んで、召喚魔法が成功するなんて思っ
ていなかった、とは言うまいな？

「私が呼び出したのはあくまでも超科学部の部員だ。神である必要などまったくない」

「たしかにな」

「偶然だと言われればそうなのかもしれないが、私はどうにも根拠の乏しい偶然というのを信じたくなくてね」

「何事にも因果関係はある、とおっしゃるわけでございますね」

「神様を前にして、偶然やら奇跡を否定するようで申しわけないが、その通りだ」

なんとも美緒らしい。へ理屈も理屈のうちというが、美緒が言う
とへ理屈でも不思議とそれらしく聞こえて説得力が与えられるのだから、これもある種の才能といってもいいのかもしれない。

「ときに、美緒様はまだその時の魔法陣をお持ちでいらっしやいますか？」

「うん？ 設計図でよければね。あの時の魔法陣はどういうわけか

光の粒子になつて霧散してしまつたからね。大方、陣そのものが触媒となつたのだから、発動と同時に消滅したのだろうとは思つてゐるがね」

もちろん言つてゐることはさつぱり分からないが、自信満々なのでそういうものなのだろうということにしておく。

「ふむ……左様でございますか……ふんふん」

美緒の手渡したメモ用紙を見つめながら、しきりに何やら頷いてゐるナイアガラだが、唐突にそのメモを机の上に置き、ある一か所を指差した。円形の魔法陣を取り囲むようにして書かれてゐる文字と図形の間のような場所だ。

「ここに、何と書かれましたか？」

「ここかい？　これは、えっと、前後が『目の前』と『引きずり出す』だから、ここには新入部員と書いたはずだね」

「誤字でございます。これだと『神入部員』という意味になつてしまひます」

手近な黒板に、漢字で「進」と「神」の二文字を書いて説明するナイアガラ。おいおい、なんだこの初歩的かつ致命的なミスは、と呆気にとられるがもちろんこの程度で美緒は動じない。いつも通りの涼しい顔で、片方の眉を少し持ち上げるだけだ。

「本当かい？　いや、それは勉強不足だったよ。それなら納得だね、これは神を召喚する魔法陣だったわけだ。しかし妙だな。このようなミス、気付かないものか？」

「わけだ、じゃねえよ！　やっぱ諸悪の根源はてめえじゃねえか！」

「まあまあ、実験には失敗や犠牲はつきものだよ、シュータロー。大事なのはそれをどうリカバーするかだよ。とまあ、そんなことよりだ、本題は」

自分の失態をここまで棚上げする能力の方が、ある種の魔法だと突っ込みたくなる。

「ああ、このままじゃ俺が授業に出られないってこと」

「魔法陣が発動していること、かな」

やれやれといった様子で美緒が首を振る。それもそのはずで、足元に落ちてるルーズリーフには、見覚えのある魔法陣が描かれて、しかもぼんやりと光っている。

「わあい、ほんとだ発動してるね……じゃねえよ！ 何してんだ、この一瞬の際に」

「いや、先ほどの誤字を修正すれば新入部員が現れないかと、ね。

興味がわいた瞬間には実行に移していたわけだよ。ままあることだ」
もう、突っ込む気概もわいてこない。誰だよ、目の前の事態を解決するより、新しい問題を生み出すことに情熱を燃やす馬鹿に、燃料を与え続けるのは。

隣では、好奇心丸出しの目をしたカナメがおしるこの缶をぎゅっと握りしめている。アルミ缶だったら潰れてただろうな。

とか何とかやっている間にも、魔法陣は明るさを増し、昼なお薄暗い科学準備室を煌煌と照らし始めた。何もかもが昨夜の再現のようだ。

「もー、神様とか悪魔とか、変なの出てくんのやめてくれよ」

悲痛なまでの魂の叫びだが、たぶん無理だろうなと、心のどこかではもうちゃんと諦めている。何せ魔法の行使者が美緒だ。穏便な結果など、絶対にあり得ない。

「神様、いやなの？」

好奇心むき出して光を見ていたカナメが、ふと俺を見つめて泣きそうな顔をする。

「いや、そういうわけじゃない。神様が嫌いだとか変だとか、そんな意味じゃない」

「じゃあ、その……好き？」

何でこんな時に、白の裏側は黒みたいな話になるんだ。世の中にはグレーだったり色が付けられなかったりするものがたくさんあるんだと、誰か教えておけよな。

「さあ、どうなのでございます？」

「なんでおめえまで絡んでんだよ」

「いえ、つい出来心でございます。と、ナイアガラは自身の好奇心に蓋をしつつも、申し上げます。いよいよ陣の発動でございますよ」
発動はいいとして、何でうちの制服なんか着てるんだ？ どこで手に入れた？

なんて細かいところに突っ込みを入れる隙を、魔法陣の発動に奪われた。

これも、まんま昨晚の再現。急激に膨張した光が空中にはじけ、視界のすべてを光で埋め尽くす。

「うお！ まつぶっし！ 忘れてた」

そしてフラッシュバックする昨夜の記憶。もちろんそんな愚は犯さない。人間は学習するのだ。このままぼやけた視界の中をよろばい歩けば、召喚で呼び出された何者かとぶつかってしまって、またまたあらぬ厄介事をしよい込むことになるわけだ。となれば選択肢は一つ、

「後退あるのみ！」

その場から撤退すべく、両手で目を覆ったままバックステップを華麗に決める。自分の後ろにはこまごまとしたごみしかないのは確認済みだ。

がちや

「美緒、千古君、いる？ さっき食堂の方、歩いてるの、見えたから。実は、入部とど」

鼻っ面の数ミリ先を扉が通過する。間一髪直撃を避けられたものの、現れた人物が予想外すぎて一瞬思考が蒸発する。

「いいんちよ、何でよりもよってこんなタイミングで」

「え？」

凄まじいまでの光を反射した眼鏡のせいで目元こそ見えなかったが、表情は驚きの色一色に塗りがためられていた。そりゃそうだろう、扉を開ければ中で閃光弾が炸裂したようになってんだからな。戦場だったら決着がついてるレベルだろ。

「なに？ え？ みお？」

部室で弾けた光は廊下にまで溢れだし、立ちつくしている吹水を問答無用で包み込む。

光の粒子が質量を持っているようにまとわりつき、吹水を覆ってしまうと、徐々にその姿は輪郭を失ってうすぼんやりとぼやけ始めた。

「おい美緒、今度も成功しちまったのか？ 何だ？ どうなってんだ？」

「あれ？ 私の手、消えて。足も。あれ？ あれ？」

見る間に俺の目の前で消えてゆく吹水。まるで消しゴムで消しているかのように、指先から徐々に輪郭が溶け出し、透き通ってゆく。このままじゃ、

「おい！ 委員長が、吹水が消えちまうぞ！ どうなってんだ！」
返事はない。周囲を見渡してみても、ただただ真っ白な何も無い空間があるだけで、先ほどまでいたはずの部室は影も形もない。霧の中にいるような、白一色で塗られた箱の中にいるような、不思議な場所だ。どこだよここ？

そうこうしているうちにも吹水の姿は消え続け、今では陽炎のように揺らぐ姿がぼんやりと確認できるだけだ。完全に消えてしまうのも、時間の問題に思えた。

「くっそ！ 間に合ええええ！」

何に？ 言った自分でも意味はわからないし、間に合ったところで代わりに自分が消えるのか、仲良く一緒に消えるのかもわからない。とにかく俺が言いたいのは、

「きえるなあああ！」

とにかく絶叫していた。

喉の奥を雑巾のように引き絞り、バランスを取るのも忘れて吹水に向かって手を差し出す。その手を握れば助かるとも言うように。俺の手の中にある、光を。

光？

おかしい。やけに世界がスローモーションだとは思ったが、それ

にしても時間がたちすぎていやしないか？ ところどころかまるで時が止まっているような。

「いや、止まってるな、これ」

消えゆく自分の手を見つめていた吹水の動きも、ビデオの一時停止ボタンを押したように静止している。しかも、その周囲に漂う光の粒子までもが、ピクリともせず、その場に浮かんでいる。

「シユウウ？」

「お、か、カナメか？」

そんな中で聞いた聞きなれた声って、なんて安心できるんだろうな。うつかり、へたり込んでしまいそうになる。

「シユウウ。その手」

カナメの言うとおり、俺の手は光に包まれていた。何やら温かくて、柔らかい感触のする不思議な光だが、血縁に蛍光灯や懐中電灯がいるなんて話は聞いたことがない。手が光るなんて不思議現象、自慢じゃないが生まれて初めてだ。

「ああ、なんたるなこれ？ なんかいきなり光出して。って、お前は動けるんだな」

「はやく、触れてあげてよう」

何が何やらさっぱり俺が、山もりの聞きたいことを整理できずにいると、カナメは落ち着いた口調で吹水を指差した。

「え？ 触れるって、なんで？ それよりこれ」

「いいから、早くしないと、せつかくの奇跡も間に合わなくなっちゃうよう」

「お、おう。さ、触れば、いいんか？ つか奇跡って」

取り合えずカナメの方が何か知っていそうだったので従っておくことにした。「間に合わない」という言葉にチキンな俺は抗うことができないのだ。

先ほどまでが嘘のように落ち着き払った俺は、ゆっくりとした足取りで吹水に近づき、手を差し出そうとして一瞬ためらってしまう。だって女子の体だ。触れたと同時に痴漢認定か変態認定された日に

は死んでも死にきれない。そうでなくても女体だ……いや、いかがわしいことなんか考えてないからな。断じて。

「シユウウ、早くう」

「わあつとる！ んええい！」

やけくそ気味に、肩と二の腕の境目あたりを掌で軽く触れる。あくまでもソフトに、ポンと肩を叩くように、エロさを感じさせないように。

すると、それまで俺の手を包んでいた光がふわりと広がり、あっという間に吹水を包み込み、周囲のすべてを飲み込んでいった。

その光に包まれながら、ゆっくりと意識が白濁してゆく。眠気に耐えて意識を現実につなぎとめるのに近い。どうにも抗いがたい。暖かくて、柔らかくて、まるで冬の朝の布団の中のように……

「シユウウ。駄目だよ、あんな無茶しちゃあ」

ん、て言っても吹水が危ないって思っ

「ほんとに、ほんとに危ないんだよ」

知らねえって。危ないって、何がだよ。

「消えて無くなっちゃったら、ど、どうしようかと……思ったよう。だからあ」

なんだそれ？

「かぷっ」

……痛い。

魔王？ 誕生

うなじのあたりに、ジンジンと疼くような痛みを感じて意識が呼び起こされた。

「ん？ ねてたのか？」

寝ぼけたままつぶやいたせいで、半分ほどがむにやむにやと意味不明の雑音だったはずだが、俺の隣にいるそいつは意図するところを察してくれたようで、首を縦に振った。

「バカ面でございましたよ。眠るアホの図として後世に残したくなるほどでございました。写メには残しましたが」

差し出されたのは俺の携帯で、ご丁寧な液晶画面には激写された俺の寝顔がでかでかと映し出されている。我ながら、賢そうには見えないのが残念だ。

後頭部に感じる柔らかい感触に再び眠りに落ちそうになりながら、何とか踏みとどまる。ここで二度寝なんかした日には何を言われるか考えるだに恐ろしい。

見覚えのある部屋だが、レイアウトは記憶の中のそれとは異なっている。まあ、いつ見ても常にアップデートを続けるカオスな空間なので、細かな違いなどないに等しいが。

どうやら俺は、あの真っ白な世界から無事に科学部の部室に戻ってこられたらしい。

「ちなみに、可能な限りのお知り合いに送信しておきました」

「わあい、俺のプライベート万歳」

「とまあ冗談はさておき」

本当に冗談なんだろうな。後で送信履歴見て死にたくなるとかやめてくれよ。

「修太郎様、何をなさいました？」

「なにつて、魔法陣が発動して、光って、そしたら委員長が来て…

…委員長！」

慌てて跳ね起きた。

勢い良く起きたせいで、こちらを見下ろしていたナイアガラの顔が一気に近づき、

ゴキッ

「いでえっ！」

頭突きが炸裂する。絶妙な角度で頭をずらしたナイアガラは、あらゆることから自らの額を俺の鼻の鼻の面に向かって振りおろしやがった。鼻が、もげるっ。

「失礼。貞操の危機を感じましたものですから、カウンターいたしました。あしからず。とナイアガラは、童貞に危うく触れられそうになったのをうまく回避した喜びを押し殺してお伝えします」

ずきずきと痛む鼻の頭を抑えると、異様なほどに熱を持っていた鼻血が出ているのかとも思ったが、どうやらそれは免れたらしい。にしても痛い。鈍器で殴られたみたいだ。しかも向こうは涼しい顔をしてやがる。なんちゅう石頭だ。

「ほ、ほれより、そう吹水！ あいつは？」

「そちらにおられますよ」

体を起こしながら見ると、パイプ椅子に座る吹水の姿。足元から肩口あたりまでをざっと一瞥して、手も足も消えていないことを確認すると、ほっと溜息が洩れた。

「委員長……だいじょうぶ、なんだ、よな？」

えらく縮こまってしょぼくれた顔を俯かせている姿に、何かあったのかと心配になる。

「う、ごめんな、さい。その、ぼ……僕のせいで危ない目にあわせて、しまっつて」

「いや、それはいいんだけど。っーか危ない目にあわせたのはこっちだし、むしろそれならこっちの方が謝らないと」

その間にも吹水は委縮して、というよりは怯えたように首を振っている。まるで、現実から逃げるように、目も耳もふさいでしまいたいと言いださん勢いだ。

ただそれよりも、吹水が僕っこののに驚いている俺はダメ人間な
んだらうな。

「んでまあ、こっこの無事は確認できたとして、今回の成果がそれ
か」

足元にあつた何かをひよいとつまみあげる。

両手サイズの毛玉……のような生き物。特徴的なのは、体のわりに
小さな頭と短い前足。それに対して、全体的なバランスで見ると
かなり大きな、ヒコヒコと動く耳。

「そつらしいのだが、どうにも迫力に欠ける結果になってしまつて
ね」

背中をつまんでいるせいだろうが、ウサギって意外と長いんだな
と変なことを思う。

「その態度はただけねえな。ここはもちつとびつくりしたり感動
したりするとこだろ？ ましてや何でも願い事を叶えてくれるこの
あたし、魔神様が」

「喋るウサギか。まあ神様よりは魔法成分たつぷりだな。しかし、
この程度で驚かなくなつてんだもんな、俺も」

「ふむ、やはり魔法陣の小ささが原因か。なかなか調整が難しいな」
何を呼び出したいのか、とは聞きたくもない。どうせこいつの場
合、でかければでかいほど喜ぶという悪魔的な発想なんだ。

「おい、聞けよな！ あたしの」

「か、神様だつて不思議要素いっぱいだよ。願い事だつて、か、
叶えるんだからあ」

「ミスたつけどな」

「うにゅう」

勢い込んで背伸びをしたカナメが、あつという間にしょぼくれて
唇を尖がらせている。神様がすぐにへこむなよ。

「だからあたしの話を、おい、願い事を」

「やかましゅうございますね。肉のパイにして食卓に並べられたい
のでございますか？」

「マニアックな知識だね。マクレガーさんだね」

「もーっ、何なんだよこれ！ もうやだ、さっさと願い事叶えて帰りたいい〜！」

「じゃ、じゃあ、僕を魔王にして」
え？

決して大きくないその一言に、部室の中の混沌とした時間が静止する。

言った本人ですら、自分の言葉に慌てて次の行動を起こせない静謐な空間の中では、窓から差し込む光さえ止まって見える。息を止めるのはばかられる、そんな停止。

「委員長君？」

そんな中で最初に動きを見せたのが美緒だったのは、必然に思えた。こんな空気の中で動くんなんて、俺にはできない。さすがだ。

「ぼ、僕を、ま、魔王、に」

弱々しくしりすばみになる口調は、いかにもいつもの吹水だったが、その言葉が何とも吹水らしくない。なに？ 魔王？

「どうした吹水、故障か？」

そう声をかけたのも、無理からぬことだと思ってもらいたい。さもなければ美緒の毒電波に感染したのだろうというのが、俺の考える第二候補だ。こっちの方がありそうだな。

しかし、そうではないらしく吹水の首がふるふると横に振られると、

「強く、なり、たい……」

いつも通りの眼鏡越しの瞳は、今にも泣き出しそうに潤んでいる。なのに、きゅっと握られた拳に、引き結ばれた唇。マジでか？

「チーンっ！ オツケーだ、願い事は受理された。あんたは今から魔王だ！ ……え？」

そう言っただけで元気がいっぱい飛び上がったウサギは、ひくひくと鼻を動かしていたかと思うと、唐突にぴたりと鼻の動きが止める。そのまま重力に引かれて落下し、べちゃりと床に尻もちをついた。

そのままぐるりと周囲を見回したウサギは、左右の耳を器用にはらばらに動かしてそこから中の音を拾う。が、残念なことに声らしい声はその中になかったはずだ。あの美緒でさえ呆気にとられて口を閉じていたんだからな。

活動？ 開始

「つまり君も、願い事を叶えるために召喚に応じてあらわれた、と」
「ったりまえだろ。うちに言わせりゃ、呼び出しといて何言っただって感じだよ」

「どうやら、召喚業界（何だその業界？）では、呼び出す＝願い事を叶える、ってのが常識らしい。この部にいると、とことん世界つてのがわからなくなるな。」

「ということは、委員長君は魔王になったのかい？」

その場にいた全員が一斉に吹水に注目する。あるうことか、当事者その一と目されるうさぎまでもが吹水に熱い視線を送っている。ただのうさぎにしか見えないが。

「なった、の？」

「実感はどうだね？ 内から湧き上がる憎悪の念や、あふれ出る魔力を感じたりは？」

美緒の質問に、日常的には聞かれない言葉が混じっているが、わかってしまうのはRPGのおかげだ。

「特に、そういうのは……」

「闇の住人のささやきや、亡者の呼ぶ声が聞こえるとかは？」

「ちよっと耳鳴りがする、かな？」

「頭の中に闇の魔法の呪文が浮かぶとか、属性が闇になったとかこの世ならざるかくりよの住人が見えるようになったとか」

「あ」

「どうした!」

思わず駆け寄る俺だったが、美緒とナイアガラは喜々とした視線を送っていやがる。こいつら、完璧に楽しんでやがるな。

「乱視、治った。眼鏡をしてみると、気持ち悪い。でも近眼はそのまま」

眼鏡をはずして目を細めてこちらを見ている。睨んでいるように

しか見えないが、本人に全くそのつもりはないらしい。つてか、眼鏡ないと別人だな。

「つまり？」

総括を求める美緒だが、その後続く言葉は簡単に想像できたし、予想通りの言葉が吹水の口からこぼれたのは言うまでもない。

「あんまり、変わってない」

「どうということだね、ウサギ君」

命の危機を感じたのだろう。逃げ出そうとしたところをいとも簡単につまみ上げると、全員が注目すると真ん中にウサギを突き出した。

「うちに聞くなよな。願いが受理されたってことは、もうそうなるはずだよ。あとは本人の問題だよ」

なんだその無責任は？ まるで勇者を任命した王様の発言じゃないか。ヒノキの棒とはした金を渡して「お前は勇者だ魔王倒して来い」つて。でもそう考えると納得できてしまうな。

「たしかに、願いを叶えた後どのようになるか、どうなさるかはこの本人次第でございますからね。この場合、委員長様がどのようなものを想定なさって「魔王」とおっしゃったかにもよりますね」

「ということはつまり、魔界の権力者としての魔王を想定したのか、悪意の塊としての魔王なのかで今の彼女がどうなっているのかわかるわけだね」

「ご明察でございます」

少なくとも吹水が想定したのは今しがた美緒が言ったようなものじゃない、つてことか。どう見ても悪意なんかかけらも持ってなさそうだし、魔界の権力を握ったにしてはおどおどしすぎだろ。

「もちろんそれは、あのうさぎ君が本当に委員長君の願いをかなえたなら、という仮定なしには成り立たないがね」

つるしあげたままのうさぎに挑発的な笑みを向ける美緒。そして、まんまとそれに乗ってバタバタと暴れ出すうさぎ。どっちが悪魔だかわかったもんじゃないな。

「叶えたにきまつてんだろ？　うちを誰だと思つてんだ。魔神だぞ魔神！　どんな願いも思いのままの、ビッグな存在なんだからな！　魔界のエースをなめんなよ」

「じゃあ君は、今から、僕のパートナー、なの？」

ひよいとつさぎをつまみあげ、吹水が合わない乱視用の眼鏡越しに見つめる。

意外なほどの行動力に、ちょっとびつくりだ。

「いや、まあそういうことにはなる………のか？　わかんねえけど」

「な、名前、は？」

「………もも」

「ミヒヤエル・エンデの作品のようだね。ももか、なかなかキュートではないか」

そついや、そんなのもあつたな。小学校の国語で教科書に載つてたな。しかし「キュート」とは、美緒に似合わないことはなはだし

い。
「違う。食いもんの方だ」

「桃？」

アクセントを逆にした発音に、うさぎがこつくりとうなずく。

「昔、とーげんきょーとかいうとこにしばらく住んでたら、なんか、その喰いもんに似てるとかつて名前付けられて。くそ、あんなまん丸くないっつーのに」

しぶしぶといった様子で語っているが、うさぎの表情の変化なんて読めるわけもないので、聞き流すしかない。まあ、色々あるんだろつ、つてことにするしかない。

「それにしても、魔界のエースで桃源郷にも顔が利くとは、凄いものを呼び出したようだね、我々は」

そりゃそうだろう。なんせクラスメイトを魔王にしちまうんだからな。経歴のでたらめ具合なんかも含めて、色々と胡散臭いが。

「でもそうになると、今度は気になるのは委員長の方だよな。どんな魔王なんだろうな。何か実感ないのか？」

当の本人はひたすら眼鏡をかけた外したりしているだけだ。気になるのそこかい。

「うん。ない、かな？」

うわ、めっちゃしょんぼりしてる。これで魔王とか、もっと魔王らしいのがすぐ隣にいるだけに、信じられん。

「ではこう質問を変えよう。うさぎ君、彼女が魔王であることを証明したまえ」

「それは良い案でございますね。（カチャ）ぜひナイアガラも見とうございます、と物見遊山ながら申してみます」

ナイス方向転換だ、美緒。俺は心の中で称賛を贈りつつも、証明されたら何かヤダという二律背反に微妙な表情を浮かべるだけだ。完璧に傍観者として楽しみ始めたナイアガラが憎い。そのティーセツトはどこから持ってきたんだこら。

「んだと！ほんつと疑り深いなお前ら。いいか、よつく見てろよ！」

強気の口調のわりには、視線や首の動きが明らかに挙動不審だ。

見ているだけで気の毒になるノープランっぷりだが、残念なことに俺以外の二人は見逃してくれないぞ。

ん？ふたり？そう思ってたカナメを探してみると、道理で入ってこないはずだ。教室の隅っこに横たえられてすやすやと眠っている。実に愛嬌のある寝顔だが、備品と思しき段ボール箱（『天岩戸』の張り紙あり）の中に寝かせるなよな。

そうこうしているうちにも、うさぎがとつと強硬手段に出る覚悟を決めたらしい。

「見ってるお！あの眼鏡は魔王なんだから、うちぐらいの魔力で体当たりしてもびくともしないはずだ、びくともするなよ、しないよな？しないで！」

最後がお願いになった悲しい叫びとともに、うさぎは全力ジャンプ。

「おお！」

弾丸のように、とまではいかないまでもなかなかの勢いで飛び出したうさぎの体が、淡い光に包まれ、赤い尾を引いて一直線に吹水に向かっている。悪魔云々を抜きにしても、当たったら痛そうなおフェクトだ。

「赤い彗星でございますね」

「ということとは、通常のうさぎの三倍だね」

緊張感のかけらもない会話は却下して、俺はうさぎの軌跡を目で追う。

「きゃっ」「パシーン」「ぎゅっ」

までもなかつた。

赤い光が吹水に触れる瞬間、電極がショートしたような光が一瞬はじけたかと思うと、うさぎが全身の毛を逆立てながら墜落した。なんか、でかい埃みたいになつたうさぎが不憫だが、その役割は十分に果たしたぞ。

「これ……なに？」

「うむ。これなら確かに魔王を名乗ってもよさそうだが……色が、な」

吹水が混乱するのも無理はない。なにせ、自分の体を薄い光の膜がすっぽりと覆ってしまっているのだ。しかも、体を動かせば陽炎のように揺らぐ光が、時折はじけて空気を震わせている。アニメやゲームなんかでよく見る、魔力のエフェクトそのままだ。

ただし、

「えらくかわいい魔王様でいらっしやいますね」

「だな」

これには俺も同意せざるを得ない。

ピンクとか、さすがに、な。

かくして、ここに魔王が誕生した。ということらしいのだが、この魔王の誕生が、まさか超科学部とその関係者各位を巻き込んだの壮絶なまでにアホな日常の火ぶたを切つて落としたなんて、さすがの美緒ですら想像だにしなかつたはずだ。

しなかった、よな？

「にしても、何で魔王なんかあったんだ？」

「どうやら魔王様になってしまったらしい吹水に、それとなく聞いてみる。委員長なんてあだ名の吹水が、魔王になりたいなんて言っただから、気にならないわけがない。美緒だったら問答無用で納得なんだけだな。」

「どついう意味だね？ 魔王の何が悪いというのだ？」

「悪いってわけじゃねえけど。いや、悪いのか？ どつちにせよ、魔王になりたいなんてあんまし考えないだろ。」

「そうかね？ 私など幼少のみぎりにはなりたいたいの筆頭だったかね。」

「お前はそうだろうな。あと自分にみぎりって使うな。」

「よく気づいたね。さすがはシュータロー。」

「どうやら所々で俺は試されているらしい。なんだこの常在戦場見たいな訓練。」

「えと、その、僕はすごく気が弱くて……でもせつかく高校生になったから、強くなりたいてって、思って。」

「そう言われると、クラス委員を決めるときにもなし崩しで押し付けたような感が無きにしもあらずだったな。ノーと言えないタイプなのは間違いない。」

「それで、願い事を叶えるって聞こえて、とつさに、強いもの強いものって考えて。」

「で、出てきたのが魔王、か。」

「変、だよな？」

「まあ、変か変じゃないかと聞かれれば変だと思う。普通、女子高生になりたいものを聞いたときに『魔王』は出てこないだろう。とはいえ、弱い自分を変えたいという思いの強さの表れだと思えば、さほどおかしい話というわけでもないだろう。ただ一点、実際に魔王になれてしまったことを除いては、だけどな。」

「変だな」

「おめーは黙ってる」

「何を言う。魔王がこんなに弱気でどうするのだね。魔王というのはならもつと強気の姿勢で常に自信に満ち溢れているものだと思うがね」

たとえばお前みたいにな。

「そ、そうだよ。うん。僕も、そうだと、思うん、けど……まだ、自信なくて」

「大丈夫だ、魔王たるもの唯我独尊でなければならん。よし、こうなったのも何かの縁だ、超科学部を上げて委員長君を立派な魔王にする協力をしようではないか」

おいおい、なんか言い出したぞ。

「ほ、ほんとに？ いいの？ 僕なんかのために？」

「ただし、この超科学部への入部が条件だよ。私としても、魔王には魔王らしくしていてももらいたいからね」

「うん、入部、する」

しかも人員不足まで一気に解決とか、どんだけ敏腕部長だよ。悪徳だけどな。

「ってか、委員長までノリノリになるなよ。考えるよ、こいつはあの天王寺美緒だぞ。何かあってからじゃ手遅れおんぎあつ！」

頭蓋骨が軋みを上げる。何でナイアガラが俺を驚掴みにしてんだよ。

「お黙りくださいませ。あなた様がお邪魔をなさるので、進む話も進みません」

「なん、で」

「興味本位でございます」

「いいな」

ぼつりとどさくさで呟いた吹水の一言を、俺は聞き逃さなかった。いいなって、何？ もしかして吹水が求めている強さってこういうの？ だったらまずい。今すぐにも止めないと、俺の体は苦痛が快

楽に変換されてしまう素敵ボディに改造されてしまう。俺にその気はない。

「く……は……」

「しばらくは声も出せませんので、あしからずでございます」

額関節をやられたのか、まともに声を出すことができない。まずい、このままだと誰も止める者がいないままに、この部が魔王育成部になってしまふ。そうなれば俺が日常を取り戻すのが、どんどん繰り下げで後回しになるのは目に見えている。それはまずい。

「では、異論はないね」

「ございませぬね」

「か……は……」

「うん。いいよう」

おいカナメ！ 神様が魔王作ってどうすんだ。世界の平和は？

秩序は？

「では、満場一致で超科学部の活動方針を、委員長君を立派な魔王として改造することとするよ」

ちよ、待て。ここにいて、反対派がここに……わかってますよ。無駄なんですよね。

悲喜？ 交々

結局その日は一度も教室に顔を出すこともなく、部活動終了のチャイムが鳴るころになってもまだ俺たちは部室の中でダラダラと議論を戦わせていた。

とはいってもその九割以上が無駄話で、わかったことといえば吹水が自分の意志で魔王の力を操れないことぐらいだった。

帰り道。吹水と別れた俺とカナメ、ナイアガラの三人は特に会話もなく、街灯が夕闇を切り取る田舎の道を歩いていた。さすがにナイアガラを置いて自転車で帰るのも気が引けるし、かといって三人乗りは難易度が高すぎる。ちなみに、うさぎは吹水が連れて帰ることになったので、鞆と一緒に自転車の前かごに突っ込まれていた。とことん魔神に見えない。

すーすーと、カナメの立てる寝息だけが夜の静けさの中に規則正しく聞こえる。

風のない静かな夜だ。こんな日の散歩も、悪くない。

「ほんとに願いたい事かなえる神様や魔神なんているんだな」

「ええ。そのために人は神や魔神を呼び出すのでございましょう？ まあそうなんだが、おとぎ話や作り話でしかそんなもんが語られない現代に生きてると、こうなるんだよ。」

「それよりも、あなた様がなさったこと、おわかりですか？」

唐突すぎる質問に、ボケっと月を見上げて歩いていた俺の心臓がとび跳ねた。脅かすなよ、いきなり声かけんじゃねえ。

「な、なんだよ藪から棒だな。何の話だよ、俺がやったことって？」すると、やれやれといった風に首を振り、哀れなものを見る目を向けてきた。やめろ、その目は意外とこたえる。

「あなた様が魔神召喚の瞬間になさったこと、本来ならあってはならないことなのでございますよ」

「何の話だよ？ 召喚の時って、俺なんかやったのか？」

「やはり無自覚でいらっしやいましたか。それはそうでございます
ようね、何せあなた様が引き起こしたのは、奇跡なのでございませ
うからね」

「奇跡を起こした？ 俺が？ なんかの間違いだろ？ まさか、召
喚が成功したのが俺のせい、ってんじゃないだろうな」

だとしたら笑えないが、どうやらそうではないらしい。首を横に
振るナイアガラに、ほっと胸をなでおろす。

「私も知らなかったのでございますが、どうやら魔界からの召喚と
いうのは、代償が必要なものだったようでございます」

「へえ。まあありがたい話だよな。悪魔の召喚には生贄が必要、
つての」

魔法陣の真ん中に横たえられた動物やら、時には人間の少女。そ
の周りを取り囲む怪しい衣装の連中に、禍々しい燭台などの器具の
数々。創作物なんかでよくみられる悪魔召喚のシーンが、簡単に想
像できた。

「あなた様は、その際に本来なら失われるはずの、杏子様の命を救
われました。あの方は、あのままでしたら召喚の代償として消滅し
ていたはずでございますので」

なんだと？

「もちろん、本来ならあり得ないのでございますが、どうやらその
ようでございます。それが証拠に、こんなにも消耗なさって……」

一変して優しい目元で、肩口にあるカナメの顔を覗き込む。どこ
までも慈愛に満ちた、本当に慈しむような瞳だが、鼻息が荒いのは
やめておけ。今にも齧り付きそうで怖いぞ。

「取り乱しました。とにかく、あなた様は奇跡を起こされたのです」

「うん。すまん。全くわからん」

「愚図で屑でございますね」

ひでえ。泣きそうだ。

「本来ならカナメ様の目の届かぬ今この瞬間に分子にまで木っ端微
塵にしてやりたいところでございますが、ばれたときの言い訳が面

倒でございますので、ナイアガラは実に慈悲深い行動に出ます」

「わあい、そりゃありがたいやー」

危ういところで分子レベルの分解を免れたらしい。何この死亡フラグ満載の無理ゲー！

「奇跡というのは神の御業でございます。その効力に際限はなく、全ての理を凌駕し、あらゆる束縛を受けることのない、まあ言ってしまうえばチートでございます」

「身も蓋もなさ過ぎてわっかかりやすいな。最後の一言ですっげえわかったわ。そーいや確かに、消えていく吹水の姿を見た覚えがあったけど、あれ夢じゃなかったんだな」

自分がどれだけ下世話な生き物なのかを痛感したよ。

「んで、それが何かまずいのか？ それに、俺が奇跡を起こしたつてもピンとこねえんだよ。今の話だと神様にしか使えないんだろ、チート……じゃなくて、奇跡って」

「はい。仰る通りでございます。だから、伺っているのでございますよ。何をなさったのですか、と。どうしてなのですか、と。ナイアガラは問うわけでございますよ」

一拍間をおく。

その間が絶妙で、ほんの一瞬の沈黙にもかかわらず、山ほどたくさんなのが頭の中を駆け巡る。なにやらいやなこと聞かれそうだなっていうのも考えるし、衝撃の新事実を突き付けられそうな気がする。しかも、こいつの場合は俺には一切の遠慮なしだ。一撃で精神を崩壊させられてもいのように、十重二十重のガードを構える。

「あなたはなぜ、奇跡を起こせたのですか？」

再び問。

この時点で、俺の頭はもう空っぽだ。一瞬前にあれほど頭の中に溢れた思考や記憶の断片は、もれなく行方不明で尻尾も掴めそうにない。何故？ 何故だろう。

「納得できかねます」

俺もだよ。

「ですが、一つだけナイアガラのな見解がございますので、お聞かせしましょうか？ 聞きたいですよ、では」

「喋りたいんじゃないか」

「あなた様は、カナメ様の神気を体に流し込まれ、人でありながら神の僕となっておられます」

「みただいな」

認めたくねえけどな。

「ご存じではいらっしやらないようですので申し上げますと、あなた様の体はすでに人のそれとは異なっております。まあ、わかりやすく申しますと」

初耳だぞ、それ。っていうか、何？ 俺、人じゃなくなっちゃったの？ 他人が魔王になったとかで一喜一憂してる場合じゃないんじゃないのか？ 衝撃の事実過ぎてなにやら心臓が異常に激しくドキドキしてるんだが。そして妙に腹のあたりがスーサーするっていうか痛いっていうか、

「おい！ なんで手刀が腹にめり込んでるんだ！」

「百聞は一見出ございます。ちなみにめり込んでいるのではなく、貫通してございますよ。ほら、背中が触れます」

確かに、ナイアガラの肘が俺の腹にあるのに、背中をさする感触がある。貫通確認。

「じゃなくて！ 死ぬ、死ぬからああああ、何だよこれ、なんで、なんで」

「冷静にお聞きください、大したことではございません。肉体が少々変性し、神気そのものに近い構成になっただけでございます。言ってみれば、肉を持った精神生命体でも申しますか」

「ま、待て。ちょっとタンマだ」

さすがに息が苦しい。頭の中で整理をつけようとするが、どんなパーツがどんなふうに分らばっているのかすら纏められない。パニックというのはこういうものなのだと、変なところだけ冷静だ。

「それが証拠に、ごらんください。血の一滴も出ておりませんし、

あつという間にふさがります。ほら」

言つて手を引き抜くと、確かにナイアガラの手には返り血どころか、汚れ一つない。

「あ、ほんとだ。もうふさがり始めて……ふさがった。って待て！」

「待ちません。神気というのは神の存在、力そのものの具現化でございますので、今の修太郎様はカナメ様の力の一部とって差し支えございません。ですが」

ぺたぺたと腹を触ってみるが、そこには今までと何ら変わらない皮膚と肉の感触があるだけだ。人体切断のマジックでも見せられた気分だが、背中に残る掌の感触だけが、妙に際立って思い起こされる。

まだなんかあんのかよ？ と、もはや俺の魂は風前のもしびだいや、もう神気とやらになつてるから人間としては終わつてるのかな。あははは。笑えねえ。

「それも、カナメ様の意思ありきでございます。と、聞いておいでですか？」

「ああ、音声は届いている」

処理されてねえけどな、半分以上。

「にもかかわらず、あなた様はご自身の意志で力を使われました」

「それが、なんか変なのか？」

神妙な空気なのだろうが、混乱しているせいで置かれた状況がさっぱり理解できない。

「あなた様は、スイッチも押さないのに蛍光灯がともるとどう思われます？」

「そりゃ、まあ……びっくりする、な」

「それほどに、あり得ない事態ということでございます」

俺、とうとう蛍光灯扱いですか。

「それともう一つ、大事なことをお伝えしておきます」

「まだあんのか？ 俺の耐久力とはつくにゼロだぞ。次の一撃が重かった場合」

「あのような無茶をされた場合、修太郎様を構成する神気が著しく消耗いたします。場合によってはご自身が消滅することも念頭に置かれますよう」

「なんだそれ？ 自分の意志では本来神様の力は使えないけど、俺は使っちゃった。でもそれは俺を形作る力で、使っちゃうとかわらばになつて消えちゃうよつてこと？」

「そして何よりも、あなた様が失った力を補給したがために、カナメ様は眠りに落ちてしまわれたのだということも、でございます」

「なんか、乾電池みたいだな」
「言い得て妙でございますね。意外と賢いんでございますね」
「ええ。意外と賢いんですよ」

こうして俺は、びっくりするほどあっさりとは衝撃の事実を告げられ、人として終わっていたことを実感させられたわけだ。意外にも冷静でいられるのは、この数日の間に発生したとんでも事件の数々が俺の心を鍛えたからだろうか。

涙が止まりませんがね。
「まあでも」

足を止めた俺は、ふと自分の掌を見ながらこぼした。まだあのときの、暖かい感触が残ってるような気がしたが、実際にはそんなことはない。ただの、見慣れた手の平だ。

「それでも、吹水がいなくならなかったんなら……よかった」
それはまぎれもなく、俺が願った奇跡だ。わかっていなかったくせに、俺G」。

「よくもまあそんな恥ずかしいことをぬけぬけと考えられますね。思春期というのはかくも恥知らずに黒歴史を量産するのでございませぬ。きんもー、でございます」

「いーだろ別に！ このぐらいの青春したって！」
「別にかまいませんが。せめてそのゆるみきった顔面さえ何とかしていただければ」

うそつ、そんなに俺の顔ゆるかったの？ まじで？

「シュウウ……ほきゆうう」

寝ぼけて嘔むとか、どこの猫だよ。うなじが痛い。

「戻って来たのかね、委員長君。忘れ物かい？」

窓際に置いたパイプ椅子で本を読んでいる美緒は、視線を本に落としたまま来訪者に声をかける。一度も見ていないはずなのに誰が来たのかわかるのは、超能力でも何でもない。予想が当たっただけだ。

たぶん、戻ってくるだろうという予想。

「ん、そうじゃ、ないんだけど……いいのかな、って」

「何がだい？ 質問が抽象的すぎて回答しかねるね」

嘘ばかりだ。本当は何を聞きたいのか、何を求められているのか、おおよそで当たりは付いている。

「あの、僕……中学の時、みたいに、もう、弱いままは、いやだから」

太もものところできゅっと拳を握る姿に、決意が現れているように見える。

「美緒がいなければ、僕、ここに、いなかった」

「たまたまだよ。バカどもの興味が私に移った、それだけのことだよ、あれは」

「でも、そのせいで、美緒は」

「本人が気にしていないのだから、よいのでは？ 恩義を感じるよ。うなことは何もなかったはずだし、むしろ今は私の方が助かっているよ。部の存続が約束された」

美緒と杏子は同じ中学に通っていて、三年のときには同じクラスにもなった。

そこで美緒が見たのは、杏子に向けられる心ない感情の発露。全国どこへ行ってもこの年代の、いや、年代に関わらずこの手の悪意は存在する。

杏子は、イジメられていた。

露骨な暴力こそなかったものの、気の弱い杏子は格好的だったわけだ。クラス内にはいくつかの女子グループが存在したが、杏子に目を付けたのはとりわけ派手で発言力のある集団だった。その中心になっっている女子生徒が、杏子を利用したというわけだ。自分の立場を維持するために。

誰かを貶めればそのぶん自分が浮き上がる、そんな安直で蒙昧な思考。

そして、同じクラスにいた美緒は、問答無用にその事実を突き付けた。

「他人を貶めねば自らの価値を確立できないとは、笑止だね」

昼休みに購買部へのパシリを要求されて教室を出て行こうとした杏子の、襟首をひつつかまえて美緒はそう言った。

教室中どころか廊下に出ている人間までもが何事かと振り返るほどの、凜とした声に教室は水を打ったように静まり返った。

いじめを見たら見て見ぬふり。それが暗黙の中学生にすれば、地雷を踏んだようにしか見えなかった。いじめられている人間をかばうという横槍は、自身がスケープゴートになることと同義だ。案の定その直後からいじめの対象は杏子から美緒にシフトした。

もちろん、その行為そのものが愚の骨頂であることに気がつくほど賢い女子なら、そもそもいじめなどしなかっただろう。

相手があの人王寺美緒であると、ほんの少しだけ考えるべきだった。

小賢しいまでのいじめの数々はことごとく美緒によって笑い飛ばされ、見るも無残なほどに体裁を失っていった女子生徒は、ついには最後の手段に訴えた。

やめておけばよいものを、具体的な暴力にうつたえようとしたわけだ。当然のように美緒は全力でバールを叩きつけ、その一瞬でいともたやすく一連のいじめ事件は終息を迎えた。

教室中が凍りつくようなバールの一撃は、教卓を直撃したただけにとどまった。が、真つ二つに割れた天板を見つめる怯えきった瞳に、

それまで最大派閥だった女子のグループは呆気なく解散することになった。女子の仲良しグループの、よくある哀れな末路だ。グループの中心をなしていた女子は、昼休みには一人で弁当をつつく姿が見受けられるようになったのだが、そこに美緒が叩きつけた「人を呪わば穴二つ、だよ」の一言は、完膚なきまでにとどめを刺した。

美緒に悪意など、あるはずもない。

もちろん、そこに至るまでの「イジメ」の過程について、美緒は認識すらしていなかったたので、実質いじめていた側の独り相撲だったわけだが。

「あの、あのときの、こと」

「現実を突き付けたただけだよ。瑣末なことだ」

しれっと言つてのける視線は、相変わらず本の上だ。もちろん、この言葉にも他意などあるはずがない。美緒にとっては実際にその程度なのだ。

「ぼ、僕は、そのおかげ、で、ここにいられて……もう、弱いのは、いや、で」

強くなりたい。もう、弱いままの自分が嫌だ。その切実な願いを両手に握った杏子は、それを美緒に告げに来た、というわけだ。

「なら」

美緒の視線が本を離れ、杏子を見に向けられる。美緒らしい、真つ直ぐで力強い視線。

杏子の求める「強さ」を持った、視線。

「強くなりたまえよ。君はもう超科学部の部員なのだから、遠慮など必要はない。魔王でも魔神でも淫魔でも、自らの求める強さをまっすぐに求めればいい。我が超科学部にはそれが最善だと、私は判断した」

この言葉も、美緒に言わせれば「現実を突き付けただけ」なのだろうが、その言葉の持つ魔力に気づかぬは本人ばかりなり、だ。

「いい、の？ 僕なんかで。僕が、いても」

部室に一步を踏みこめないつま先が、そのまま杏子の迷いを表し

ている。

気の弱さゆえに、自分の存在を肯定できない杏子の心境は、ひたすらに揺れていた。

認められることの少なかった、認められている実感の持てなかった過去が、今回の行為を自らで肯定できていないのだ。

「入部届けはもう受理されているよ。やめたいといっても、我々は君を逃がさない。地の果て、それこそ魔界の果てまでも追いかけるよ。委員長君。いや」

部室を横切って、杏子の前に立つ。窓から差し込む夕日を背負った美緒の姿は、血の色に染まった魔女のようだ。そこに浮かんだ不敵きわまる笑みが、何とも似合っている。

「魔王君」

眼鏡の奥の瞳が、色彩を取り戻す。

「ともに青春しようではないか」

杏子のスリッパ履きの足が、部室の敷居を超える。

自らの意思で。

敵？ 襲来

「超科学部だよ」

美緒の声と同時に、目の前を高速で何かが通り抜け、血の気が引くような「ぶんっ」という重い風切り音が頬をかすめる。

「分かった。超科学部なのはわかったから、いちいちバールを振り回すな」

どうやら標準装備らしい。お前はどこの世界の世紀末だ。

「ま、まあ、そのあれさ、超科学部に入部するなんて思いもしなかったさ」

誰だっと思うだろうな。今でも脳裏にへばりついて離れないのは入部の翌日。つまり、吹水が魔王になった翌日の放課後。授業終了のチャイムと同時に立ちあがった吹水が、おもむろに美緒に歩み寄って放った「部活、いこ」の一言に、クラス全員の時が止まったあの光景だ。クラスメイトはおるか、教室を後にしかけた担任がわざわざ戻ってきて一時停止していたほどだ。

「そのあとの一週間で受けまくった風評被害の方が俺には大変だったけどな」

曰く、弱みを握って脅した。曰く、金で買った。曰く、呪いで操った。エトセトラエトセトラ……。まあ、好き勝手に憶測してくるのは構わんのだが、それを美緒に直で言うのが怖いからって全部おれに持ってくんよな、クラスメイトども。

そして、興味深そうに鞆から顔をのぞかせるな、うさぎ。お前はあくまでも吹水のカバンのマスコットだ。クラス委員の用事で出た持ち主が返ってくるまで黙ってる。

「退屈だ」。鞆の中でできることなんて限られてるしき。授業やってる間はまた話聞いてりゃ暇つぶせるけど。なー、出ていいだろー？」

そして、テレパシーが使えるからと好き勝手に話しまくるうさぎの存在。何でよりもよってテレパシー受信できるのが俺だけなんだ。

『なー、かまってくれよ。肉体がほぼ神気のアんたぐらいしかこうやって話せねーんだよ。ナイアガラ怖いし』

「シュー、唐揚げ落としちゃった」

「しかし、どうすれば魔王らしくできるものかな。シュータローも一緒に考えたまえ」

「何さ？ 魔王って、ゲームでもやってるさ？ ギャルゲーなら大得意さ」

『なー、その唐揚げくれよ』

「ねえ、千古君に手紙を渡してくれって、二年の人がきやつ」

「うううおわああああ！ いっぺんに喋んじゃねえ、飯ぐらい静かに食わせる！」

聖徳太子の偉大さに感心するとともに、絶対によくてに三人分ぐらいしか話聞いてなかっただろ、と全力で突っ込んでおいた。歴史上の偉人に八つ当たりするしかないとは我ながら小心者だが、笑いたければ笑えばいい。

「落ち着きたまえ」ごきつ

「はっ、俺は一体。つてか、痛い」

「ボールだからね。それより手紙？ シュータローにラブレターとは、奇特な人類もいるものだね」

人を静かにさせるために脳天にボールを叩きつける人類ほど、奇特じゃないと思いますかね。と言いつつも、驚きのあまり腰を抜かしてしまった女子に詫びておく。手紙を持ってきただけで突然叫ばれたりしたら、そりゃひくよな。ああ、こうして俺はまた変人への階段を着実に上るわけだ。怯えきった女子（もう恋の可能性はないだろうな）の目が辛い。今俺の頬を濡らしているのは、頭から噴き出した血液だと信じたい。

「どれどれ」

『なんだよ、うちも混ぜるよなー』

「で、もうすでに俺あての手紙が開封されているのはどういうわけだよ、美緒」

「なになに、超科学部員に告ぐ。科学準備室を返していただきたくそうろう。ついては、本日放課後、話し合いの場を持ちたくそうろう。準備室にて待たれてそうろう。ピーえす、こちらには奥の手がありそうろう。何だねそうろうそうろうと。下ネタではないか」
「ビリビリばい。やっぱりな、そうすると思っただわ。」

「下ネタはお前だ。っつか、部室返せって、どういうことだよ？あーあ、破つちまつたから差し出し人わかんねえじゃねえか。くっつけんのめんどくせー」

かと言ってほっぽっておくとさらに面倒なことになるんだろうな。仕方ねえな。パズルにしては簡単だが一向にテンションは上がらない。床に散らばった紙切れを机の上に並べ、「そうろう」だらけの文章を再生する。最後の署名の部分に目をやるが、敢えてここだけ細かくちぎったあたりに、悪意を感じる。

「えー、親、違うな、新、か。新科学部。なんだそりゃ？」

「知らないな。我々のパクリか？ まあどちらにせよ、取るに足りない存在だよ」

「だといいな。とりあえず飯食つちまおう。放課後になりゃわかる話だ」

『なあなあなんだよ、うちも混ぜるよー』

「シユー、唐揚げ」

「わかったから、俺のと変えてやるから。三秒ルールだほら。全然三秒じゃねえけどな」

カナメの差し出す、フォークに刺さった唐揚げにかぶりつき、代わりに俺の弁当箱から一つ唐揚げを輸出してやる。ホクホク顔のカナメは、この昼休み唯一の救いだ。

何故か背筋が凍るような寒気がしたのは、あくまで気のせいだ。そう思うことにした。

そして訪れた放課後。俺たちはそろいもそろって食堂にいるわけだ。コーヒーが旨い。

「カナメ君は甘党だね。女子力が高いな」

「いちごミルク。おいしいよう」

「僕は、抹茶ミルク」

「これうめーなあ。うちのも買ってくれよ、杏子」

傾けた紙コップに頭を突っ込んでジュースを飲むうさぎ。見た目だけなら微笑ましい光景なのに、今の俺にはそれすらも心が荒ませる。

「一応聞いておくが、俺たちはなぜ部室じゃなくて食堂でだべってんだ？ 今日部室で待つてろって言われなかったか？」

「待てと言われて待つバカはいないよ。交渉事というのは自分のペーすに持ち込んだものの勝ちだからね、わざわざ相手の言う通りにおとなしく待つこともない」

たしかに、一方的に手紙を押しつけて「待つてろ」で待つてやるほど暇ではない。

カナメを俺から引っぺがす方法に吹水を立派な魔王にする方法。加えて、美緒の悲願である魔法の研究も同時並行でやらなきゃいけないっていうんだから、大忙しだ。

「それに、もし私の想像通りだったとされるなら、わざわざ交渉のテーブルに着いてやる価値もない相手だよ」

「まあ、お前がそう言うんならそうしておこう。それより、こっちはどうすんだよ？」

手紙の差出人への興味なんてもともとないに等しかったので、あつという間に興味は他所に移る。といつても、目の前でこんもりまゐるくなっているうさぎに、だが。

「うちか？ 何だ？ あんたも願ひ事叶えてほしいのか？」

口の周りに抹茶オレがついて、緑のルージユを引いたようになってる。ひげなんてジュースで濡れまくっているのだが、大丈夫な

のか？

「そうしてもらえるとありがたいのだが、いかんせん先約があつてな。俺はとつとと神様の奴隷を解雇してもらつて、神様に願い事を叶えてもらわにゃならん」

「忙しいな、あんたも。で、うちのこつてどつてどういふことだ」

「言いたいことはただ一つ、実にシンプルな疑問だ。」

「お前は帰らんでも大丈夫なのか？　というか、神様やら悪魔やらがうるうるしてて、この世界は大丈夫なのか？」

「いまさらと言つなかれ。この一週間、実に普通に俺んちでお手伝いをして飯を食う神様やら、かばんから頭をのぞかせて物珍しそうにするうさぎやらを見ていると、それが非日常であることが意識から離れていくのだ。だって、うさぎなんか人参与えたらバリバリ食うんだぞ？」

「うゝん……何かまずいのかな？　カナメ、何か知つてつか？」

フルフルと首を振るカナメ。神様と魔神の会話には絶対に見えないよな。

「つてわけで、まあいいんじゃないのか？　うちも別に、願い叶えたらすぐ帰らなきゃいけないってわけでもないみたいだし」

「むしろいてくれなければ困る。委員長君がまだ魔王として未熟である以上、願いがかなつたとは言い難い。最後まで責任を持って魔王にしてもらわねばな」

「なんだその理屈は、と突っ込もうとしたのだが、隣りで何やら納得顔の吹水が首を縦に振つているので、そういうわけにもいかなかった。あれ？　なんか俺の常識がおかしく見えるのは気のせいかな？　「ま、いいけどよ。うちもこつちのがなんだかんだで面白いし。そのかわりもう願いは叶えねえぞ。願いが叶うのは呼び出したとき一回きりだからな」

「そういうもんなのか？　それ以上はなんか都合でも悪いのか？」

「昔は三つとか叶えてやつただけで、みんなおんなじようなこと頼むからつまらないんだよ。だから一個にした。その方が緊張感あ

「んだろ？」

「まあ、カナメも願いの数は増やせないとか言ってたし。魔神の定番、アラジンの魔法のランプでもキツチリ限定三つだったしな」

「ちなみにその数の話は、後付けの設定だね。原典では回数についての表記はない」

興味がなさそうにカルピスを飲みながらの回答だが、さすがは美緒。無駄に博学だ。

「へえ、うちもけっこう有名なんだな」

「有名？ 何がだ？」

「だって、ランプに入ってた頃のあたしのこと知ってたんだろ？ あの頃はけっこうホイホイ願い事聞いてやったもんだよ。アラジンとか、そういうやそんなのもいたな。願い事定番すぎてつまらない奴だったけどな」

気にするのはやめよう。この世の秩序って、意外といい加減なんだな。

「と、そろそろいい頃合いかもしれないね」

美緒に促されて、カナメ以外の全員が食堂の時計に目をやる。いい頃合いどころではない。たっぷり四時半だ。

「いい頃合いって、さすがにこれはダメだろ。まあどうでもいいんだが。何を持っていい頃合いなんだ？」

そう聞かざるを得ない。なんせ、あの美緒がやたらと得意満面なのだから、何のたくらみもないわけがない。と思っていると、

「行けば分かるよ」

今この瞬間、聞きたくないセリフナンバーワンの称号をやってもいい。

某プロレスラーの詠んだ詩の一節のようなセリフを吐きだした美緒は、その歌を体現するように一人意気揚々と歩きだす。どうなるものか？ 危ぶむわ。

そして案の定。

「危ぶめばよかったな」

その惨状に対して口にできたのは、ただそれだけだった。

科学準備室、もとい、超科学部部室はいつもとはちよつと違うジャンルの力オスを内包していた。何が違うかって一番大きいのは、中に死体が転がっていること、かな。

「とうとうやつちまったか」

床に無造作に転がされた男子生徒の遺骸が三つ。どうあれ超科学部に、というか、天王寺美緒に関わった己の不運を呪ってもらえない。俺に出来るのは誰にも知られないように死体を処理し、懇ろに弔うことだけだ。合掌。

「人死に」

「こ、殺さないで」

あ、生きてるんだ。カナメが手近な棒きれで突つくと、ゾンビのようにもぞもぞとうごめいて、ノイズのような声でそう言った。喋り方は亡者そのものだ。

「やはり君達か。どうせこんな事だろうと思っていたよ。さあ、これに懲りて二度と」

「おいおい、事態が飲み込めない俺たちのために説明してくれないか？ 部室に来たら見ず知らずの死体が転がってた、じゃあ怖いだろう」

誰がやったのかは聞かなくてもわかるから省略だ。死体三人の顔に、くつきりと締め付けられた跡がある。アイアンクローの跡だ。

「よりにもよって私めを美緒様と間違えられるとは……失礼にもほどがございます」

ブツブツ文句言うのはいいが、本人いないとこでよろしく。

「彼らは元科学部の部員。私の先輩だった輩だよ。とはいえ、早々に退部を宣言して今では無関係のはずなのだがね」

「なにがだ！ ちゃんと手紙読めよな、相変わらず人の話を聞かない奴だな」

「読む価値のない手紙だったのでね、失敬」

先輩三人の顔色がみるみる真っ赤に染まってゆく。科学部時代は

毎日こんな有様だったのだから容易に想像できる。憐憫の情を禁じえない。

「くそう、だから直接言うべきだと言ったんだ」「なにを！ 言っても無視されるだけだと言ってビビったのは甲斐屋だろ！」「違う、それは織手の案だ、俺じゃない」「ちがうってー、増鵜が言い出したんじゃないか。何でいつつ僕ばっか」

見事に責任転嫁がぐるぐると回っているのはいいが、美緒はもうとつくに興味を失って何か別のこと始めてるぞ。できるならこういうのは決めてから話を持ってきてもらいたい。さもないと、

「本当に、お亡くなりになってみられますか？」

いった瞬間には既に実行に移している。まさに有言実行の見本のように素晴らしいが、ここは止めるべきなんだよな。だってもうチアノーゼが始めてるんだもん。

「イラつく気持ちはわかるがその辺にしとけよ、ナイアガラ。ほんとに死ぬぞ」

先ほどの会話で、おそらく三人のリーダーと目される甲斐屋なる人物が、アイアンクロウのまま持ち上げられるという狂気じみた技で今際の際をさまよっている。他の二人なんか、さっきの攻撃を思い出して委縮しきっている始末だ。トラウマ生成の瞬間に立ち会ったようだ。

「で、話は何だね？ 端的に言いたまえ。ちなみに部室を明け渡すつもりはない」

「もう交渉ですらないな、それ」

ぐつたりと死体に逆戻りした甲斐屋はもう使い物にならないと判断したらしく、もう一人の増鵜なる人物が震える声で喋り出す。

「お、俺達は新しい部を立ち上げた。それに際して、この科学準備室を明け渡してもらいたい。そもそもここは、俺達科学部が使っていた」

「ふん、しかし君達は部を出て行き、科学部を前身とした超科学部がここを使用するのはものの道理。ポツと出の君らにその権利はな

い

「まあ、どつちもどつちだが、今回は美緒の方が正論っぽい気がする。俺は黙って頷くだけにとどめる。にしても、美緒の方が正しいなんてことあるんだな。信じられん。」

「と、決着がついたかに見えた瞬間、それまで死体だった甲斐屋がもそりと起き上がる。」

「あ、ゾンビだ」

「きんもー。動きがきもい。うちああいいう男キラーイ」

「そして崩れ落ちて、三度死体に逆戻り。うさぎにとどめ刺されるなよな。ちなみに、ちゃんと姿かくして言ってるあたり、喋るウサギの立ち位置を分かっているらしい。常識的な悪魔って何かやだな。」

「えーっと、じゃ、僕が代わりに言うけど。ここの顧問は？」

「そんなもんいらん」

「即答ですか、さすがですな美緒さん。」

「いや、要るとか要らないとかじゃないと思うんだけど。いるかないかなんだよ」

「そういうウィットに富んだ返しだったのかと、この織手なる人物の会話能力に少々感嘆する。伊達に美緒と同じ部に数カ月とはいえたわけではないようだ。実際、この三人の中で一番使えるのはこの人なんだろうな。って先輩に失礼か。」

「さあ。考えたこともないが、科学部の体制をそのまま引き継いでいるので、幕部がそのまま顧問のはずだ」

「幕部といえば、冴えない理科教師だったように思うが、一年の授業を持っていないので、さして面識はない。ハゲなのを知っている程度だ。って、お前は教師を呼び捨てか。」

「その幕部先生、新科学部の顧問だよ。僕らの窮状を見かねて、こつちの顧問をやるように言ってくれたんだ。というわけで、天王寺さんのところは顧問なしの状態ってわけ」

「あらま、一発逆転されちゃったわけだ。」

「なんだと？ そんな横暴がまかり通ってたまるものか。きちんと

規則にのっつって、公正に行われるべきだ」

美緒が言うど何かの冗談にしか聞こえない。

「といつてもどの部の顧問をするかは先生の方に一任されてるわけだし。それと、こんなわけのわからない、実績も残らないところの名前だけ顧問よりも、理科の先生としては僕らを応援してくれるんだってさ」

ううん、なんて正論なんだ。

「これね。ちなみに、顧問の掛け持ちはできないから、天王寺さんがこの部を存続させるならちゃんと別の顧問探さなきゃだめだよ」

絶妙のタイミングで差し出されたのは『部活動申請用紙』なる一枚の紙切れ。しっかりと「新科学部」の文字に加えて、想起人の欄に三人の氏名。さらに、顧問の欄には幕部なる人物の直筆サインと印鑑まで押されている。

何の裏打ちもないような口ぶりではないとは思ったが、見事な下準備には頭が下がる思いだ。これだけの自信ということは、おそらくこちらが新しい顧問を見つけれないことまで織り込み済みなんだろうな。

「こりゃ本物だわ。美緒、さすがにこれは」

「で、これがなんだというのだね？」

「や、だからここは正式な部じゃなくなっただから、ここを部室として使う権利は」

そりゃたじろぐわな。どう見ても自分たちが圧倒的に正しいことを言つて、筋も通しているんだもん。でも、一つ忘れてますよ、先輩方。自分が誰を相手にしてるのか。

「簡単な理屈だ。我々も顧問を確保して、もう一度部としての申請をし直せば済む話だ。そうなれば、ここは引き続き我々のものだ」

「でも、もう顧問できる先生なんかあまってないし、っていうかも僕たちは申請を出してるわけで」

「とにかく」

勢いよく立ちあがる美緒。どこから湧いてくるのかと聞きたくない

る自信を漲らせ、自慢のブロンドヘアを勢いよくなびかせる。こういう立ち居振る舞い、様になるよな。

「超科学部はこのようなことではくじけないよ。黙って指をくわえて見ていたまえ」

「いや、ちよつと、もう僕たちは申請して」

「文句でもあるのかね？」

「いや、その、もう」

「待っていただきたいとお願い申し上げておりますのが、お分かりいただけないので？」

パキパキとナイアガラの指が鳴る。

「わ、わかったよ。こ、今週いっぱい立ち上げを待つから、その間に」

それだけを言うのと脱兎のごとく駆け出した三人。背中が気の毒なほどに小さく見えた。

「学校は社会の縮図とはよく言ったもんだな」

勝てば官軍、力が正義。超科学部のキャッチフレーズはこれで決まりだな。

「魔王らしく、なってきたね」

おいおい、吹水までこんな色に染まってきたのかよ。

「では、今週の目標も決まったところで作戦会議だ」

「おー」

何で美緒が生き生きしているのかはさておいて、ノリノリの吹水は何を期待しているのか？ あと、楽しそうに身を乗り出しているカナメとモモ、お前たちは絶対に何のことかわかってないだろ。

にしても、なんでこう次から次へ一大事に事欠かないかね、この部活は。

防衛？ 作戦

科学部が超科学部として本格稼働して、はや一週間。というか、まだ一週間しかたってないのかというのが実感だ。どういう意味だった？ あえて言わなくても、科学準備室の素晴らしい惨状を見れば、言葉は必要ない。少なくとも、部活で本気の暴力を自称神の世界から来た女に叩き込まれるような世界、日常だなんて信じたくない。

「何でお前んとこの部長様は生活指導にも風紀委員にも生徒会にも文句言われねえさ？」

「本人に聞いてくれ。そして、できれば告発してきてくれ。風紀委員でもなんでもいい」

目の前でカレーパンを食いながら携帯をいじっているのは、根隅真樹夫。席が近かったので話すようになった、入学以来の付き合いだ。

「滅相もねえさ。緑一中の魔女に関わるうなんて、そんな命知らずの親知らず、この学校にはいねえさ。一名を覗いて」

うるせえ。俺だってお前みたいに中学の時からアレを知ってりやこうはならなかったらうよ。しかしあだ名が『魔女』とは、美緒はやっぱり中学時代からああなのかと、その一言だけで想像できてしまうのがすごい。名は体を表す、だな。

「魔女？」

フオークとスプーンで俺と同じ中身の弁当箱をつついているカナメが、きよとんとしていいる。俺なら三分とかからずには食いきれるほどの小さな弁当箱だが、きちんと栄養バランスがとれているのはすごいと思う。喫茶店オーナーはだてじゃない、ってどこか。

「ああ、すごかったさ。二年の時だったかな？ 科学室の薬品パックってものすげえ爆薬の実験したんだけどな、おかげでグラウンドが一週間使用禁止になったぐらいさ。隕石落っこちたみたいだったさ」

「なんだそりゃ？ 核爆弾でも作ったのかよ？」

「テルミット反応だよ。金属アルミニウムを用いた一般的な酸化物還元法だ。その特徴である高温で膨大な熱量を利用したかったのがうまくいかなかったね」

聞いてないのに説明に來なくてもいい。黙って飯食ってる。

「おお、うまさうな弁当だね、カナメ君。華美さんの手作りとはうらやましい」

「おいしいよう」

『うちも腹減ったー』

「にしても、カナメちゃんが飛び級クラスの実力つてのは、この姿からは想像もできないさねえ。なんか妹がいるみたいさ」

笑うと目がびっくりするぐらい垂れ目になるが、それがなんとなくいやらしいという女子がいるのは、本人にだけ内緒だ。

「あんまそういうこと言わん方がいいぞ。命が惜しいならな」

こわーい保護者がいるからな、と胸の中で付け足してから俺も力ナメを見る。

満貫寺高校の制服であるセーラー服に身を包んだカナメ。さすがに美緒のような改造こそ施してはいないが、サイズが微妙にあつていない。さすがのナイアガラでもたったの一日でカナメサイズの制服を調達してくるのは不可能だったらしく、既製品の最小サイズを折り込んだりして着ている。

そう、カナメはおれたちのクラスに入学してきた。転入生として。ただし、あまりにも唐突なうえに強引な転入だったために担任はおるか、ほかのどの教師も把握していなかった。そこに、書類だけは整っているという無茶苦茶なごり押しで高校生になったというのだから、CIAもびっくりの手腕だ。もちろん、その書類の出所や戸籍や住民票なんかについては全てナイアガラが準備したのだが、俺は一切関与していない、するつもりもない。世の中知らない方がいいこともある。

「ロリコンシユウがカナメちゃん一人占めのためにそんなこと言っ

てるさ？ 変態さ」

「冗談でもやめてくれ。俺の沽券にかかわる。それ以上に、生き死にかかわる」

『あいつ怖いよなー。こないだうちもマジで殺されるかと思ったー』
ま、死なない体になっちまったんで、生き死に縁のない俺だけだな。

「それよりびつくりしたのは委員長さ。まさかあの科学部に」

というわけで翌日。

「なんで俺は包帯でぐるぐる巻きにされてるんだ？」

部活から逃げ出そうとした俺は、例によつてげた箱で謎の攻撃を食らって気がつけば部室、というわけだ。しかし毎回、俺はどんな攻撃食らってるんだ？

「部の存続のために決まってるじゃないか。それとも私が個人的な趣味でこんなことをするとでも？」

あり得るのでやめてもらいたい。

「ぐるぐるー。ぐるぐるー」

「そうでございます。できれば首のあたりを重点的に力を込めて死ぬ、それ死ぬから！」

嬉しそうに包帯を俺に巻くカナメに、殺人を指導するナイアガラ。俺、殺したいぐらい嫌われてるとかどんだだけだよ。死なないけど。

「それもいいね。いっそ息の根が止まっていると説得力がある」

そろそろ俺を生き物として尊重しようぜ、美緒さん。

「んで、包帯ぐるぐる巻きの俺はどこに運搬されるんだ？ このままミイラ男としてお化け屋敷にでも売っ払おうってんじゃないやねえだろうな？」

「まさか。ただちよつと保健室に行ってもらっただけだよ」

げっ！ なんつった？ 今まさか、保健室って言わなかったか？

「冗談、だよな」

「本気、だよ。この学校でどこの部の顧問もしていないのは養護教

論の浜だけだ」

うそだろ？ 保健室ってあの保健室だぞ。足を踏み入れたものは決して無傷では帰ってこられないとすらいわれる、満貫寺屈指の魔窟。骨折した野球部員が患部にばんそうこうだけを貼られて帰ってきた、という伝説がまことしやかにささやかれているが、それすら真実味があるレベルだ。

「だめだだめだだめだだめだ！ 俺を殺す気か！」

「あなた様は死にませんのでご安心を。まあ、不死ゆえに死ぬほどの苦痛を延々と受け続けるという素敵な体験はなさるかもしれないませんが」

「ぐるぐるーう」

「イヤすぎだろ、放せ！ くそう、動かない。カナメ、どんだけ包帯巻いてんだ！」

既に両手両足をガツチガチに固められていて、芋虫のように動くのが精いつぱいだ。しかも、ナイアガラが俺を抱え上げているので脱出はほぼ不可能。ちくしょう、なんでこんな時に絶妙の連携を發揮するんだ、この部は。

「さて、ではこの生贄をささげに」

「おい！ 生贄ってどういうことだ、おい！ おいしい！」

もちろん、抵抗なんて無駄だってわかっている。でもさ、無駄だってわかっただけでも生きるためにあかくもんだろ？ それが命ってことだろ？

「あなた様は既に人間ではございませんけどね」

「夢も希望もあつたもんじゃねえな」

「と騒ぐ間に到着だよ。たのもー！」

消毒液独特のにおいが廊下にまで滲み出しているが、この匂いに戦慄を覚えるなんて世界中でもここぐらいのもんだ。

「やかましい！ 帰れ！」

おいおい、信じられんがこれが保険教師で二十代女の発言かよ本当に病人だったらどうすんだよ。と、口に出してはいけない。何せ

これがこの保健室を魔窟たらしめている悪の元凶。保険教師兼擁護教師、浜茜。名実ともに満貫寺最強の教師だ。

漂白したように真っ白な白衣に健康サンダル、ざっくりと後ろでくくった髪型はポニーテールというには少々ぶっきらぼうだ。見るからに柔和そうな顔立ちのくせに、口からは罵声しか出てこない。

「病人です」

「ほっとけ、若いんだから勝手に治る」

「ぐるぐるー」

「この通り、包帯ぐるぐる巻きの重症患者でございます」

「あ？ もう処置済みだろそれ。だったら廊下にも転がしとけ。

それとも壊れてんのは脳みそか？ だったら専門外だ。脳と性病はここじゃ治らん」

ひでえ。このやり取りだけで、保健室の本質が垣間見える。

「というのはここに来る口実で、茜先生にお願いがあつて来たのです」

「断る。あたしは今プリン食うのに忙しいんだ」

すげえ、美緒が問答無用で断られるとこなんて初めて見た。しかも、プリンを食う片手間で断られている。何でプリンなんだ？ 似合わないな。

「プリンほどの食いもんは他にねえだろ。幸せはプリンでありプリンは幸せである、だよ。プリンのためならダークサイドに落ちてもかまわん」

心配すんな、もう落ちてる。

と、そんな浜のプリン至上主義の演説などさらっと無視した美緒も負けてはいない。

「我が部の顧問になつてもらいたい」

自分の主張を貫くだけの者同士の会話なんて、こんなもんだわな。「断るつつただろ……なに？ 顧問？」

安物の事務椅子をギシギシいわせながら振り返る姿は、どこことなく先日的美緒を想起させる。傍若無人な輩というのは、仕草が似る

ものなのか。

「ええ、顧問です。我が部の顧問を担えるのは厚顔無恥にして傍若無人、唯我独尊の浜先生以外にないとの結論に至ったわけです」

「ほう、それで人が首を縦に振ると思ってるあたりがすごいな。天王寺美緒」

「私をご存じとは見上げたものです。さあ、この契約書にサインを」「断る」

だろうな。そのつもりだった人間でさえ返答を変えるレベルだ。これをマジでやっているんだとしたら、ある意味で天才だ。

「何故です？」

何故です、ってお前に聞きたいわ。

「私は忙しい。ただでさえ面倒な事務作業に無駄な職員会議、果ては怪我をしたバカの面倒まで見ねばならん。そんな中で部活動などに時間を割くなんて、面倒だろう」

たぶん本音は最後の一言なんだろうな。ここまで露骨にめんどくさそうな顔をする大人もどうかと思うが、その分ストレートでわかりやすい。曖昧に茶を濁されるより、いくらかすつきりする。

「さあ帰った帰った。私は忙しい」

取りつく島もない、ってのはまさにこのことだな。顔はこつちを向いているのに、話を聞く気なんてさらさらないのが丸わかりだ。にしても、ここまで邪険にされるってのも解せない。なんて思っていると、それまで黙っていたカナメが不意に口を開いた。

「シュー、攻撃」

「ええー！」

「ナイスだ、カナメ君！ それでこそ超科学部員だよ」

なんだそれ？ 何で攻撃？ そして何で勝手に動く俺の腕。これじゃあまるで握った拳を浜に叩きつけようとしてるみたいじゃないか。やめろ、俺の意志じゃない。

「いい度胸だ。要求を吞まねば実力行使とは、その意気だけは認めてやるぞ。けど」

「いいいや、ちちち、ちが、ちが」

「そうか、血が見たいか。望むところだ」

振り上げられる俺の拳、逃げたいのに逃げられない俺の体、迫りくる浜の鉄拳。おい、何で保健室にメリケンサックがあるんだあああああああ。

黒幕？ もしかして

「な、見られたらどう？」

「鼻血が、止まりばせん」

しかも、何で俺の鼻血を俺が掃除させられてんだ？

「まあ意気込みはわかったんだが、何故私なんだ？ 他に教員がいないにしても、私には言いにくいだろう、普通」

「ご自分のことがよくわかっていらっしやるようだが、だからと言ってメリケンサックでカウンターはひでえぞ。いくらなんでも。」

「見ての通り、我々の目標は彼女を立派な魔王として育成することです」

うん。どこをどう見ても、見ての通りにはつながらないな。

「そこで、魔王を地でいく存在ならば顧問としては申し分ないと考えたのです」

「さらっと失礼だぞ、天王寺」

「というわけで、お願いします」

物言いはいつものソレだが、俺達としゃべっているときにはない真摯さが垣間見える。こいつはこいつで本気なんだろうな。自分の目標ってこともあるだろうけど、吹水のことを考えているのも事実なんだろう。さもなければ、ここまでではしないはずだ、こいつの性格なら。だったら、

「俺からば、おでがいしはす。ぜひ、超科学部どこぼんでい」

鼻にポツチを詰めているせいでちゃんと発音できない。うわあ、情けねえ。

「しかしなあ、魔王だ魔法だと俄かには信じがたいな。何でもやってみることは大事だろうけど、さすがに部としての体裁を保つのであればそれなりに筋の通った活動趣旨が必要だろう」

痛いところを突かれる。たしかに、そもそも魔法という概念そのものが世界の常識にないところに、魔王ときたもんだ。お遊び仲良

しサークルの電波満載活動にしか見えない。そうならば、部活としての認定そのものが難しいだろう。いくら科学部が前身の実験活動といっても、限度がある。

その上で少なくとも、目の前の人物だけは納得させなければならぬ。難易度高いな。

「なーなー、うち思うんだけどさ、魔王の魔力であの科学部とかいう連中をぶっ飛ばした方が早くないか？　なんかめんどくさくなってきたよ」

「黙れウサギ。あんな、それだと解決にならんとさつきも」

「いやあ〜〜ん、かつわいいい〜ん」

「〜え？」「〜」

誰の口からともなく漏れた音は、例外なく目の前の光景が異常事態であることを告げている。ナイアガラや美緒でさえもがそうなんだから、間違いないだろう。

「きゃう〜、しゃべるうさたん、うさた〜ん。もういい、魔法でいい魔王でもいい、うさたんがしゃべるんなら先生何でも許しちゃう、きゃる〜ん」

「ちょ、放せよな。くるし、くるしい！　抱くな！　モコモコすんな、くすぐりたい！」

「いやあん、も〜も〜あかねちゃんモフモフだいしゅき、しゅき〜ん。魔法さいご〜ん」

誰からともなくその光景から目をそらす。そうしてやるのが優しいさなんだと。

「ちよつと、助けるよな。シユー、杏子！」

がんばれうさぎ、お前の存在でこの人が魔法の存在を肯定するんだ。耐える。

いつもの自分に重ねながら、人身御供ならぬウサ身御供と化したモモを見つめておく。犠牲になったやつ姿を目に焼き付けておくのが、せめてもの礼儀ってもんだらう。

「ときに、魔王というのが出来上がってしまうのはどうなんだ？

私の知る限りで、魔王が現れると大体世界は滅びないか？ ゲームなんかだとたいいていそうだろう」

たっぷり十分は喋るウサギを堪能した後、そんなキリツとした顔してももう遅い。あんたの胸元でぐったりと疲れ切っているモモがその証拠だからな。

しかし、あのどれでれの後とは思えない、ズバリ鋭いご質問。俺もそれは気になるところなんだが、誰か明確に答えられるんだろうか？

「だいじょーぶじゃねえの？ 魔王から世界滅びるオーラが垂れ流しなわけでもないだろうしさ。ま、魔王になった影響で精神的な変化が現れちゃったら話は別だけだよ」

うさぎ、投げやりすぎる説明だぞ。

「というわけで、安全です」

「は、はい。頑張つて、いい魔王になりますから」

「なんとすれば美緒様の魔法で魔界に送ってしまえばよろしゅうございます。人界に危険はございません」

なんだかもう、收拾がつかなくなってるんだが……いい魔王って何だよ。

「ふん……半信半疑ではあるが、面白そうだな。私に立ち向かってくる生徒なんて今まで一人もいなかったしな、その意気に免じてハンコを押してやろう」

うそつけ、喋るうさぎにやられただけのくせに。

「ありがとう、魔人」

「急にハンコを押したくなってきたぞ」

「美緒、余計なことを言うな」

とか何とか言いながら、部活動申請用紙の顧問の欄にきっちり署名捺印してくれるんだから、ありがたい。あとはこれを生徒会に提出すれば万事オツケーってわけだ。

いや、もっと大きな問題を据え置きにしているのはわかってるんだ。あるだろ、現実から目をそらすために、目の前の小さなことに

集中するって。テスト前の部屋掃除みたいなもんだよ。

「でもまあ、これで一段落ついたわけだな。よかったな、委員長」
「う、うん。あ、ありが、とう。これで私も、もっともっと強く、なれる。」

必死に言葉を探しながらの、オドオドとした態度はまだまだ魔王には程遠いが、俺としてはこのまんまでいいんじゃないかと思う。つていうか、これ以上俺の周りに魔王的な奴が増えていくと、命にかかわる。美緒とナイアガラだけでも十分だったのに、顧問まで魔王だ。おかんは……考えないようにしよう。

「あ、あと、ね。さっきの、あれ」

あれって、どれだ？ 何を言われるのか気が気ではない。まさか、数々の変態的所業に愛想を尽かされてしまったのだろうか。まずい、それはまずい！

「い、いや、さっきのあれはなんていうか、その」

「ぼ、僕のために、先生に飛びかかっていった、の。びっくりしたけど、嬉しかった」

やばい、上目づかいに何かドキドキしてるぞ。静まれ、静まれ俺のリビドー！

「ん」

こういうときは必要以上に喋るとぼろが出る。にしても何だ、今のは。確かにおどおどした感じが可愛いとは思うが、この距離がこんなにやばいとは想定外だ。

「ん、ああ。俺もびっくりだ」

俺の意志じゃないんでほんとにびっくりだったけどな。まだ心臓バクバク言ってる。しかもたぶん、このバクバクはその驚きだけじゃない。

「イラっとくるほど青春してるとこ申し訳ないんだが、あと一つ気になることがある」

メリケンサックをもてあそびながら話す白衣の養護教師。新手の戦闘漫画に出てきそうな光景だが、反対側の手がずつとつさぎを撫

でているせいで当初ほどの恐さはない。

「魔王ということは、やっぱりアレも出てくるんじゃないのか？」

「アレ、と言うと？」

「あれだよ、ほら、RPGなんかだと必ず魔王とセットで出てくる」

ああ、そう言われれば考えなかったわけじゃないけど、確かにそうだよな。普通ワンセットだよな。アレ。でもな、敢えて言わなかったんだよ。

「勇者だね！ 私としたことがうっかりしていた。そうだ、勇者を倒してこそその魔王だ」

あゝあ、こうなるのわかってたから黙ってたのに。火がついちやったやつがいるよ。どうすんだよめんどくさいな。

もちろんこの直後に発せられた勅命が、俺を平穏な日常からさらに遠ざけたんだが、そんなもんはもう返ってこないと思った方がいいってことか？ どうなんだ、神様？

「おい！ どういうことだ、言われたとおりにやったのに部室が返ってこなかったぞ」

「おかしいじゃないか、また部室で好き勝手できる上にあの天王寺に一泡吹かせられるって話だっただろ？ 話が違う」

「まあ予想外だったけど、どうするの？ 科学部の活動、部室ないとできないよね？」

放課後の空き教室。グラウンドから聞こえる運動部の掛け声は、どこか別の世界の音のようだ。埃っぽさと生乾きの雑巾のにおいが鼻をつく。

一か所に集まった新科学部三人組は、机を取り囲むようにして声を荒らげている。その声の向けられた先に、一人の男子生徒が鬱陶しそうに眉をひそめて座っている。

「おい、聞いているのか？」

その一言に、それまで無言を貫いてきた男子生徒のこめかみがひきつるように痙攣する。かれこれ十五分、下手に出るのにも限界が

あるといった風体だ。

「聞いてるからこんな顔してるんだろ？ 自分たちの役に立たないつぷりを棚に上げて俺に文句言うって、どんだけ使えないんだよ」
人睨みで三人を閉口させる眼光の鋭さは、美緒やナイアガラにも引けを取らない。

さらに男は眉間のしわを深めながら続けるが、その口ぶりに遠慮会釈はない。それどころか、相手を切りつける刃物のような残酷ささえうかがえる。顔立ちはどこか柔和な雰囲気をもとっている。そのギャップが口ぶりのえげつなさを際立たせている。

「も〜、俺だつて暇じゃないんだからな、勘弁してくれよな〜」

気さくな言葉の中に、露骨なほどの棘。しかも向けられた本人でなければ気づけないような巧妙さで隠されたそれは、ピンポイントで相手の心を抉る。しかも、無意識に。

「とりあえず、もういいから適当に部屋探しなよ。もう俺はどうこ
う言わないし。ごめんね、あれこれ口出しして」

「いや、そんな」

「なに？ まだなんかある？」

実に朗らかな笑顔。教科書や予備校のポスターあたりに採用され
そうな百点満点の笑みだが、その内実を知る者には刃物を首筋に突
き付けられているに等しい。

「あ、いや、そういうことじゃなくってね」

「も〜、織手君なら大丈夫かなて思ったのに、痛いなあ。やっぱ天
王寺は難攻不落かあ」

「そんな、なんていうか、その」

「ま、仕方ないって。俺だつてビビるもん、あんな怖い人」

「でもね」そう言つて男、続ける。

「そうも言つてられないんだよね〜。世界のためなんだつてさ」
ふざけた物言いのくせに、男の眼はその瞬間だけは、笑っていな
かった。

「世界つて何だよ。マジで救うのかよ、副会長〜」

小馬鹿にしたような口調とは裏腹に、その眼光には気弱そうな色彩がゆらゆらと揺らめいて、やらされている感がたっぷりあふれ出ている。

生徒会長、桑戸仁。

誰もある程度の尊敬と、「あそこにいるのが自分じゃなくて良かった」という思いを込めて、こつ呼ぶ。

副会長の犬、と。

覚醒？ 魔界の王

「今、なんつった？」

「よく聞こえなかったが、重大発表だったように思うよ」「
というわけでリクエスト。ワンモアタイムだ。」

「あ、あのね。昨日からね、魔法、使えるように、なった」
「へえ」

うん。今日の卵焼きはいつになく美味だ。あの鬼のようなおかも伊達や酔狂で喫茶店経営をしているわけではない。若いころは手当たりしだい料理で道場破りをやったとかいつてたが、あの女ならあり得る話だ。

「シユウウー、卵焼き落としたあ」

「あんな、何でもかんでも落としたもんを俺に食わせるな。大丈夫だ、三秒ルールだ」

「はい」

はいはい、結局食うのは俺ですよ。

「何故そんな大事なことを昼休みまで黙っていたのかね！ 授業なんかに出ている場合ではない。シュータロー、我々は午後から休講だ！」

んな訳あるか、大学じゃあるまいし。高校生の自主休講なんて、それこそ俺の場合は命の危機に直結だからパスだ。否定の意味合いを込めて無言の視線をくれてやる。

「み、美緒、声おつきいよ」

「カナメ君、来たまえ。部室でラムネを飲もう」

「うん」

「おらあ！ なにごずるいことやってんだてめえ！」

しかもラムネごときに釣られてのこのこついで行かないでくれよな、神様。何故だかこいつは人間の世界の駄菓子やらジャンクフードやらが好きらしい。先日など、一銭焼きを与えたらとび跳ねて喜

んだんだから、安上がりだよな。

「何を言っているんだね。私はカナメ君を誘っただけだよ。それとも君は、彼女とひと時も離れたくないような劣情を胸に秘めているのかね？」

「ひゅーひゅー、お熱いさー。唐揚げもーらい」

「てめえ、何とさくさでラス一食ってんだ！ だいたいなあ……うつ」

何だこの背筋に直接ブリザードを吹き付けられたような寒気は。体よりも、むしろ魂の方が凍りつくような冷たさは初めての体験だったが、直後にその正体が判明する。

殺意。

窓ガラスの向こう、廊下を挟んだはるか彼方からこちらに向けられているのは、間違いなくナイアガラ視線。視力ではなく、体が神気になったせいでやたらと気配の類に敏感になった俺が感じるようになった、ありがたくないものの一つだ。

「こ、この話題は封印しよう。精神衛生上よろしくない」

「何さ？ シューがカナメちゃんにぞっこんつてのはもう」

「だから！ うああ、内臓を抉るこの不快な感触はああああ」

「せ、千古君は、そうなの？ カナメちゃんみたいな子が、こ、好み？」

『うお！ 何だこの殺意のオーラ。自分に向けられてるんじゃないのに、こつちまで鳥肌立ってるぞ』

うさぎのくせに鳥肌たつのかよ。

「ともかくだ！ くすぶっている時間が一秒でも惜しい！ 急がないかー！」

とんでもない量の弁当を恐るべき勢いでかつ込む姿は、テレビで見る大食いチャンピオンそのものだ。あの細い体のどこにそれだけの飯が入るのか、納得いかない。四次元胃袋を搭載しているとしたか考えられない。広辞苑サイズの弁当箱って、おかしいだろ。

「さあ、早く部室で」

「あ、ちよつと美緒。僕まだご飯が途中で」

「そんなものは部室で食いたまえ。魔法が先だよ、魔王君！」

かわいそうに。左手でギリギリランチパックを一つ捕まえられたようだが、残された蒸しパンとパックの牛乳が不憫だ。あとで届けてやる。っていうか、結局部室行かなきゃなんだよな、はあ。

「なんていうか、お前ら、毎日が全力さね」

俺の唐揚げを咀嚼する根隅のほっぺたを無意味にくにくにと押しやるが、男同士でほっぺたを触るといふ異常なまでのむなし行為にすぐに心が折れた。

「ギリギリ、とも言っけどな」

残りの弁当をかつ込みながら、ようやく訪れた束の間の平穏を噛みしめる。美緒がいらないだけで教室は春風のような穏やかな空気に包まれ、光の粒子さえふわふわと宙を舞っているようだ。というか、なんかきらきらしたものが本当に舞ってないか？

「どうしたさ？」

「どうしたって、お前。これ、見えないのか？」

「これって、何がさ？」

「何が、って……え？ めっちゃキラキラして……え？」

きょとんとしている根隅。マジで見えないのか？ 蛍みたいな光の粒が、こんなにも教室に充滿してるっていうのに。何なら理科の教科書に出てくる天の川みたいになってる場所まであるっていうのに。

「何言ってるさ？ とうとうシユウまで脳内お花畑になつたさ？」

確認のためにカナメを見ると、カナメはしっかりと光の粒子を目で追っている。が、どうやら見えているのは俺達二人だけのよう。クラスの他のやつらはまるで見えていないらしい。それこそ会話をしている二人の間を光が横切ってもピクリとも反応しない。

しかも、よく見るとその光は人の体をすり抜けるようにして飛んでいる。

ためしに指先でつまんでみると、ほわっとした綿毛のような感触

とともにほじけて消滅してしまう。どうやら魔法的神的魔王的な物質だろぅことが、想像された

「カナメ、聞いていいか。これ、何だかわかるか？」

面白生物を見るような眼で俺を見ている根隅はさておいて、俺はカナメに尋ねてみる。

「ん。神気みたいなものかなあ？ でも、ちよつと違う気もするう。ねえ、知ってるう？」

「あゝ？ ああ。こりゃ魔力だよ、魔力。うちの力の源だけど、すげえなこの量。こんだけあればどんな魔法でも使いたい放題だな」
靴からひよっこり顔を出したウサギは、クンクンと鼻を鳴らしているばかりか、時折口を開いてパクリと宙に舞う光の粒子を食べては舌なめずりをしている。

『食うのかよ』

『お前らだつて餌食つて体力補給するだろ？ こつやつて直接食つても補給できるんだよ。にしても、こんなにも具現化した魔力がそこらじゅうに飛んでるなんて初めて見た』

『人間の世界では、つてことか？』

それにしてもあまりにもうさぎが物珍しそつだと思つていと案の定、

『うちの世界でもこんな状態そつそつないよ。それこそ天の恵み状態だ』

魔界だか地獄だか知らんが、天の恵みつていう表現が適切だとは思えないが、まあそつなんだろぅ。どうにも最近、悪魔が身近で困る。

『たぶん、杏子だろつな』

『委員長が？』

「のわ、どうしたさいきなり？ お花畑のみならず脳内彼女と会話まで始めたさ？」

やべ、うつかり声に出しちゃった。

「あー、いや、おう！ カナメ、食い終わったか？ そしたらこの

パンと、おわあなんてこったカバンまで忘れてるじゃないかー、ひどいなあ美緒のやつもー」

ごく自然にリカバリー。忘れ物を哀れな吹水に届けてやる体裁を整えて、しかも鞆にいるうさぎまで回収するファインプレー。俺、グツジョブ。

めっちゃ憐れみの目で根隅に見られるなんて屈辱以外の何でもない。しかし、ここで話しているといつまた口に出しちまうかもわからん。めんどくせえな、テレパシー。

「しゅっ、演技下手あ」

「うっせえ、とにかく脱出すりゃなんだっていいんだよ」

『え？ アレ演技だったのか？ てつきり気が狂ったふりかとおキヤアアア』

全力で鞆をぶん回す。縦横斜めにふつとんで無重力体験でもしやがれ、うさ公。ああああ、どうせ俺は演技下手ですよ。中学の文化祭で全てのセリフをカットされた男だよ。

『ふあ、ふあう、ふあう、星が、ほしがまわるるるるう』

よし。悪魔撃退。じゃなかった。

「んで、さっきの話だけだよ、委員長とふわふわびかぴかの魔力とどう関係があんだ？」

勢いで教室を飛び出し、あてもなく廊下を歩きながら鞆のなかのうさぎに尋ねる。

『ふうええええ。な、かんけいって、そりゃだって杏子はまおーなんだからまりよくぐらいふりまくにきまって、ふええええ、まわるう』

「あ、それでなんだあ。杏子のおいだあ、これ」

匂いなんかすんのか？ くんかくんか……あ、いや、通りすがりの女子が俺をものすっこい変なもん見る目で見て、いや、違う、俺はそういう趣味ではなくあああ……

「シユウ、どうかしたのお？」

「いや、忘れてくれ。今俺は大事な何かをたくさん失った」

「ふぬ？」

「だろうな。お前にやわからんよ。お子様で、なおかつ神様なんて言う純粹な心の持ち主には、穢れ始めた思春期男子のリビドーなんて。」

にしても何が悲しいって、あてもなく歩いてるはずなのに、俺の脚は吸い寄せられるように部室に向かうんだな。まあ、吹水の荷物を持って行ってやるんだから当たり前なんだが、それにしてもあまりにも自然に足が向いたのは悲しかった。天王寺美緒政権の恐怖政治の影響なのは間違いない。

「ふわあ」「おおっ！」

扉を開けた瞬間に、目の前を何か横切った。あわや直撃コースのそれを霞めるような紙一重で交わしたが、鼻っ面を捕らえたほのかな熱に顔をしかめる。何か、トカゲみたいな鳥みみたいな生き物にも見えたが、はつきりとは分からない。

「で、お前らは何をやっとするんだ？」

第一声のため息とともにこぼれる。いや、ため息だけにならないか。つたのは、褒めるべきところだぞ、これ。

「何って、決まっているではないか。魔法が使えるというのだからやるべきは一つ、魔物の生成だよ」

「ナイアガラの希望としてはドラゴンが見とうございます。架空の生物もえー、でございます」

まず、部室を開けるととんでもない量のピンク粒子が狭い室内にぎゅっぎゅっ詰めになっていた。扉を開けたとたんに勢いよく噴き出すような魔力を部屋に溜めるな。

しかも、魔物を作るだと？

「あ、え、千古君は違うのが、いい？ 私、どんなのがいいのか、わからなくって」

部屋の真ん中では、その魔力を粘土のようにこねながら何かを作っている魔王の姿。興味津津にそれを覗き込んで、邪悪なアドバイスをする悪魔のごとき存在二人にはもう何を言うべくもないが、

手にした資料だけは奪い去っておいた。

「ああ、それがないと具体的なドラゴンのイメージが伝えられないではないか」

「伝えんでいーわ！ お前らは何だ？ 世界を混沌の海に沈めたいのか？」

ゲームの攻略本の、モンスターのグラフィックが掲載されたページを閉じる。なんで本の後ろの方の、凶悪なモンスターばっかのページ開いてんだよ。

「でも、魔王はとにかく世界を征服するものだって、美緒に言われて、そう言われれば、そう、かなって」

「そう、かなって……じゃないよもー。委員長ものせられるなよな。基本的にこいつらの言うことは聞き流さなきゃ」

「いい度胸だなシュータロー」

「じゃあお前の言うとおりドラゴンだかキマイラだかが出来上がった暁には何するつもりだったんだよ？」

「決まり切ったことを。まずは一色市を混乱の渦に巻き込み、次は政府にけしかけ」

「とうわけだ。いい魔王になるんならこれはダメだろ？」

「うん……」

シユンとする吹水が、ある程度形になりかけていたピンクの光から手を離すと、ふわふわと宙に舞って霧のように散ってしまう。とりあえず世界の危機は去ったと思いたい。

世界の命運がこんな薄汚い小部屋にかかっているなんて、正直解せない。

「にしてもすごいな、杏子。昨日の今日でこんなに濃度と純度の高い魔力が溢れるなんて、魔王の才能あったのかも」

鞆からびよこんと飛びだしたモモが、嬉しそうに魔力の粒に頭を押しついたり、前足でつついたりしている。そのたびに光の粒がはじけて、キラキラと星のように散ってゆく。たしかに、純度はわからないが濃度はすごそうだ。目に見えるんだもんな。

「そう、かな？　でも、昨日のは失敗しちゃって、どこかに行っちゃったし」

ん？

「あとはこの調子で制御の訓練と、魔力のキャパシティを大きくしていけば魔王としては申し分なしだな」

「うん。何だか、実感があるって、嬉しい」

「でも、ちょっとここまでの才能は想定がすぎるっつーか、そのモモが何やらもごもごと口ごもっているが、結局何を言うてもなかった。何だったんだろうな？　聞きたいような、聞きたくないような。」

「さすがだね。我が部自慢の魔王だけはあるね、委員長君」

「あー、ちよっとよろしいか？」

おずおずと、給食費を盗んだのは僕です、ぐらいの申し訳なさを纏わせた右手を挙げると、実にめんどくさそうなナイアガラの視線に貫かれる。そういう目はコスプレしながらすると迫力が半減するぞ。今日はシンプルにワニのコスプレですね。ドラゴンが見たいって言うてたけど、そこにかかっているんだろうか？

「仰ってみてください。場合によっては許可いたします」

逆だろ普通。そのワニの尻尾はどういう理屈で動いてんだよ。お前、尻尾はえとらんかっただろ。

「さっき、昨日のは失敗してどっか行っただけ、とか聞こえたけど空耳だよな」

「何を言っているんだね、委員長君はちゃんとそう言っていたではないか」

「で、さっきは何やらモンスターののようなものを作ろうとしてなかったか？」

「まったくもって節穴でございますね（びたんびたん）魔物の精製以外の何にお見えになったのでございますか？」

ワニの口の部分から顔を出しているの、見ようによってはワニに食われているように見えなくてもないが、できればほんとに食われ

てくれないかな。願望を形にするべく、とりあえず口を閉じてひもで縛っておいた。

「もちろん、探し出してる、よな？」

きよろきよろして、今初めて気がつきましたみたいな視線をぐるりと巡らせているご様子だが、マジですか？ 誰に助けを求めても、この場所にまともな助けを提供できるような業者はありません。むしろ青少年の健全な育成からは程遠いやつの巣窟です。とくに、ここで楽しそうに魔力の粒をついついている金髪ロングの女なんかはもつてのほかだぞ。何だその、額に貼った紙切れは。キョンシーごっこか？ 古いな。

「見たまえ。この魔法陣を額に貼ると魔力が見えるのだよ」

そうですか。魔力になっちまえ。

「つまり、まだ野放し、と」

返事はないが、その慌てっぷりは首を縦に振られるよりわかりやすい。

「ちなみに、何を作ったのか、教えてくれるか？」

気が進まないがやむを得ない。あー、胃が痛くなりそうだ。

「えと……」

もじもじ、もじもじ。いや、恥じらう姿がそれらしいのはわかるし、眼鏡の奥でうるんだ瞳も女の子っぽいのだが、今は魔王様らしくしてくれ。

「ま……ま、じよ」

「へえ」

「初めてにしては上出来だったよな。ちょいイメージと違って物理攻撃重視だったけど」

「へえ」

魔女ってモンスターだったんだ。っていう以外に俺に何か期待しているとしたら大間違いだ。魔女が放し飼いになってる町に魔王と神様がいて、神様の下僕の俺以外は例外なく非常識の極北を極めたようなやつらばかりだ。何が言える？ 強いて言うなら、

「何やっとなんじゃー！」

「ひろう、ご、ごめん、なさい」

「だいたいなあ！ あぶっ」

胃がねじ切れるかと思うような衝撃が脳天まで突き抜けて、意識がそのまま頭のとっぺんから離脱する。部室を俯瞰する不思議な経験は、何だか心地よかった。

ああ、俺、ワニにボディブロー食らったんだ。道理で重いわけだよ。

「シユウタロー。人間だれしも失敗はつきものだ。大事なのはリカバリ」

「ぞ、それは、ぎいだ」

「ごふっ。血反吐でもはくかと思ったら、出たのはただの咳だけ。くそう、吐血すればさすがにこの集団から抜けられ……ねえわな。

「どっかで聞いたセリフだが、なら何でリカーバーに入っただい」

「入っていたではないか。今度こそ委員長君の思い描いた通りの魔女を」

「そっちじゃねえよ！ リカーバーの方向が直角に間違ってるよ！

違っただる普通！」

「まったく、何が不満だというのだね？ 君はこの超科学部の活動を加速させたいのか減速させたいのかどっちだね？」

「停止しろよ停止！」

「「ええ〜」」

神様と魔王がそろって「ええ〜」って言うな。

「カナメ、お前は言っちゃダメだろ。特に」

「でも、そうしたら杏子は立派な魔王になれないんじゃないの？」

魔王が大成するのはもはや神様公認ってことなのか？ まあそこは今更だからもう目をつぶる。というかつぶっててもはつきり見えるぐらい我らが超科学部は大魔王を作り上げる気満々だが、だからと言ってこの世をモンスター跳梁跋扈する魔界に変えるわけには

いかんだろ。

むーむーもーもー。

ワニが何か言いたそうだけど、うるさい。

「その魔女は勝手に消滅したりしないのか？」

「たぶんしねえな。きつかけこそ魔力による精製とはいえ、与えられたのは命だ。魔力を使いきりでもしない限りは消滅しないよ。今のあんたみたいにな」

うさぎの鼻がツイツと俺に向けられる。

今の俺のように、ってのはぐさりと来るものがあつたが、今はそんなことを言ってる場合じゃないと心を奮い立たせる。ああ、俺の命…… やっぱ奮い立たねえ。

「って、てことは、今もその辺を逃げ回ってるってことか」

「たぶんな。突然生成されてびっくりしたんだろ、慌てて飛び出して行っちゃまった」

笑い話じゃないんだが、まあ魔神のこいつに言っても実感なさそうだ。同類の生き物の存在そのものに疑問を持ってって言うてるようなもんだもんな。

「しかし、まずくないか？」

「確かに一理あるな」

おお、思いもよらないところから良識たつぷりの声が上がった。

美緒、お前にそんなまともな思考回路が搭載されているなんて想像もしなかった俺を許してくれ。

「魔女を一刻も早く捕まえ、我らのしもべとするべきだったな。その点に思い至らなかつたとは、少々気がはやってたということか。自重せねばな」

はい。想像どおりでした。やっぱり、搭載されてませんでした。それでも、

「とりあえず、探した後のことは後になってから考えよう。そうしよう。うん」

こんなにも未来を夢見ない高校生に、俺はいつからなつたんだろ

うな。ごめんな、中学んときの俺。夢も希望もなくしたかもしれん。
最初からあったかどうか怪しいが。

進展？ 魔王軍

「これで、十匹目、と」

体育倉庫の裏手。ほぼ朽ち果てたサッカーゴールのネットに絡まるようにして身動きが取れなくなっているそいつをつまみあげる。そいつが「何なのか」と尋ねられると、俺は即答で「何だろうね」と答える。だってわかんねえんだもん、こんな生き物。ってか、これ本当に生き物なのか？

「これなにい？」

「なんだろうな」

はい、宣言通りの会話、ってわけだ。

にしても、カナメの疑問ももつともだ。なんせ、二足歩行するネズミに蝙蝠の羽が生えている、としか言いようがないんだからな。

「んじゃ、よろしくな」

「あ、うん」

その「何か」を吹水に放ってよこすと、そいつはさしたる抵抗も見せずに吹水の掌の上に着地し、そのまますうつと姿を消してしまふ。あとに残るのは、指の隙間からこぼれるようにして落ちる淡いピンクの光、魔力だけだ。

俺の指先にはじわじわとしびれるような感触が残されているが、俺の体を構成する神気と、吹水の作りだした魔力がぶつかっているからだ。魔力と神気というのは相反するエネルギーらしく、お互いをぶつけると対消滅してしまうとのことだ。その辺はなんとなく、納得できる気がする。RPGの光と闇の属性みたいなもんだな。

「何回見ても不思議だよな。ちゃんとつまめるのにな」

言って指先をこすり合わせるように動かしてみると、まだそこには生き物の体独特の温度や体毛の感触がふんわりと残っている。

「あんまりおっきいのとぶつかると、シューの存在自体が消えちゃうんだよ」

さらりと恐ろしいことを言わないでください。

「使い魔、なんだって。ぼ、僕の、魔力に引かれて、魔力そのものが形に、なるって」

だから、吹水の指先一つでそいつは魔力へと還元されてしまう、ということらしい。

しかも、そいつらのイメージが妙にほわほわとかわいらしくなるのは、吹水の中にある生物のイメージが影響しているらしいというのだから、手に負えない。先ほどのやつも、ネズミというよりハムスターに近い感じだ。魔族をあんにかわいく作られてもな。

もとが魔力なので、魔力の見える者にしか見えないのが救いだっ
た。こんなもんが誰かれ構わず見えたら、大騒ぎ間違いなしだろう。
「こんな小物追っかけてる場合じゃない気もするけど」
「でも、美緒が来るまで待つてる、って」

美緒は今この場所にはいない。なんて平和なんだ。これほどの平和がいまだかつてあっただろうか。まあ、あったっちゃあったが、最近の記憶の中にはない。

ただ、いないからといって心が平穩を保っているかといわれるとそれもまたそういうわけではない。何せ今、美緒のやつは戦闘まっただ中だろうからな。

敵の名を、生徒会会計という。

実に事務的な話だが、美緒が科学部ではなく「超科学部」なる組織を立ち上げた際に、生徒会としては新組織の発足という体裁になったのだという。それはつまり、科学部としての実績を引き継いだ組織ではなく、全くまっさらな組織だということだ。

まあ素晴らしい。真っ白なキャンバスに七色の絵の具で夢という名の俺達だけの物語を描こう、なんて夢いっぱい希望いっぱいの甘酸っぱい話ではない。

予算。

この二文字が大きくのしかかっかってくるわけである。腐っても科学部は長年の歴史を持つそれなりの部活動であり、それなりの予算

は確保されていた。しかし、超科学部は何の実績もないうえにポツと出の一年生だけの部活動だ。となれば、予算の審査は相当に厳しくなると考えるのが妥当だ。そのために、さすがの美緒も予算会議への出席を余儀なくされている、というわけだ。

「あいつ、すげえよな。金属バット持って乗り込んで来たもんな」
三十分ほど前の話である。突然部室の扉が開いたかと思うと、そこに現れたのはえらく小柄な女子生徒。それこそカナメと比べても遜色のないコンパクトボディは、やはり制服のサイズがないのか、だぼだぼのカーディガンを着ていたのが印象的だ。

そのちびっこがいきなり、金属バットを振りかざしながらぼそりと呟いた。

「天王寺美緒、部費横領とはいいい度胸だ」

「私の部に宣戦布告とはいいい度胸だね。木安春」

そして幕を開ける、第一回物騒な棒きれ王者決定トーナメント決勝戦。金属バットvsバールの火ぶたが切って落とされたわけだが、教室に響き渡る、金属同士がぶつかる衝撃音というのは思い出しても悪寒が走る。

「すごかった、ねえ」

「ああ」

すごいなんてもんじゃない。怒号の合間に響く金属音。それを食らいつくすように口を開いて言いたいことを言い合う両者。纏めればたったの二行「科学部時代の部費を返納しろ。新たな部として部費を申請しろ」で終わる話なのに、何故か延々五分以上も互いの武器を叩きつけ合った。たぶん、底知れない私怨があるんだろうが、首を突っ込むような馬鹿はやらない。俺だって成長するんだ。

というわけで、魔女探しは一時中断。俺達は校内をぶらつきながら細かい魔力生命をつまみ上げては魔力に返すという、地道な作業に没頭しているわけだ。モモ曰く、たぶん大丈夫だけど念のため、だそうだ。魔王の魔力ってのはそれほど影響力があるのかなんとか、いよいよ魔界じみてきたぞ。

「ぶちようは、大変、だね」

今なお絶賛魔力生産中の吹水が、眼鏡にピンク色の光を灯して話している。その間にもまた一匹。今度はまんまハムスターだけどちよつと尻尾が長いかな、という生き物が吹水につまみ上げられて光になる。十一匹。

「もうちよつと僕が、魔力を制御できれば、あんまり生まれないらしいんだ。ごめんね」

申し訳なさそうに言う。

「ま、しゃーねえって。魔王になってまだ何日もたってねえんだし、慣れればいいさ」

「う、うん。あり、がと」

魔王になって、か。しかし、お願いすれば魔王に慣れてしまう世界だったなんてちよつと驚きだ。ナイアガラではないが、この世にチートがあるなんて複雑な気分だ。

とはいうが、こつちはこつちで一向に人間に戻る手段を探せそうにもないし、かといって神の使いとして何かができるかといえば、ただ死なないだけという消極的な能力だ。

「でも、たとえばなんだけだよ、魔物の類って委員長がやってるみたいに魔力に還すんじゃないかって、戦ってやつつけても魔力に戻るのか？」

「あ、え？ どう、なんだろう？」

「たぶん、消滅すると思うっ」

意外なところからの回答だが、まあカナメが知っててもおかしくはないか。

試してみるように、俺は手近にふわふわと綿毛のように浮かぶ魔力の粒を手にとって指先で強めにつまんでみると、はじけて消えたキラキラと光る粒子がゆっくりと薄れて消えていく様に、なんとなく見とれてしまう。

「そういうこと、だよっ」

「ふーん……体が魔力できてるから、やつつけると消滅、か……」

そういや、俺の体もそうだってナイアガラが言ってたな。神気、だ
つけ？ が空っぽになると消えるんだろ」

「うん。でもシユウは大丈夫だろう。あたしがちゃんと補充するよ
う」

「そりやどーも。こりやますます人間離れだな」

「も、もし、僕の力でもいいなら、ぼ、僕が補充」

「ん？」

「なな、な、なんでも、ない」

なんだろな？ 神様と魔王から心配される不死身の肉体ってのは。
「ちよつとトイレ。先帰って……はもらえないな。カナメ、ちよつ
と待っててくれ」

コクンと首を振るカナメ。ふにふにと魔力の粒を指先で弄ぶのが
ら楽しいらしい。

「にしても、トイレ一つ行くにもカナメとの距離考えるって、やつ
ぱ不便だよな」

もう慣れてはきたが、ふとした瞬間に感じる不便さが自分の立場
を再確認させる。

カナメと吹水を残した俺は手近な扉から校舎に入って、最寄りの
トイレを探索。昼下がりの廊下の冷気に強まった尿意を全力で抑え
込む。なかなかのイメージンシーだ。

「それじゃもうちよつとウロウロして、我らが部長様の帰りを部室
で待つか……ん？」

というわけにもいかなさそうだな。さて、どうするかな。
面倒な選択はしたくないんだけど……はてさて、どうしたものか
ね。

とはいっても、目の前に現れた『尿意とは別のイメージンシー』
は、どうやら俺の人生をからめ捕る気満々のご様子だ。

考えながら歩くっていうのはどうにも性に合わない。だから考え
ずに歩く。そうすれば目の前の事態を解決する神の啓示が空から降
ってくるでも思っているように。

なさそうだな。神様すぐそこにいるもんな。

「はあ……まあ、第一発見者が俺なのが、せめてもの救い、か」
とりあえず、トイレだけ済ませよう。ちょっとぐらい現実逃避し
てもいいだろ。

勇者？ 現る

「ねえ副会長、マジでやんの？ いくら何でもやりすぎじゃないかな？」

「何言ってるんだ！ 俺たちが満貫寺の秩序と平和を守らないでだれが守るんだよ？」

「そうはいつでも俺達ただの生徒会だぜ？」

ギロリと、瞳に危ない光がともる。言った瞬間に、自分の一言が致命的だったことに気がつくが時すでに遅しだ。

「ただのって、そんな覚悟で会長やってるとか、信じらんねえ！ 生徒会長たるもの」

「わーかった、わかったから腕ひしぎ十字はといてくれ。痛い、もげる」

スカートの裾からこぼれる細い太もは体脂肪などというものは縁がなさそうなほどにほっそりとしている。にもかかわらず、技の完成度は抜群だ。身長差を補って余りある破壊力に、会長、こと桑戸仁は苦悶の表情を浮かべている。

「まあまあ、暴力はよくないですよ……会計……さん」

「いい加減名前覚えろよな、あーちゃんも。俺の名前は木安、木安春だよ。もー、一カ月以上一緒に生徒会やってるだろ？」

腕ひしぎのまま首だけを起こして声のする方を向くと、そこには等身大のビスクドールが椅子に座っている。と、初めて見た人間ならだれでもそう思うだろうが、ところがどっこい立派に生きている。ただ、こんなところにゴシッククローリータ衣装が座っていれば誰だつて人形かそれに類する何かだと思っただけでしかるべし、だ。

ただしそのゴスロリ衣装、確かにひらひらふりふりで、レースの装飾や所々花をあしらったワンポイント、果てはエンボスの細かい刺繍なども施されているがよく見ると実はこれ、制服である。原形をとどめてはいないが、改造制服のなれの果てだ。というか、こ

ここまで来ると制服っぽさが微かにするゴスロリ衣装でしかない。

「あはは、あはは、ですねえ。どうも人の名前を覚えるのは苦手です」

「ったく、これで勇者だつてんだからな。おい、仁も何とか言えよな、おい」

「あのねえ、春ちゃんはもうちょっと乙女らしくした方がいいと思うんだよね。こんな関節技で屈服させるんじゃないやなくて女の色香で」

「ああん？ 関節が増える関節技かけつぞこら？」

「増えかけたけどね」

生徒会室の長机の上には各種お菓子にチョコレートが並べられているが、おもに副会長である四夜明日菜あすなのカロリーに消える運命のものだ。仁はそもそも甘いものは好まないし、春は菓子など食うなら米を食えという、日本の農家が聞いたら泣いて喜んで米の一俵や二俵ぐらい寄付されそうな主義主張の持ち主だ。というわけで、部屋の片隅では炊飯器が絶賛水蒸気噴出中だ。

「でもね、ちゃんとやらないとこの世界が魔物でいっぱいになっちゃうですよ」

きのことタケノコどつちにすべきかを真剣に悩みながら、明日菜が呟いた。これだけを聞けば頭が宇宙からの電波を受信して邪気眼か中二病でも発症したのだろうと考えるのが妥当だが、そういうわけでもないらしい。

それが証拠に、空いた方の手でピンク色のふわふわした光をつまんで握りつぶすと、蛍のような光はパツとはじけて消滅する。杏子の生み出した魔力を消滅させたというわけだ。はっきりとその光が見えているのは、他の二人も同じらしい。

「不っ思議だよな。ある日突然だもんな。びっくりしたわ、朝いきなり会議で「魔王を倒さないと世界が闇に包まれるです」だっけ？

あーちゃんぶつ壊れたと思っただわ」

炊飯器の炊きあがりまでのカウントダウンに目をキラキラさせる春の意識は、八割が米二割が会話といったところか。

「たしかに、これで例のわけわからん夢見てなきや、俺達も信じなかつたよ」

「嘘つけ、おめえは何があつても明日菜の味方のくせに」

「な、何言つてんだよ！ そ、そ、そ」

わかりやすい青春の構図だが、例にもれず仁の行動の意図するところに明日菜は気が付いていない。味方がいるのはうれしいな、程度だ。それを底意地悪くほくそ笑みながら眺める春、というのがこの三人の定番だ。

「んだけだよ、マジで摩訶不思議だよな。三人そろつておんなじ夢見るなんてよ。しかも勇者のお告げだもんな。どこの宗教だよつて思つたし」

「だから、ちゃんとやるです。きつと魔王はこの学校にいます。そう勇者の勘が告げてるです」

「おー、出たぞあーちゃんの『勇者の勘』が。これのおかげで俺たちめっちゃ大変だったつーの。科学部が怪しいとか何とかいうから解散させてみたら全然関係ねーし」

「あの人達には悪いことしたね。部室も天王寺さんに乗っ取られちゃつて使えないみたいだし。あの人、いろいろ問題起こすからついでに大人しくさせたかつたんだけどなあ」

「つつーか、あいつが大魔王みたいなやつだよな。それだつたら納得できんだけどなー。マジで違うのかよ？」

炊きあがりまでの残り時間が三分を切つた炊飯器は、春の目には宝箱のように見えていることだろう。しかし、美緒の話のときだけはそれも一時中断、手近に転がしてあつた金属バットに手がのびる所々に見られるへこみは、先日の激闘の名残だ。

「うん。あの人からは特に魔力は感じないです。邪悪ではあるですけどね」

「それ、冗談に聞こえないから」

「ま、あいつはそのうち俺が狩る。世界の平和だの魔王だの俺にはピンとこねえけど、あいつはのさばらせちゃおかねえ。生徒会会

計の名のもとに」

「はいはい、バットかまえない。あ、炊けてるよ」

「うひょっ！ おっにぎり〜、おっにぎり〜。何はなくとも具はなくとも〜」

凄まじい手際でおにぎりの量産体制に入る春。女子高生が一升炊きの炊飯器を抱える姿というのは何やら倒錯的なエロティシズムを感じないでもないが、色気はない。

糖分が胸に貯蔵されているとしか思えない明日菜に対して、春は食った分がどこかに消えているとしか思えないシルエツトだ。『次元の狭間』の二つ名はだてではない。

「で、具体的に俺達もパトロールの強化、ってわけ？」

足元に現れた謎の生物を一瞥もせず踏み潰して、光へと変える。ネズミや小鳥のような、どこか愛嬌を感じる姿をしているだけに、見てしまうと倒すのが忍びないようだ。

「そうです。ここ数日、魔力が強まってきたからですから、もしかしたら何かあるかもと、勇者の勘が言ってるですよ」

「こーんなにかわいいのにな」

床に座り込み、両手ではおにぎりを作りながら、足の指で器用に別の謎生物をつまみあげる。おかげでスカートはめくれあがって中身が御開帳されているが、本人はさほど気にしないらしい。

「でも魔物です。心を鬼にすることも、勇者には必要なのです」

「まあ、ドラクエのモンスターもかわいって戦えなきゃやられるもんな」

「むぐもぐもぐもぐむぐむぐむぐぬんぐんぐんぐ」

「食ってからでいいぞ」

「ごっくん」

「まあな」。かわいいからってタヌキをやっつけないと野菜も食い荒らされるもんな」

喩えとしてはどうかと思しながら、大筋でははずれではないと判断して仁も同意する。ただ、この時の仁の注意のほとんどは、驚く

べき速度で消費されてゆく白米おにぎりに集中している。手品としか思えない。「消えた」という表現が驚くほどしっくりくる。

「というわけです。頑張るです、会長」

「え？ 俺え？ なんか今回俺ばっか活動して」

「やっってくれる、ですよね？」

きのことタケノコを両方消費しきった手が、ポツキーに伸びかけたところでふと止まり、静かな視線が仁に向けられる。

どこまでも無邪気で、まっすぐで、絵にかけば星やシャボンのエフェクトを何重にもかけなければいけないような瞳は、それだけで勇者の素養を物語っているようだ。ちよつとうつろで焦点があつてない感じは決して眠いからではない。こういう目なのだ。

「ん、あー、だな。ん〜」

「素直に言えよな、俺に任せとけ、って。どーせ断らねえもぐもぐもぐもぐ」

「うるさいな。黙って食ってる」

「（ごっくん）だから口にももの入ってる間は喋ってねーだろ」

「だからってもの言いたそうに、何かを伝えたそうにするなよ。さっぱりわからん」

「ったく、乙女心の一つも読めねえで何が会長だよ。ったく」

「お前らは会長をなんだと思ってる」

「雑用係」「実働部隊？ です」

「よくわかったよありがとう」

鼻で笑いながらまんざらでもなさそうなのは、Mだからだ。本人に自覚がないのは唯一の救いだらう。

「なので、今日からはパトロールです。縦一列で、魔物退治です」

「うーい」

「じゃあとりあえず」

甘いものがぶちまけられた机の上に仁が広げたのは数枚の「コピー紙」。

生徒会へのご意見ご要望を投書形式で受け付けるといふ、どこの

学校にもありがちな企画だが、ここ満貫寺も例外ではない。ただ他と違って、今年の生徒会のすごいところはその実行力にあった。

投書したご意見ご要望へのレスポンスはほぼ百パーセントという驚異的な数字を叩き出しているのだ。これはひとえに、副会長である明日菜の「やってあげるです」の一言に逆らえない仁のおかげなわけだが、そこに青春の甘酸っぱさはない。

それでも結果だけを見ればきちんと実行する生徒会ということになるわけで、今日も今日とて生徒の個人的な恨みつらみから、部活同士の積年の軋轢まで色とりどりの問題ごとがぶち込まれているというわけだ。その中の一枚をつまみあげて、仁は言う。

「お化け退治、てのが来てるんだけど」

もちろん答えのわかりきった疑問文に、春は目も耳もくれずの残りの飯をやつつける。

「ちようどいいです。やってあげるです」

こうして歯車は回り出した。どっちに向いて回ってどこに行くのか、そもそも自分の歯車が回っているのかさえわからない人間も巻き込んで、時計は回る。

踏み出した足が何かを踏んだらしく、ぱつと床にピンク色の光がはじけて消える。と同時に何故か鳴り響く、どこかで聞いたことのあるファンファーレ。

「お、あーちゃんレベル上がったな」

幽霊？ 搜索

「マミーマートに八時集合」

若干不服そうな顔で部屋に戻ってきた美緒は、それだけを告げるところからともなく引つ張り出してきた寝袋にくるまって、寝息を立て始めてしまった。住んでるのか？

もちろん、部の主様がそんな有様なのでその日の部活はその場で一時解散。午後八時という健全と不健全の境界線のような時間に持ち越しとなったわけだ。

もちろん、早く帰ったからといって、自宅で俺を待っているのが安息であるはずもなく、たっぷり七時半まで店の手伝いをして、ようやく七時四十五分。シャワーですっきりしたケツを自転車のサドルに乗っけるにいたったわけだ。

ちなみに、鬼母の経営する喫茶店は、カナメというマスコットのおかげで客足が右肩上がりらしい。だからって俺がフロアに出ると露骨にがっかりするなよな、客ども。あとおっさんども、ナイアガラメイド服に期待してそわそわと長居するのやめる。

昼間は頬に受ける風が心地よい程度だったが、さすがに夏のまだ遠いこの時期の夜は、自転車の風といえども馬鹿にはできない。薄い長袖一枚というのは、さすがに応える。

「もう一枚必要だったな、こりゃ。あーさみい」

「寒い？ 貸そうかあ？」

後ろの荷台に腰かけたカナメが、心配そうにシャツの裾を引つ張っている。

「いや、いい。すぐそこだし」

それに、カナメのジャンパー取ったとなれば、殺される。関係者各位に、一回ずつ。

「それより、そっちこそ寒くないか？」

「うん、ぜんぜん。華美のくれたすかじゃん、暖かいよう」

そりゃよかった。暖かいから？ まさか。俺がよかったと言ったのは、そのスカジャンに書かれている文字を理解できなくて、って意味だよ。神様に『天魔覆滅』なんて刺繍の入った服着せるなよな。「こんにびに、美緒がいるかなあ？」

「さあな。あいつの場合もしかしたら大魔王の封印ばりに寝てもおかしくねえから、次に目覚めるのは百年後かもな」

「だとしたら何という幸せだろうか。俺も幸せみんな幸せ。世界が混乱に陥ることもなく、まさにハッピーエンドだ。ま、無理なんだけどな。」

「こんにびに、って遠いのお？」

「いや、そこ曲がつてすぐの、ほらあの黄色い電飾の看板だ」

顎をしゃくつて示した先には、蛍光灯で裏から照らされた黄色の看板。マミーマートだ。全国展開をうたつてはいるものの、このあたりの地方に集中しているせいか品揃えは地域密着型だ。近所で採れた野菜を売ってる店もあるらしい。田舎万歳。

「二十四、だあ」

「一応コンビニだからな。でも、深夜なんて買い物来るやついんのか？」

都会なら夜のコンビニというのは不良や良からぬ大人のたまり場、国道沿いならトラックの運ちゃん憩いの場にもなるんだろうけど、ここはそんな気配は微塵もない。幽霊が来るために開けてる、といわれても信用できるレベルだ。オリジナルブランドの格安商品？ 何それおいしいの、って感じた。

田舎らしく無駄にだだっ広鵜駐車スペースには、一台軽トラが止まっているだけという、店の現状をリアルに物語っていた。

そんな中だったので、駐輪場にどっかりと鎮座した一台のバイクはひと際目を引いた。バイクや車にさほど詳しくない俺にはよくわからないが、何やらめっちゃめっちゃ速そうな奴だという印象を与える一品だ。

「すっげ。ピッカピカだな」

隣に置いた俺のチャリがいつもの三割増しでみすばらしく見えてしまう。それほどにバイクはピカピカに磨きあげられており、エンジンやマフラーは街灯も月の明かりも漏れなく反射してキラキラと輝いていた。

「どうしたね？ 盗んだバイクで走りだしたくなかったかね、しょうね……なんだ、シュータローではないか」

折よく自動ドアの向こうから缶を片手に現れた美緒の姿に、俺は度肝を抜かれたわけだ。フルフェイスのヘルメット片手に缶コーヒ―、バシツと決まったデニムのホットパンツが、ハリウッド映画のヒロインみたいなんだから悔しいよな。ファツシヨンは気合いだよ、と言い切るだけはある。この寒いのに大したもんだ。

「お前のかよ。まあ似合うっちゃ似合うけど」

「いや、私のはそっちだ。私は普通二輪の免許はまだ取得していないのでね」

え？ そっち？ って言われてその向こう側を見ると、確かにそこにも一台の二輪車が鎮座ましまして。こちらもそれなりに綺麗にはされているが、磨きあげられているというわけではないし、形も速さとは縁がなさそうだ。その代わりと言っては何だが、実に実用的で親しみと愛着を覚えるスタイル。おそらく世界で一番有名な、日本を代表する二輪車。スーパーカブ。俺でも名前を知ってるレベルだ。

「お前、カブにフルフェイスで乗ってるのかよ？」

「安全第一だ」

似合わねえ言葉だな、と思っっていると続きがあった。

「これならいつ何時何に襲われても大丈夫だ」

納得。ですよー。

「んじゃ、あとは委員長が来れば揃うわけだな」

「もう来ているよ。中で会計を済ませて出てくるはず……ん、きたきた」

ピロピロン、というチャイムに反応してそちらを見ると、確かに

そこには吹水の姿があつたわけだが、どういうことだ？ できの悪いコラーージュを見せられている気分だ。

首からは全くいつも通りの委員長。ちょっと眠そうなのはもう夜だからか？ 早いな。肩の出たワンピースに履き古したスニーカー、羽織るようにならして着ている花柄ニットのカーディガンはうっすらとピンク色。この時点ですでにちくはぐな感じは否めないが、そんなものは微々たる誤差だ。何より際立っているのは、両手につけられたいかつい皮手袋に、肘からぶら下がるフルフェイスのヘルメット。まさか、うそだろ？

「ほ、僕のバイク……興味、あるの？」

「マジで？」

「マジ、で」

そのかつこで乗るの？ スカートで？ ってか、吹水が？ バイクに？

「ほ、本当はもっとおっきいやつのほうが強そうかと思ってたんだけど、僕の体格だと、このあたりが限界みたいで。重たくって」
「充分だろ」

バイク業界に詳しくない俺には、上がどこまであるのかは分からないが、これよりでっかいバイクに乗っている吹水は、なんか、イヤだ。

「にしても、これで探して回るのか？ 俺、チャリだからついていけないぞ」

「うん、さすがにこれは私も計算外だった。委員長君にこんな才能があつたとはね」

「ご、ごめんなさい。乗り物、これしかなくて。僕、自転車に乗れないから」

「そうか。ならやむを得ないな。私の後ろに乗りたまえ。幸いヘルメットもあるし、フルフェイスだ。これなら顔がばれることはない」

何か色々おかしいが、もちろんスルーだ。世の中って不思議な事がいっぱいありますよねー、って阿呆のふりをするのが賢い生き方

だと知った十五の夜。

「ナイアガラはこねーのか？」

吹水の背中に背負われたウサギからうさぎが顔を出した。ウサギ形のリュックつて、それであるバイクに乗って来たのか。シールドすぎるだろ。

「うん。他に用事があるんだってえ。放置ふれえだよ」

「どこでそういう単語覚えるんだ、まったく」

「そっか。言っちゃなんだけどちよつとほつとした。あ、絶対本人には内緒な」

その気持ちはわかる。激しく同意だ。とはいっても、出がけに「何かあった際にはおわかりでござますね？」と、命も凍りつくような視線とアイアンクローを頂戴した身としては、ある意味いてもらった方がよかつたのかもと思わないでもない。

「では、超科学部活動開始だよ！」

「「おお〜」」

美緒の宣言に声と拳を上げて賛同した吹水とカナメ。ひらひらワンピースと天魔覆滅なスカジャンという凸凹コンビが、夜の街に繰り出した。

「まあ、見つからないんだけどな」

先に行くカブのテールランプをぼんやりと追いかけているながら、答えを知っている俺は誰にも聞こえないように一人ごちた。

トイレから出るときに、手を拭きながら目を閉じた。いなくなつてたらいーな。でもいるよなーたぶん。そんなこと考えながら目を開けると、やっぱりいた。

「ですよねー」

ハテナマークが頭の上に飛び出しているのが見えそうな、見事な角度で首をかしげているのは初めて見る女の子だが、そいつが人ではないことは一目見て分かった。だって見たことないだろ？ 三十センチぐらい宙に浮いて歩く、ふりっふりひらっひらなドレスみたい

な服着た（これはあってもいいか）、エルフ耳の女の子なんて。髪なんかピンクだぞピンク。もちろん二次元じゃない。厚みがあつて、しっかりそこにいるわけだ。

「これで謎の喋るちっこい生物と宝石キラキラのスティックを持つてれば、日曜朝八時半つて感じだな」

「はちじ、はん？」

「いや、こつちの話だ。忘れてくれ」

とれるんじゃないかってほど首を傾げる。瞳は純粹な興味と怖れが混在した不思議な色を灯している。だろうな。なんせ自分が何者かさえわかつてないつて顔だ。

「見えるの？」

「かなりくつきりはつきり。見えちゃつて、ますね、はい」

まあ、この一言でこの少女の出自やら何やらが薄ぼんやりと想像できてしまたわけだが、気づきたくなかつたな！。

「ねえ、私つてなんだろう？」

「うん、なんだろうなあ？ 見た感じだと変身魔女つ子で最近はい子とオタクとニートと大きなお友達のあこがれの的かな？ 俺の知識をもとに判断するなら、魔女かな？」

まあたぶん後者で確定なんですけど、さあどうしたもんかな。自覚なさそうだし。

「まじよ？」

「うん、魔女。悪いこと、する？」

ふるふると首を振る。うん、どうやら悪い奴ではないらしい。自己申告だが。

「魔法、使う？」

ふるふる。うん、じゃあさらに一安心。

「えー、つと……人間滅ぼしちゃえーとかむずむず？」

「仲良く、なりたい」

うん、魔王があればなら生まれる魔物もこれなのか。さつきまで片付けてたちっこいのも、なんか妙に人懐っこかつたもんな。

おっかなびつくりこっちの返答を待つ少女は、叱られているみたいに縮こまっている。こんなときどうすればいいのか、俺の人生経験だけでは最良の答えを導き出すのは難しそうだ。弟や妹でもいれば別なんだろうか。

ただ、一つだけ確実に言えることがあった。

「あんな、今こわいお姉ちゃんがお前のこと探してるから、それにだけは見つからないようにした方がいい」

「こわーい？」

「そう。魔王より魔王で魔女より魔女な、俺達のボス」
「ぼす」

まあ、この表現は間違っではないだろう。嘘でも大げさでも紛らわしいでもない。むしろ足りないくらいだ。大魔女王、とかなら丁度いいくらいか？

「とりあえずあっちには近づかないようにウロウロしてりゃいい。学校なら大丈夫だろ」

「うん」

部室の方を指差した俺に魔女は、小さくうなずいて返事をした。そのぐらいいしか俺には言えねえよ。すまんね、ふがない俺で。

そう言っつて、逃げるように立ち去ろうとした俺の背中に、小さな声がかけられる。

「ねえ」

「んあ？」

立ち止まる。後ろ髪を引かれるのとはまたちよつと違うものが、足を鈍らせる。あとになって思えば、たぶんあれは罪悪感とか、そういう類のものだったんだろうな。

「また、会える？」

曖昧に笑って、手を振った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7035x/>

かみ・つき

2011年10月20日02時02分発行